

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

永久保存（10-5）

兵庫県文化財調査報告 第90冊

おろち
落 地 遺 跡

1991. 3

兵庫県教育委員会



山伏峠(たきぬき峠)

大町

中津川

木曽川

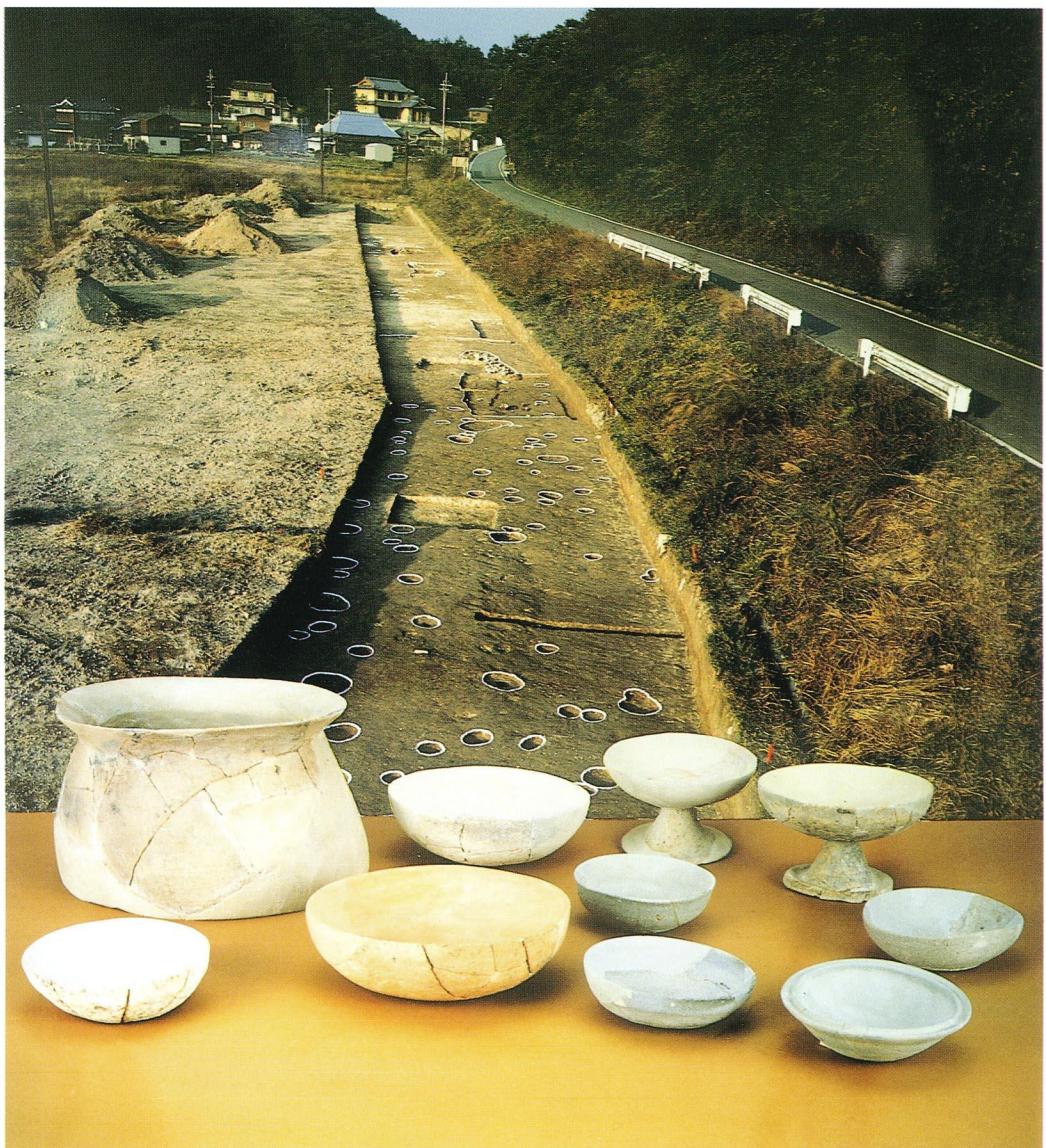
兵庫県文化財調査報告 第90冊

おろ
落 地 遺 跡

1991. 3

兵庫県教育委員会

巻頭図版 1

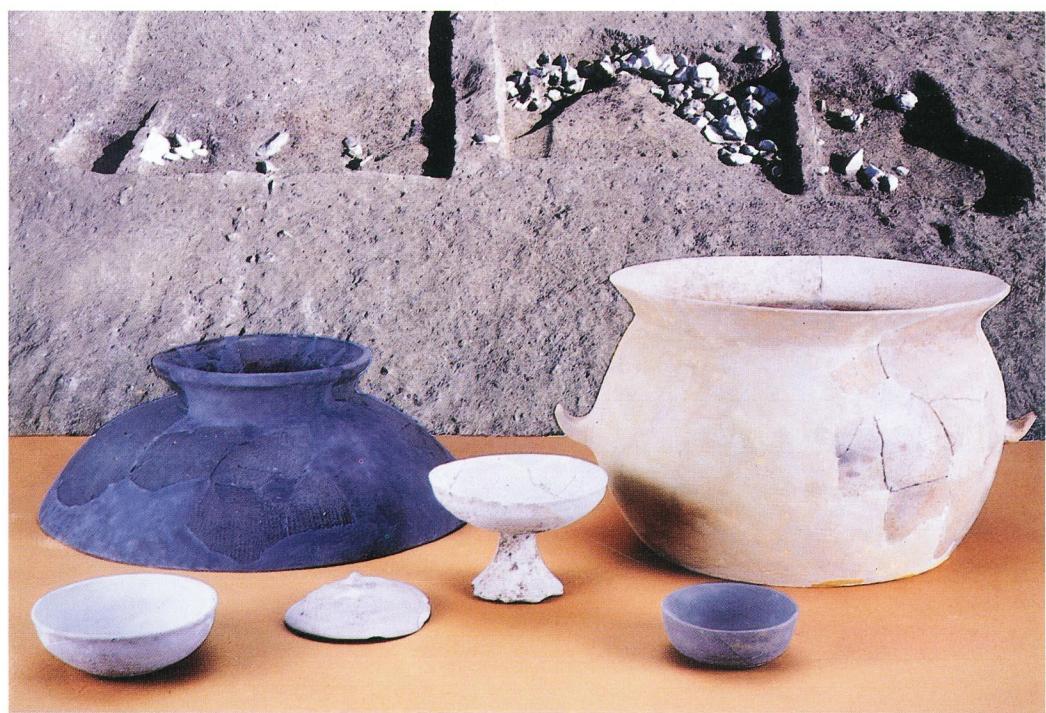


SD 02 出土土器

巻頭図版 2



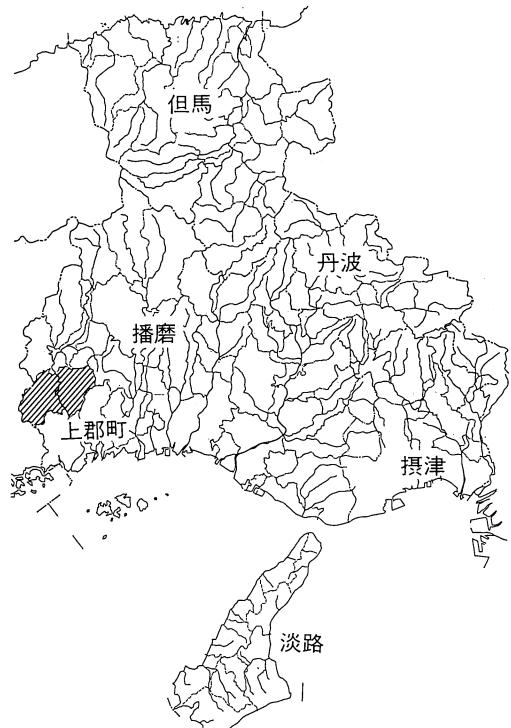
落地遺跡 空中写真



SD 01 出土土器

例　　言

1. 本書は、兵庫県赤穂郡上郡町落地に所在する『^{おろち}落地遺跡』の埋蔵文化財調査報告書である。
2. 調査は、兵庫県土木部上郡土木事務所の委託を受けて、兵庫県教育委員会が実施したものである。確認調査は昭和63年度に、全面調査は平成元年度に行った。
3. 発掘調査ならびに整理作業は、兵庫県教育委員会が調査主体となり、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所渡辺 昇・村上泰樹・久保弘幸が担当した。
4. 確認調査は昭和63年11月21日～30日の6日間を、全面調査は平成元年10月2日～11月10日の18日間の合計24日間を費やした。
5. 全面調査については、株式会社上郡建設に作業委託をして実施した。
6. 本書で示す標高値は、兵庫県上郡土木事務所設定のB.M.を使用した値で、方位は磁北である。
7. 遺構写真は調査担当者が撮影したが、気球写真は写測エンジニアリング株式会社に委託して撮影した。また、図版1の空中写真は国土地理院撮影のものを使用した。
8. 整理作業は、平成2年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所で行った。
9. 遺物写の大半は(株)サンスタジオに委託して撮影した。阿部幸八郎氏に撮影戴いた。ただ、巻頭図版と一部については渡辺が撮影した。
10. 執筆は本文目次の通りで、編集は前田陽子の協力を得て渡辺が行った。
11. 本報告にかかるスライド・図面などの資料は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所（神戸市兵庫区荒田町2丁目1-5）に保管してある。また、出土遺物のうち鉄器は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所に保管してあるが、その他の遺物は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所魚住分館（明石市魚住町清水立合池の下630-1）に保管している。



上郡町の位置

本文目次

例言

I. はじめに

1. 調査に至る経緯	渡辺	1
2. 確認調査の経過	渡辺	2
3. 全面調査の経過	渡辺	3
4. 整理調査の経過	渡辺	8

II. 地理的環境	村上	9
-----------	----	---

III. 歴史的環境	渡辺	11
------------	----	----

IV. 確認調査の結果

1. 調査に至る経緯	村上	17
2. 調査の概要	村上	17
3. 小結	村上	20

V. 調査結果

(1) 調査概要	渡辺	21
(2) 全面調査区の調査結果		

1. 住居跡

①SB 0 1	久保	25
②SB 0 2	渡辺	28
③SB 0 3	渡辺	32
④SB 0 4	渡辺	34
⑤SB 0 5	渡辺	34

2. 落ち込み

①SX 0 1	久保	35
②SX 0 2	渡辺	35

3. 棚

①SA 0 1	渡辺	36
②SA 0 2	渡辺	36
③SA 0 3	渡辺	36
④SA 0 4	渡辺	36

4. 溝

①SD 0 1	久保	37
---------	----	----

②SD 0 2	渡辺.....	42
③SD 0 3	渡辺.....	46
5. 上層の遺構.....	渡辺.....	47
6. 上記以外の遺構出土の遺物.....	渡辺.....	47
7. 包含層出土の遺物.....	渡辺.....	48
(3) 飯坂調査区の調査結果	渡辺.....	56
(4) 立会調査区の調査結果	渡辺.....	58
VI. おわりに.....	渡辺.....	59

挿 図 目 次

第1図 調査地遠景.....	1
第2図 調査風景.....	2
第3図 調査風景.....	3
第4図 調査風景.....	6
第5図 調査地点図.....	7
第6図 整理作業風景.....	8
第7図 落地遺跡周辺の微地形.....	10
第8図 碇岩遺跡 尖頭器.....	11
第9図 落地遺跡の位置と周辺の遺跡.....	12
第10図 別名遺跡 銅劍.....	13
第11図 原田中遺跡 墳丘墓.....	14
第12図 凤張1号墳.....	14
第13図 与井1号墳.....	15
第14図 樁峠から見た神明寺遺跡.....	15
第15図 上郡町内出土瓦実測図（1：栖雲寺、2：八保、3・4：法雲寺）.....	15
第16図 神明寺遺跡 磂石.....	16
第17図 落地遺跡遠景.....	16
第18図 確認調査坪配置図.....	18
第19図 確認調査検出遺構.....	19
第20図 確認調査土層断面図.....	19
第21図 土層断面図.....	22

第22図	落地遺跡 遺構配置図	23・24
第23図	S B 0 1 実測図	26
第24図	S B 0 1 出土土器実測図	27
第25図	S B 0 2 実測図	29
第26図	S B 0 2 出土土器実測図	30
第27図	S B 0 2 出土鉄器実測図	31
第28図	S B 0 3・S A 0 3 実測図	32
第29図	S B 0 4・S B 0 5・S A 0 4 実測図	33
第30図	S X 0 2・S D 0 3 実測図	35
第31図	S D 0 1 実測図	38
第32図	S D 0 1 出土土器実測図(1)	39
第33図	S D 0 1 出土土器実測図(2)	40
第34図	S D 0 1 出土土器実測図(3)	41
第35図	S D 0 1 出土鉄器実測図	42
第36図	S D 0 2 実測図	43
第37図	S D 0 2 出土土器実測図(1)	44
第38図	S D 0 2 出土土器実測図(2)	45
第39図	S D 0 2 出土土器実測図(3)	46
第40図	上層遺構 実測図(1)	47
第41図	上層遺構 実測図(2)	48
第42図	遺構 出土土器実測図	48
第43図	包含層 出土土器実測図(1)	50
第44図	包含層 出土土器実測図(2)	51
第45図	出土土器拓本	51
第46図	包含層 出土土器実測図(3)	52
第47図	包含層 出土鉄器実測図	53
第48図	包含層 出土石器実測図	54
第49図	包含層 出土瓦実測図	55
第50図	飯坂調査区 出土土器実測図	56
第51図	飯坂調査区 出土瓦実測図	57
第52図	立会調査の状況	58
第53図	落地遺跡 磓石	59
第54図	赤松啓介氏採集軒丸瓦	60

第55図	有年考古館蔵 瓦実測図	61
第56図	神明寺遺跡 瓦拓本（1・4：有年考古館、2・3：願榮寺蔵）	62
第57図	小犬丸遺跡 瓦拓本（報告書から）	62
第58図	落地遺跡全景	63
第59図	現地説明会風景	64

図 版 目 次

図版 1	落地遺跡周辺空中写真 (国土地理院撮影)	図版11 上) S X 0 1 · S D 0 1 全景(西から)
図版 2	調査区全景と飯坂調査区	下右) S D 0 1 全景(礫除去後)
図版 3 上)	調査区全景(気球写真、西から)	下左) S D 0 1 全景
下)	調査区全景(気球写真、東から)	図版12 上) S X 0 2 全景(東から)
図版 4 上)	調査区全景(東から)	下) S X 0 2 全景(北から)
下)	調査区全景(西から)	図版13 上) S B 0 2 · S D 0 2 全景(北から)
図版 5 上)	S B 0 1 · S X 0 1 空中写真	中) S D 0 2 全景(北から)
下)	S B 0 1 全景(後方はS X 0 1)	下右) S D 0 2 · S B 0 2
図版 6 上)	S B 0 1 (南から)	下左) S D 0 2 全景(東から)
下)	S B 0 1 (東から)	図版14 上) S B 0 3 ~ 0 5 · S A 0 2 ~ 0 5とピット群(空中写真)
図版 7 上)	S B 0 2 · S B 0 3 空中写真	下) 上層遺構 ピット群
下)	S B 0 2 · S B 0 3 全景(東から)	図版15 上) 飯坂調査区と源氏屋敷
図版 8 上)	S B 0 2 全景(北から)	下) 3 G 全景
中)	中央アゼ堆積状況	図版16 上) S B 0 1 出土土器
下)	鉄器出土状況	下) S B 0 2 出土土器・鉄器
図版 9 上)	S B 0 2 ~ S B 0 5 · S A 0 4 全景(西から)	図版17 S B 0 2 出土土器
下)	S B 0 3 · S A 0 4 全景(西から)	図版18 上) S B 0 2 出土土器
図版10 上)	S X 0 1 周辺 空中写真	下) S D 0 1 出土土器
中)	S D 0 1 全景(北から)	図版19 S D 0 1 出土土器・鉄器
下)	S D 0 1 全景(溝礫除去後)	図版20 上) S D 0 1 出土土器
		下) S D 0 1 出土土器

- 図版21 上) SD 0 1 出土土器
下) SD 0 2 出土土器
- 図版22 上) SD 0 2 出土土器
下) SD 0 2 出土土器
- 図版23 上) SD 0 2 出土土器
下) SD 0 2 出土土器
- 図版24 上) 遺構 出土土器
下) 包含層 出土土器
- 図版25 包含層 出土土器
- 図版26 上) 包含層 出土鉄器
中) 包含層 出土土器
下) 包含層 出土土器
- 図版27 上) 包含層 出土瓦(表)
下) 包含層 出土瓦(裏)
- 図版28 上) 包含層 出土石器・瓦
下) 飯坂調査区 出土土器
- 図版29 上) 飯坂調査区 出土瓦(表)
下) 飯坂調査区 出土瓦(裏)

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

落地遺跡は、兵庫県赤穂郡上郡町落地字飯坂に所在する遺跡で、早くから瓦が出土することを知られていた遺跡である。『播磨上代寺院跡の研究』でも落地廃寺として記載され、研究がなされている。また、地元では『源氏屋敷』と呼ばれ、瓦が出土することは周知の事実であった。

飯坂を越えて県道姫路上郡線が通っている。落地の集落の南側で国道2号線と合流し、県道は終わっている。近時、交通体系の整備から計画されている仮称播磨横断道（太子龍野バイパス・姫路バイパスなどの総称）や山陽自動車道の建設・国道2号線の拡幅工事などで国道2号線の渋滞が慢性化しつつある。そのため、特に東行きの車が飯坂を通って県道姫路上郡線へ迂回することが多くなりはじめている。

それまでは、生徒・児童・園児が通う通学（園）路として安全は確保されていたが、上記の理由で多くの車両が通行するようになり、通学路として危険が伴うものとなってきた。そのため、安全対策を主とした県道姫路上郡線の改良拡幅工事が計画されることになった。現在の県道を拡幅するもので、歩道を設置した2車線の道路が計画された。

しかし、落地の地域は『源氏屋敷』として地元でもよく知られた埋蔵文化財の包蔵地であることから、事業に先立って兵庫県上郡土木事務所から兵庫県教育委員会に遺跡の有無の照会があり協議が行われることとなった。その結果、当地一帯は遺跡が存在する可能性が十分に考えられるので、まず分布調査を実施することとなった。

分布調査は昭和63年5月16日に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 主査井守徳男・技術職員平田博幸によって実施された。その結果、濃密な遺物の散布は見られなかったものの全体的に須恵器・土師器などの分布が見られたので確認調査が必要となった。

その結果を元に再度協議が行われ、発掘調査を実施することとなった。



第1図 調査地遠景

2. 確認調査の経過

年度当初の計画では、落地遺跡の確認調査は予定されていなかった。しかし、兵庫県上郡土木事務所では次年度の本体工事を計画していることから、昭和63年度の調査の要請を受け、検討した結果、兵庫県教育委員会としても次年度の調査計画を立てる上にも確認調査は早急な取組が必要と思われたので、確認調査を年度内に実施することとなった。

確認調査は、 $2 \times 2\text{ m}$ を基準として行った。調査必要箇所北側から順に調査を行い、北から1グリッド・2グリッドと呼称し、合計19箇所の確認調査を実施した。ただ、3グリッドでは小面積ながら全面調査が必要と考えられる地点があり、その地点(飯坂調査区)については3グリッドを拡張し、全面調査として調査を終了した。

14~18グリッド間では遺構を検出したり、遺構面を確認していることから、全面調査が必要と思われた。また、5~7グリッド間では遺構・遺構面は存在しないが、旧河道と考えられる腐植土層から木器が出土したことから、第2次確認調査か立ち会い調査が必要と考えられた。

坪19箇所の確認調査の結果、約580m²の全面調査と約100m²の立会調査を必要とする結果が得られた。そして約8m²の飯坂調査区の小面積の全面調査を実施した。

調査は、昭和63年11月21日(月)から着手し、埋め戻し作業を行ったのち、11月30日(火)に管理引き継ぎを行って終了するまで、実働6日間を費やした。

11月21日(月)に現地で兵庫県上郡土木事務所工務1課担当職員の課長補佐赤松輝男・主任田中四七男両氏と用地幅杭の確認や調査方法などの最終的な打ち合わせを行い、午後から確認調査を開始した。21・22・24・25日と4日間確認調査を北側の1グリッドから順に行った。その結果14~18グリッドで遺構が確認されたことから、翌週の11月28日(月)に当初予定していなかった南側の用地内に19グリッドを設定して遺跡の広がりを確認したが遺構面は存在していなかった。また3グリッドでは小面積(用地幅が狭いため、遺構は用地外へ続いている)の全面調査であることから同日調査を実施した。調査対象地域が本年度は工事に入らないことから、実測・写真撮影が終わったものから順次埋め戻していく。29日に全ての埋め戻し作業を終了し、確認調査が終了した。

調査の組織

調査は全面調査・整理作業も含めて、兵庫県上郡土木事務所の委託を受けて兵庫県教育委員会が調査主体となって実施した。

調査事務 社会教育・文化財課

課長 中根孝司

文化財担当参事 日野和広



第2図 調査風景

副 課 長	高 坂 隆	
課長補佐兼		
埋蔵文化財調査係長	大 村 敬 通	
管理係長	山 口 幸 作	
主 査	井 守 徳 男	
調査担当		
主 任	渡 辺 昇	
技 術 職 員	村 上 泰 樹	
調査参加者		
北川 武・竹内 忠雄・西守 正弘・三島 義雄・赤松 豊子		
安東 繼子・田中 静子・山本 千里・山本ハナ子・山本マツノ		

第3図 調査風景

3. 全面調査の経過

前年度の調査結果を受けて全面調査を平成元年度に実施した。その際に谷部の立会調査部分も機械掘削と断面整形を行い、遺物包含層の有無などの調査を実施した。

調査は、1989年10月2日に調査区の杭打ちから始まり、11月10日器材などを引き上げ調査を終了するまでの実働18日間を費やした。最も気候の良い安定した時期に調査期間を設定出来たことによって調査は順調に実施出来た。

調査は、まず1989年10月2日(月)に調査区の草刈りを行い、調査前の状況写真撮影を行い、杭打ちから手がけた。この週は天候がすぐれず調査準備と機械掘削を行った。調査準備として写真用足場の組み立てやベルトコンベアの設置、調査事務所の建て上げ・整備などを行った。翌週から本格的に調査を開始した。北側から10mごとに1区・2区……と呼び、調査を行った。1区から順にまず上層の遺構から検出作業を行った。その際に土層の堆積状況を再確認するために昨年度の坪を底まで先に掘り下げ、断面観察を行ってから遺構面の検出作業を実施した。上層の遺構は南北両端の一部しか明瞭に検出されず、垂直的に2面に分かれるのは1・2区と11区より南側の両端部だけと判断出来た。そのため2~10区についてはさらに掘り下げ下層の遺構面を調査した。

10月16日の週は遺構の検出作業を行った。3~6区で竪穴住居跡と思われる遺構やピットなどを確認した。また、土師器甕などの遺物も出土しあり、写真撮影や実測作業を始めた。上層の遺構の実測も行い、その部分も面を下げた。両端部分は極端に遺構が減少し、遺物もほとんど見られなくなった。遺跡の小単位の南北の端を確認できたものと思われる。この週で粗掘りは終了し、ベルトコンベアなど撤去した。

落地遺跡発掘調査の見学に行つて

三年 西後加奈

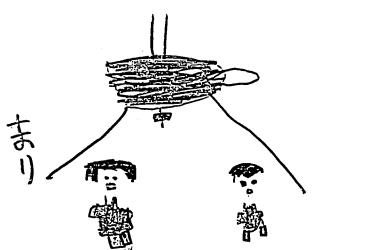
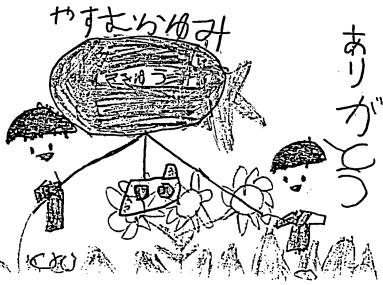
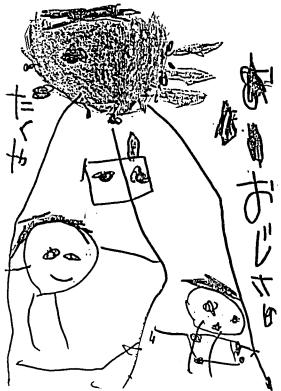
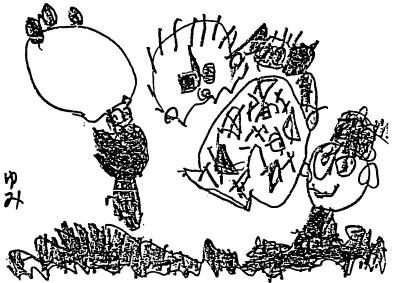
落地遺跡があるというので全校で見学にいきました。遺跡には住居跡がくつきりとほりだされていました。柱のあとがよくわかりました。またいろいろな土器があり人が住んでいたなんて私はしりませんでした。太田保でお話を聞きました。千三百年前に家があり人が住んでいたので、おじいちゃんが日記を書いていたので、すこし話を聞きました。もようがついているのがついていいないうのがありました。石があるところは、火をたいていたということや黒い遺跡は、火で黒くなっていることがわかりました。柱の跡をこわさずにほるなんてもずかしいと思いました。お風呂のようなどころもありました。みんなせつせつと作業をしているなかにおじいちゃんがいました。この遺跡のことといつまでも心にのこし忘れたくありません。きっとなわめもようの土器のこと、竹でつけられた土器のもようのことは私の頭にやきついではなれなくなりました。

落地遺跡発掘調査見学に行つて

四年 田中美沙

十月二十三日太田保に遺跡発掘調査を見学にいきました。現地で県の調査官の方に遺跡のことについて、説明を聞きました。この遺跡から出土した土器、昔あつた焼物は、女の人が作っていたことや、灰色の皿は韓国から伝わってきてはじめてできたということです。焼き物のものは丸や直線や垂直にまじわったものや、チエックや波線や花のようないうなものがあつたことや、昔あつた家の柱の高さは、一メートル六十センチメートルから一メートル八センチメートルくらいあるということを勉強しました。

説明してくれたおじいさんは、私たちによくわかるようにざわざわさせてくれました。そうして説明してくれました。説明がとてもよかったです。



日記

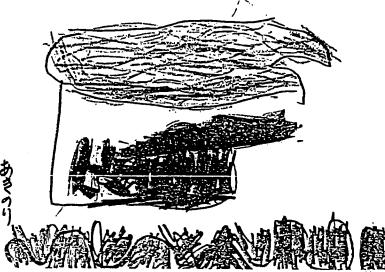
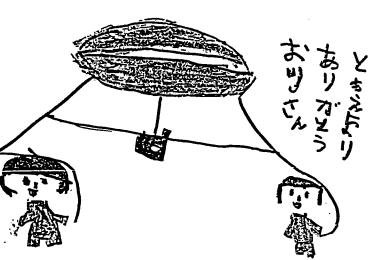
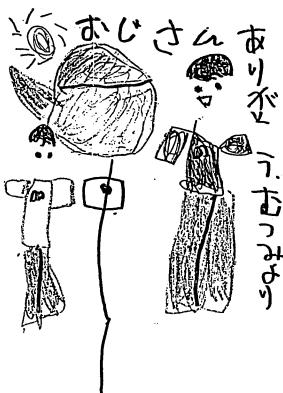
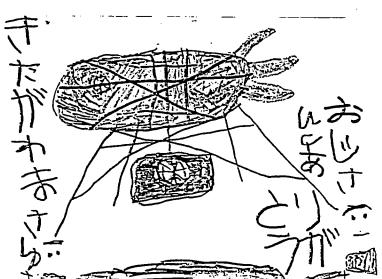
二年 山本 愛雄

十月二十五日（水曜日）天気 晴れ
気温二十度

「遺跡見学」

きょう、おろちのいせきをみにいきました。

いろいろなかたちのどきがありました。
もようのついているのや、ついていない
のや、茶色や、ねずみ色のもありま
した。
かまどに、していた石は、すすぐついて
くくなつていました。
いせきちょうどさはていねいにほつてい
ました。



10月23日の週は、遺構の掘り下げと、その記録(写真撮影・実測)を主とした作業を行った。23日(月)は梨ヶ原小学校の生徒が、26日(木)は船坂小学校の生徒が遺跡見学に来られた。24・25日は立会調査区の調査を行った。自然木がほとんどで遺物も数点しか出土せず、遺構面・包含層など存在しなかった。27日㈮は気球による空中写真ならびに全景写真を撮影する。生徒・園児をはじめ多数の方が見学に来られる。

10月30日(月)から11月2日(木)は遺構単位の撮影や遺物の取り上げ・図の補足などの作業を行う。1日に遺跡の堆積状況を確認し、下層の遺構の存在の有無を知るために重機によって東壁沿いをさらに掘り下げた。11月2日に工事検査を受け、遺跡を保護するためのグランドシートなどの片づけを始めた。

11月6日の週は、東壁の断面を検討し土層断面を実測した。後片づけを行い、遺物・器材などを搬出し、調査を終了した。

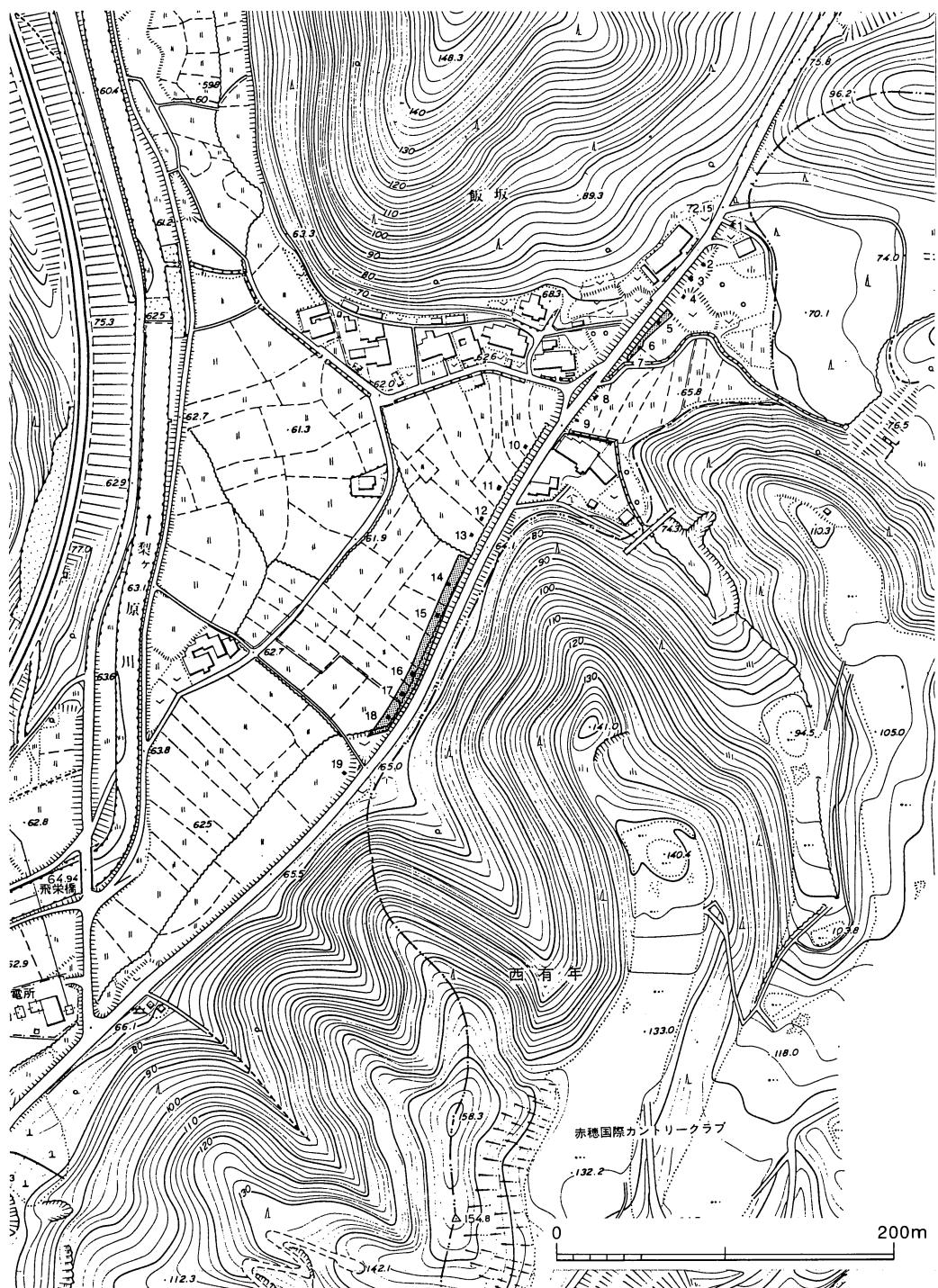
早くから『源氏屋敷』として周知されていることもあって、周辺の方々の理解も深く、また多くの方に調査に参加して戴き調査を終えることが出来た。その労を取って戴いた落地区長山本 嶽氏をはじめ落地の方々に感謝致します。大掛かりな現地説明会を設定しなかったにもかかわらず調査期間内に隨時見学して戴き、社会教育に携わる担当者として、良い仕事を遂行できた喜びを感じることができた。特に気球による空中写真撮影の時は、梨ヶ原小学校と梨ヶ原保育園の児童・園児と先生方が来られ長時間に渡って質問を受けたりして遺跡・遺物に接して戴いた。将来、文化財についての深い理解を得、身近なものとして接して戴ければ幸いである。そのために、予定の時間以上に作業時間を費やして戴いた㈱写測エンジニアリングの担当者に感謝致します。その時の感想文などを児童・園児から寄せられたので紹介します。今後とも文化財の活用を図られ、さらに理解を示して戴けるよう願います。

調査の組織

調査事務	兵庫県教育委員会埋蔵文化 財調査事務所
所 長	大 江 刚
副 所 長 兼	
調査第二課長	村 上 紘 揚
副 所 長	才 木 繁
総 務 課 長	小 池 英 隆
主 査	池 田 正 男
調査担当	
主 任	渡 辺 昇



第4図 調査風景



第5図 調査地点図

技術職員 久保弘幸
 作業委託 上郡建設
 現場代理人 岡本実

4. 整理調査の経過

整理作業は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所で平成2年度に単年度事業として実施した。水洗い作業は発掘調査段階に現場事務所で終了していたので、ネーミング作業から報告書刊行までの作業を行った。

調査の組織

調査事務 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

所長	内田 隆義
副所長	村上 純揚
副所長	才木 繁
整理普及課長	松下 勝
総務課長	小池 英隆
技術職員	岸本 一宏

調査担当

主任	渡辺 昇
主任	村上 泰樹
技術職員	久保弘幸
嘱託員	前田陽子
嘱託員	和田寿佐子
嘱託員	西野淳子
嘱託員	中田明美

発掘調査・整理作業にあたって多くの方々の協力・教示を得た。不特定多数の方々に有形無形の協力を得たが、特に下記の方々には写真提供を受けるなどの協力を得た。明記して謝意を表します。

深澤景弘・松岡秀樹・宮崎素一・山本巖・

荻能幸



第6図 整理作業風景

II. 地理的環境

落地遺跡は兵庫県赤穂郡上郡町落地に所在する。上郡町は兵庫県の南西部に位置し、西側は岡山県と接し、旧国でいうと備前国と国境をなしている。県内では北に佐用郡上月町・南光町・三日月町と接し、東は揖保郡新宮町・相生市、南は赤穂市とそれぞれ隣接している。

上郡町は標高400m前後の山地が大部分を占めるが中央部を南流する千種川を中心に、その支流である鞍居川、安室川、梨ヶ原川の河川沿いに狭隘な谷底平野が形成されている。落地遺跡は岡山県備前市と境をなす船坂峠付近に源をもつ梨ヶ原川の右岸に位置している。この梨ヶ原川沿いには幅200m前後の狭い谷底平野が形成され、落地遺跡の西側で標高317mの星ヶ峰の支尾根が迫り平野の幅を減じている。

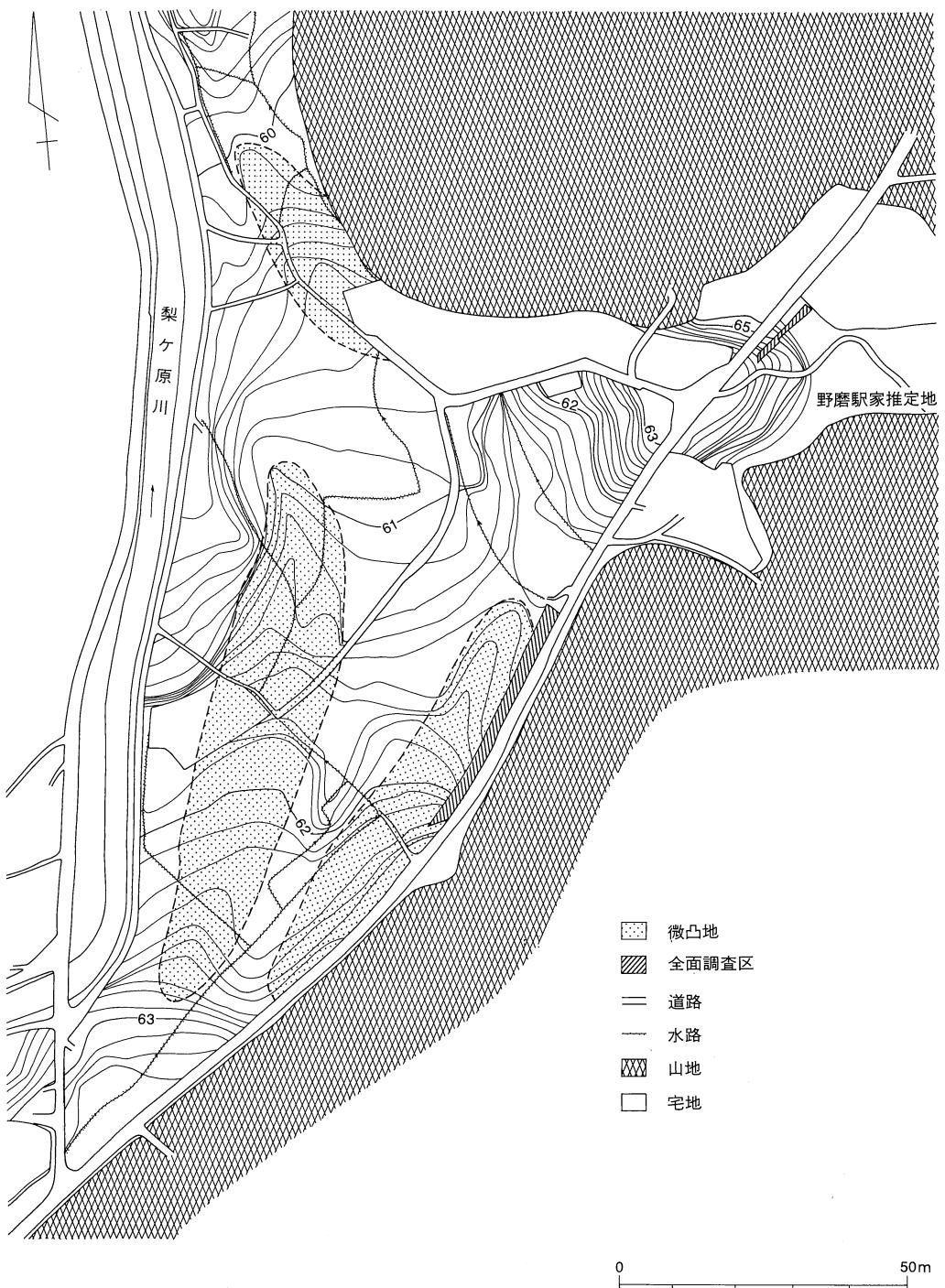
第7図は遺跡周辺の微地形等高線図である。この図を詳細に観察すると驛家推定地とされている飯坂集落付近は、小規模な谷部からの土砂の堆積によって扇状地が形成されている。この扇状地の西側、梨ヶ原川右岸には2条の微凸地が南北方向に延びている。西側の微凸地は標高65m付近で梨ヶ原川に接している。東側の微凸地は扇状地の先端で一旦途切れ、飯坂集落の北側で再び北方へ延びている。これらの微凸地は梨ヶ原川の氾濫によって形成された自然堤防と推察される。

現在の梨ヶ原川は、落地遺跡の南側で進路を南東方向から真北に急に変えている。西側の微凸地は、現在の梨ヶ原川とほぼ並行に並んでいるのに対し、東側のそれは北東方向、すなわち谷の開口部に向かって延びている。またこれらの微凸地の間には微凹地が認められる。

以上の状況が微地形等高線図で看取れる。一つの判断として、両微凸地間の微凹地は、旧梨ヶ原川の痕跡と考えられ、旧梨ヶ原川は扇状地の先端を削り取り、再び遺跡の北側で現在の梨ヶ原川と合流したと推察される。その後、梨ヶ原川は進路を変えて現在の位置を流れ、西側の微凸地を形成したと思われる。西側の微凸地が形成されていく段階で、旧河道の凹地を徐々に埋没させ、梨ヶ原川の右岸に安定した微高地を形成し、現在に至ったと理解される。

第20・21図の確認調査および全面調査の土層図を見ると東側微凸地の下層は砂礫層である。この砂礫層の堆積レベルは、調査区南側を最高とし、北側微凸地の先端に行くに従い高度を下げている。その後、砂混じりシルトが堆積し、微凸地先端の調査区北側では1m以上、南側では20~30cmと薄く堆積し微高地が平坦化して行く。

調査の結果では、東側の微凸地上から不定形刃器が出土しており、少なくとも弥生時代中期には、前記した過程を経て安定した微高地が形成されていたと考えられる。このような微高地の発達が古墳時代初頭~末の時期に、ここに集落が築かれる地理的原因のひとつとなったと推察される。



第7図 落地遺跡周辺の微地形

III. 歴史的環境

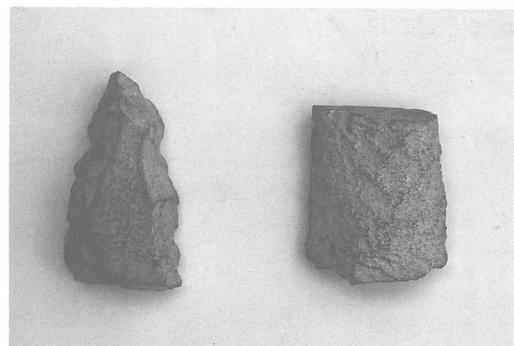
落地遺跡は、兵庫県赤穂郡上郡町落地に所在する遺跡で、全面調査(No.1)地点は字八反坪に、立会調査(No.2)地点ならびに飯坂調査地点は字飯坂に所在している。

落地遺跡周辺は、旧国名で呼ぶと山陽道に位置する播磨国に含まれる。しかし、保存状態が良好な『播磨國風土記』では残念ながら赤穂郡の記載を欠いていることから里名は明確でなく惜しまれる。『和名抄』では野磨郷に含まれるものと想定されている。

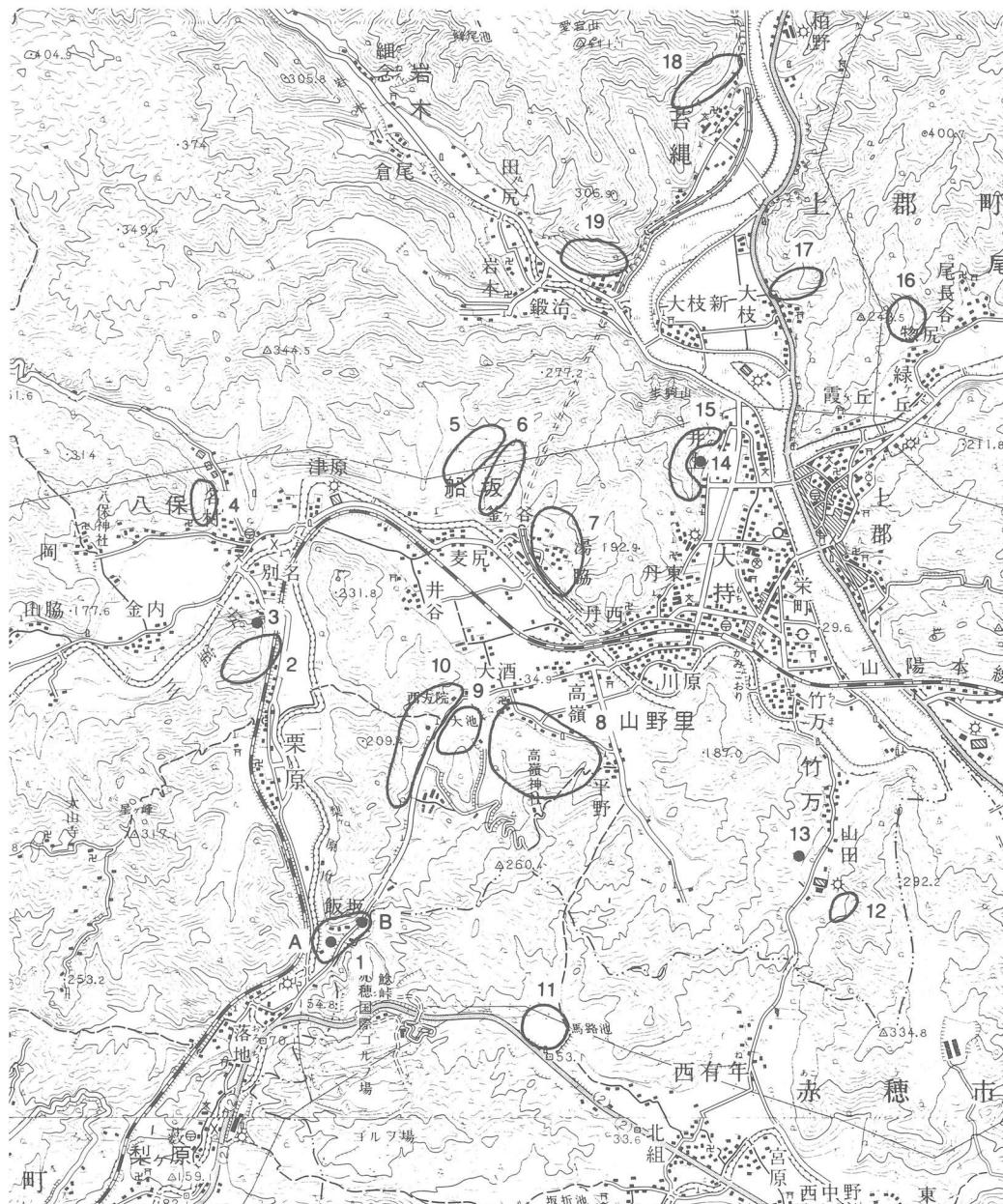
落地をはじめとした梨ヶ原一帯では今まで『源氏屋敷』と飯坂で横穴式石室を主体とする古墳しか知られていなかった。また、良く知られた遺跡として北方約2.5kmの梨ヶ原川と船坂川の合流する南側の丘陵上から銅劍3振を出土した別名遺跡が存在する。

周辺で最も古い遺跡は、赤穂市西有年の馬路池遺跡である。落地とは東南東の鯨峠を隔てたところに位置する。多量の石鏃が採集されている。土器を伴わない縄文時代早期の遺跡と考えられていた。赤穂市史編集に伴い松岡秀夫氏によって検討され、旧石器時代最終末の尖頭器を抽出された。千種川流域では確認されていなかった時期のもので、その意義は高いものと思われる。同種の小形の尖頭器は、播磨灘に面する赤穂市猪塗谷遺跡でも確認されている。ナイフ形石器などの確実な旧石器は赤穂郡内では出土していない。ただ、龍野市神岡町の大住寺皿池遺跡や太子町坊主山遺跡・北山向山遺跡ではナイフ形石器が出土している。千種川上流の佐用町長尾沖田遺跡でもナイフ形石器が出土しており、赤穂郡内でも今後確認されるものと思われる。

縄文時代の遺跡は、前述した馬路池遺跡がある。多量の石器が採集され、さらにタイプが多く細かく分類出来ることから、今後の縄文時代石器を検討する上で興味深い遺跡である。上郡町内では梨ノ木遺跡で少量の縄文土器が出土している。後期の土器片であろう。赤穂市域では塩屋の標高の低いところから遺跡が見つかっている。塩屋築田遺跡と堂山遺跡である。中期末から後期の土器が出土している。堂山遺跡では晩期から弥生時代さらに古代中世にかけての土器が出土しており、非常に低い不安定と思われるところに長期間生活を営んでいたことが明らかになった。小形尖頭器を出土している猪塗谷遺跡でも後期の土器が出土している。海岸部ながら谷に湧水点を持つことは一般的な縄文時代の遺跡の立地に共通する。ただ、後期からに限



第8図 碇岩遺跡 尖頭器



1. 落地遺跡 (A全面調査地点 B飯坂調査区・源氏屋敷)

2. 栗原古墳群
3. 別名銅劍出土地
4. 名村古墳群
5. 凤張古墳群
6. 釜ヶ谷古墳群

7. 湯脇古墳群

8. 山野里古墳群
9. 大池遺跡
10. 飯坂古墳群
11. 馬路地遺跡
12. 山田遺跡

13. 山田古墳
14. 井上遺跡
15. 井上古墳群
16. 惣尻古墳群
17. 大枝古墳群
18. 苔縄古墳群
19. 鍛冶古墳群

第9図 落地遺跡の位置と周辺の遺跡

られており、前期の同時期の馬路池遺跡とは異なっている。時期は断定出来ないながらも飯坂を越えた山野里大池遺跡で石鎚が採集されている。落地遺跡周辺でもこの時期の遺跡が存在する可能性は十分に考えられる。

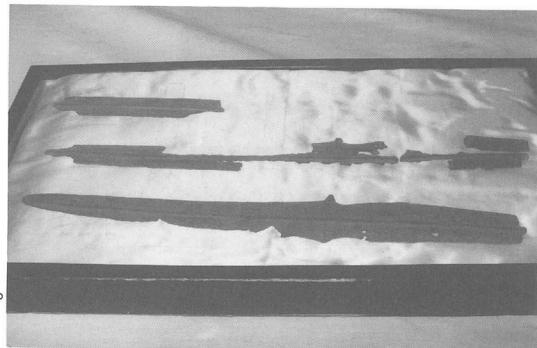
弥生時代になると遺跡は増大し、上郡町内をはじめ赤穂郡内各地に遺跡が広がっている。当地の弥生時代を代表するものと言えば、落地遺跡北方の別名遺跡の銅劍と赤穂市の上高野遺跡の銅鐸鑄型そして小型仿製鏡の出土した赤穂市・奥山遺跡の3つの青銅器出土遺跡が挙げられよう。

上郡町内では遺跡は多くは確認されていない。発掘調査例も寡少であることからも、遺跡数が少ないものと思われる。今後、遺跡が増加することは間違いないものと思われる。遺構が確認されているのは神子田遺跡で後期後半の住居跡が2棟調査されている。高田谷の安定した地域に遺跡は広がっている。周辺での中心的な集落になる可能性が高い。谷の向かい側には上郡町で最大の古墳群である中山古墳群・西野山古墳群が立地しており、北西には落地遺跡の東側の驛家である高田驛家と推定される神明寺遺跡が存在している。弥生時代から古代にかけて上郡町周辺での中心地域であろうと考えられるところである。神子田遺跡の住居跡出土の土器は僅かな時期幅が認められ、遺構では壁溝に拡張が認められることから長期にわたって家を存続させていたものと思われる。他に遺構としては、井上遺跡・羽山遺跡で土器棺が確認されているだけである。町内で弥生土器が採集されている地域を見ると、高田地区が多いものの大きな偏りではなく全域に遺跡が広がっていることが判る。

別名遺跡は古く昭和初期に不時発見されたもので、平形か中細形銅劍3口が出土している。3口セットで出土したことは重要であるが、形式が安定していないことが惜しまれる。釜島の六ツ岩遺跡も弥生時代の祭祀遺跡として興味深い遺跡である。

赤穂市所在の上高野遺跡は銅鐸鑄型が出土した遺跡である。1900年はじめから上高野の祠に石仏として祀られていたもので、1976年に鑄型として確認されたものである。千種川の左岸河原で採集されたものである。出土地周辺で弥生土器などの同時代の遺物を共伴していない。今までの銅鐸鑄型出土地とは大きく異なった単独出土である。大型の扁平紐式のもので、今のところ上高野の鑄型で鋳造された銅鐸は確認されていない。

昭和50年代になるまで、特殊な遺跡や松岡秀夫氏の努力によって確認された遺跡がほとんどであった。有年地区が主たる分布で上郡町内では上述したような遺跡以外知られていなかったが、昭和50年代になり農業基盤（圃場）整備などの実施によって、徐々に遺跡が増加しつつあ



第10図 別名遺跡 銅劍

る。赤穂市内でも各地で遺跡が確認されている。赤穂市の周世入相遺跡では多くの住居跡が確認され、土器の編年も試みられている。また、有年地区では多くの遺跡が増え、住居跡なども調査されており、赤穂郡の弥生文化が明らかになっていくものと思われる。原田中遺跡での墳丘墓の確認は、今まで揖保川流域を主として知られていた墳丘墓に加えての資料であり、しかも平地での確認という新しい事実から貴重な資料である。出土遺物も吉備型の特殊器台を保有しているなど興味深い資料である。上述した神子田遺跡は原田中遺跡ほどではないが、それに次ぐ規模の集落であろうと予測される。

古墳時代になると、後期古墳に注目されるものが点在するが、前期古墳で確認されているのは、西野山3号墳だけである。また、中期の古墳も中山古墳群中の数基や赤穂市の蟻無山古墳(1号墳)など僅かな古墳が知られているだけで、実態はつかめていない。最近確認された前方後円墳の可能性の高い正福寺古墳の存在は新たな問題を投げ掛けるものと思われる。

前期古墳である西野山3号墳は高田に所在し、早く昭和26年に調査された古墳で、径17m、高さ3mの円墳で、割竹形の粘土櫛を埋葬主体としている。出土遺物には三角縁四神四獸鏡をはじめ銅鏡・鉄鏡・鉄劍・玉類が出土している。それに続くと思われる古墳が西野山・中山丘陵に存在する。系譜が辿れると想定されるが、未調査であることから断定は出来ない。しかし、高田の地域を中心に後期そして奈良時代へと栄えたことは、与井古墳群や落地遺跡と同種の遺跡である神明寺遺跡(高田驛家)などの遺跡の存在からも明らかであろう。中山1号墳・西野山12号墳からは埴輪が出土している。

後期になると落地遺跡周辺でも遺跡が再び立地するようになる。別名遺跡以降、途絶えていたが、飯坂を越えた山野里・大酒や別名遺跡対岸の栗原に横穴式石室を主体部とする古墳が多く築造されるようになる。また、落地遺跡北方の船坂にも多くの古墳が築かれている。なかでも鳳張古墳群は特徴的な古墳である。1号墳は大型の石室で奥壁に石棚を保有している。墳形が方墳であることも特徴的である。落地遺跡の谷部には古墳は存在しないが、飯坂を越えた、そして梨ヶ原川を下った



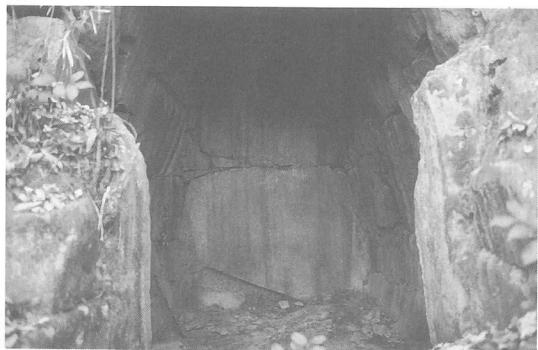
第11図 原田中遺跡 墳丘墓



第12図 凤張1号墳

北側一帯には多くの古墳が築造されており、町内では高田に次ぐ密集度である。これは次代の落地遺跡が営まれた背景になるものと思われる。

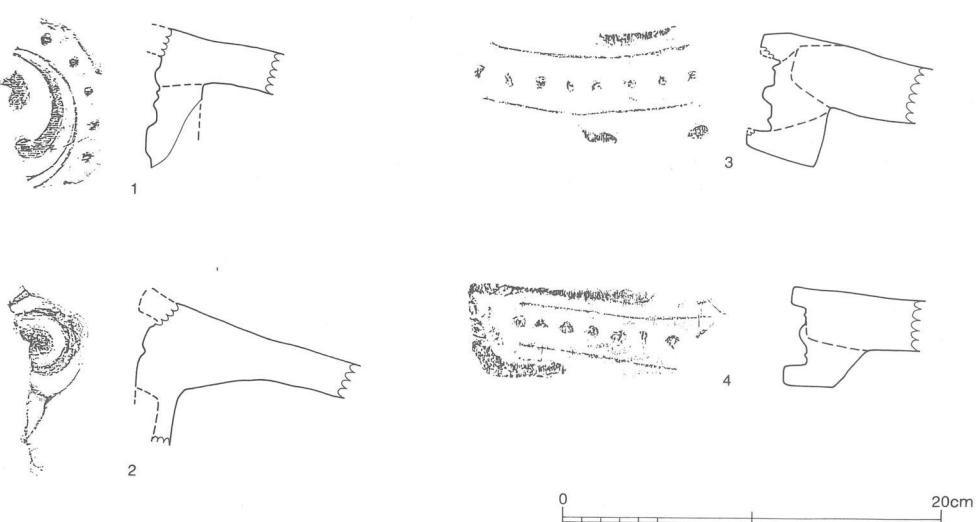
奈良時代になると県道姫路上郡線沿いに律令期の山陽道が敷設されるようになり、道を中心として遺跡は分布している。町内では東から神明寺遺跡、与井遺跡、そして落地遺跡と3ヶ所で寺跡と考えられていた瓦出土地が位置している。今里幾次氏の研究によって神明寺遺跡は高田驛家、落地遺跡は野磨驛家ではないかと考えられるようになり、今では一般化している。今回調査を実施したところでは、この時期の軒丸瓦なども出土しているが、断定出来る遺構は検出されず、大半は一時期遡る古墳時代末の遺構であった。しかし、野磨驛家造営の背景が看取出来たことは成果であったと思われる。政治的に設定された遺跡ではなく、古い時期から生活が営まれた地域



第13図 与井1号墳



第14図 椿峰から見た神明寺遺跡



第15図 上郡町内出土瓦実測図 (1:栖雲寺、2:八保、3・4:法雲寺)

であることが明らかになった。調査中に上郡町史編纂室の高橋久志氏から八保でも瓦出土地があるとの教示を得て実見させて戴いたところ、国分寺式の軒丸瓦であり、ほぼ同時期の遺跡が近接して存在することが判明した。高田では、各遺跡に隣接して瓦窯跡が確認されている(中山・与井瓦窯跡)が、落地遺跡周辺では確認されていない。

この時期の遺構は、高田で多く確認されており、中心地は高田周辺と考えて問題ないものと思われる。最近の調査で有年原田中遺跡で奈良時代の基壇状の遺構が調査され、円面硯なども出土していることから、郡衙の比定は困難になってきた。しかし、有年から高田にかけての地域であることは間違いないものと思われる。

平安時代以降になると赤穂市街地でも遺跡が認められるが、今のところ特徴的なのは堂山遺跡の製塩遺構であろう。赤穂の塩田のルーツとなるもので、緑釉陶器の出土とともに興味深いものである。落地遺跡でも中世の遺物は出土しているが、明確な遺構は調査していない。上層の遺構がこの時期に該当するものと思われる。今後の調査によっても、歴史時代の遺跡の全貌が明らかになっていくものと期待される。



第16図 神明寺遺跡 磐石



第17図 落地遺跡遠景

IV. 確認調査の結果

1. 調査に至る経緯

落地遺跡は、旧赤穂郡船坂村大字落地字飯坂に所在し、東・北・南の三方を丘陵に囲まれている。遺跡の西側は、梨ヶ原川によって形成された沖積地が広がる。

落地遺跡は奈良から平安時代の瓦が出土するところから寺院跡と考えられていたが、最近の研究で、古代山陽道野磨驛家跡と推定されている。

この度、驛家跡推定地の西側を東西に走る県道姫路上郡線拡幅工事が計画された。工事計画では驛家跡推定域の西限付近が工事対象地区にあたるため、工事に先立ち事前に確認調査を実施した。

調査対象地区は道路拡幅工事という性格上、全長440m、幅は調査不可能な道路法面部分を除外すると3～5mと狭長な調査範囲である。

調査は工事予定地内に2×2m規模の坪を設定し、遺構の有無を確認する方法を採った。しかし、調査範囲が狭いため、場所によっては1×2mの坪を設定した。

2. 調査の概要

当初、坪は12箇所設定する予定であったが、調査を進めるに従い、遺跡がさらに西方に広がることが判明した。そこで遺跡の西限を確定するため新たに7箇所の坪を追加した。

調査の結果、No.2・3坪、No.5～7坪、No.14～18坪の3箇所で溝・流路・柱穴等の遺構が検出された。

No.2・3坪

調査区の東端、飯坂付近に位置し、坪の南隣は17～18年前に宅地造成され地形が改変されている。調査の結果、No.3坪で溝2条(S D 0 1・0 2)、No.2・3の両坪で落ち込み(S X 0 1)が検出された。この落ち込みの埋土中より瓦片が数点出土したため、驛家に関連した遺構の可能性が考えられた。そこでNo.2・3坪をそれぞれ拡張し調査したところ、土層断面に水田土壤が確認され、宅地造成以前の水田の跡であることが判明した。埋土中より出土した瓦は造成工事の際混入したと推察される。

No.3坪内で南北方向に走る溝(S D 0 1・0 2)が耕土直下で検出された。両溝の南半部分は重複していた。上部は水田化による削平を受け両溝の先後関係は把握できなかった。

S D 0 1は幅85m、検出面からの深さは最深部で30cmを測る。両溝とも溝底は50cmの比高差をもって北から南に向かって下がっている。

遺物は古墳時代後期の須恵器・土師器片がSD01底面より出土した。溝の時期はこの時期に比定される。

No.5～7坪

各坪から木片等の有機物を多量に含むシルト層を確認した。このシルト層の下層は砂礫層でおそらく基盤層と考えられる。上層は洪水砂(第3・4層)が厚く堆積している。遺物はこれらの各層から奈良～平安時代の土器が出土している。No.6坪ではシルト層と基盤層の層理面より瓦片が出土し、またNo.7坪ではシルト層下層より板材が出土した。

この辺りの地形を外観すると扇状地形のなかの凹地に該当しているところから、自然流路が形成されていると判断される。しかし瓦・板材等の出土遺物から推察するに、この自然流路が驛家の排水施設として活用されていた可能性も考えられる。

No.14～18坪

調査区の西側を南北に流れる梨ヶ原川の氾濫によって形成され微高地上に立地する。No.15・18坪で古墳時代後期の溝・柱穴が検出された。

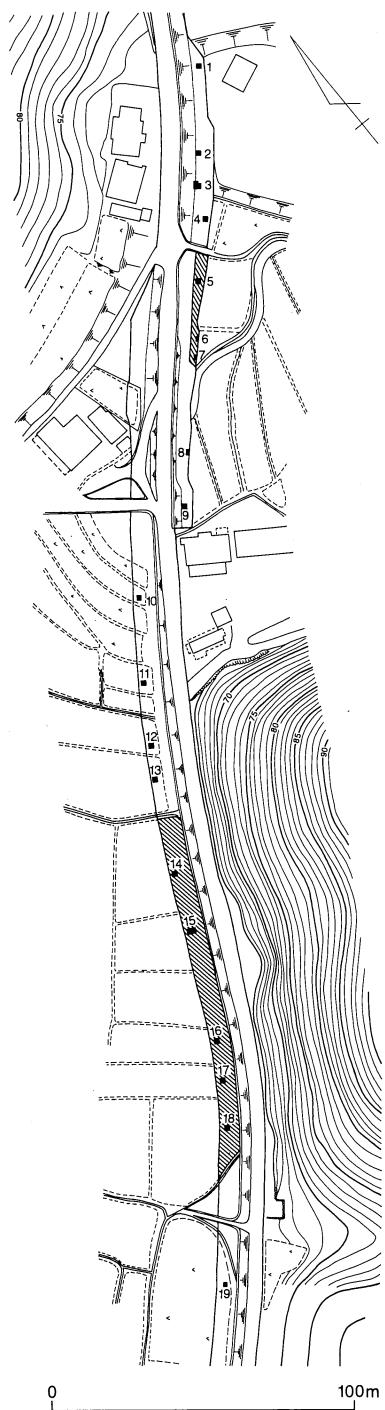
この区間の基本層序は次のとおりである。

1. 耕 土
2. 明黄褐色細～中砂混じりシルト(床土)
- 2'. 黄褐色土(客土)
3. 灰褐色細砂混じりシルト(遺構検出層)

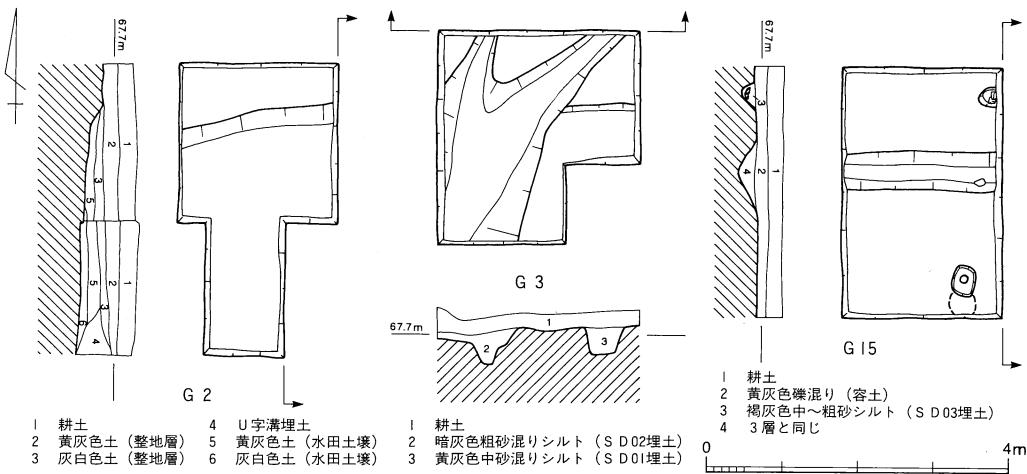
以上である。第2層は現在の水田の床土を形成しており、地元の話では、古代山陽道野磨驛家跡推定地付近より客土したことである。調査中、この第2層より多量の奈良～平安時代の土器・瓦片が出土しており、上記の話を裏付けている。

No.15坪からは東西に走る溝1条(SD03)、柱穴3個が検出された。

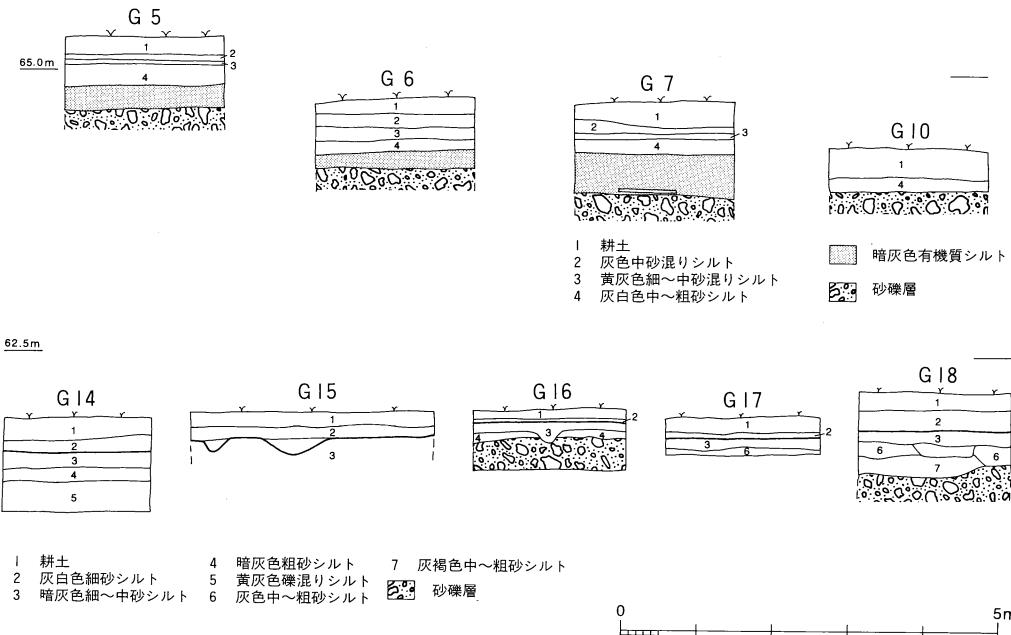
SD03は第3層上面より検出された。溝の上端は50cm、下端は20cm、検出面からの深さは20cmを測る。溝



第18図 確認調査坪配置図



第19図 確認調査検出遺構



第20図 確認調査土層断面図

内から古墳時代後期の土器が出土している。

柱穴は坪の北東・南東隅で検出された。いずれも検出面は、溝と同様第3層上面である。

No.18坪は、平面的に遺構を確認することが困難で、坪の周壁の土層観察で溝、柱穴等の遺構

を確認する結果となった。これらの遺構は土層観察の結果、第3層上面より掘り込まれている。また坪の北西隅で溝に切られた状態で柱穴が1個検出された。出土遺物は須恵器の細片が数点出土した。

坪北壁の土層観察によると、第3層の下層、第4層上面より溝状の落ち込みが確認された。土層断面によって確認したため、平面的に遺構の広がりを追えなかった。あるいは2面の遺構面が想定できるのかも知れない。このような状況が看取できたのはNo.18坪のみで、他の坪では確認していない。第3層中および溝状の落ち込みからは遺物は出土していない。

3. 小 結

今回の確認調査では、直接野磨驛家跡に関連する遺構は確認できなかった。ただNo.5～7坪で確認した自然流路は瓦・土器・板材等の遺物を包蔵し、驛家との関連性が想定できる。したがって、幅3m前後の狭小な範囲ではあるが、何らかの調査が必要と考える。

No.14～18坪からは古墳時代後期と推定される集落が確認された。集落は前記したように梨ヶ原川の氾濫によって形成された微高地上に営まれており、集落の中心は調査区の西側に展開する微高地上にあると考えられる。

V. 調査結果

(1) 調査概要

確認調査の結果、さらに調査を行った地点は3ヶ所である。平成元年度に調査を実施した全面調査区と立会調査区、そして昭和63年度に実施した飯坂調査区である。

全面調査区は、全調査区のなかで最も南に位置している。約580m²を対象として調査を行った。確認調査の結果で、遺構は2時期あることは判っていたが、調査を進めて行くと全体にわたって遺構は存在せず、部分的に2面になっているだけであった。ほとんどのところで、同一面か一方の時期の遺構しか存在していなかった。それゆえに、大半は1面の遺構を調査したと等しい調査であった。

新しい段階の遺構は調査区の両端で検出している。南端の13・14区では多くのピットを検出しているものの明瞭な遺構は確認出来なかった。少量の出土土器から12～13世紀の遺構と考えられる。南端まで遺構は広がっておらず、遺跡の南端であることは明確である。北端の1～3区ではピットを僅かに検出しているが、やはり明瞭な遺構は確認出来なかった。1区で谷へ落ち込む肩部を確認しており、今回調査対象とした微高地の北端であることが明らかになった。

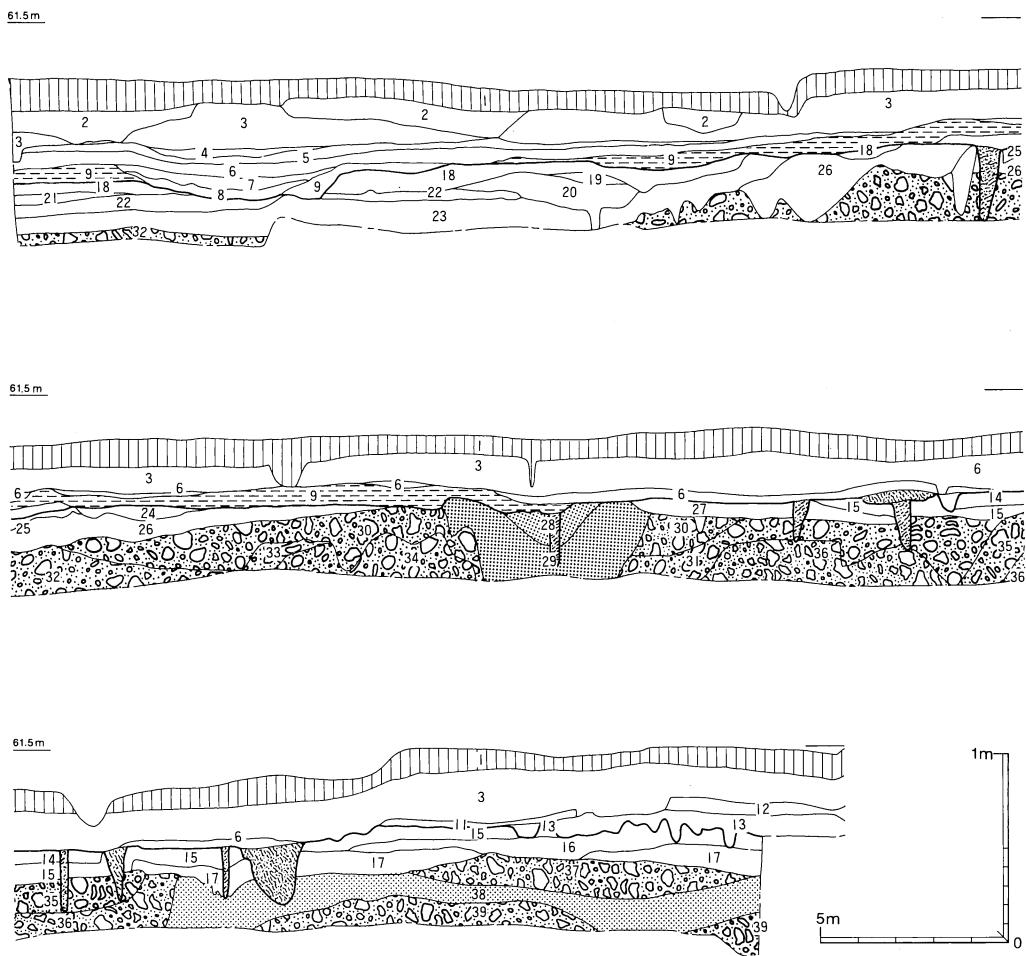
古い段階の遺構は、3～12区のはば全域で確認している。ただ、調査したピットなどの中には新しい段階のものも含まれているかも知れない。埋土の違いはあったが、面としては同一面でしか確認出来なかった。遺構としては、竪穴住居跡2棟、掘立柱建物3棟、落ち込み2基、柵4列の他に溝・土壙・ピットを多数検出している。竪穴住居跡(SB01・02)ならびに落ち込み(SX01・02)は古墳時代末の遺構であるが、掘立柱建物と柵は新しい段階の遺構であるかもしれない。

出土遺物は多くはない。まとまって出土したのは、SB01・SB02とSX01の各々の溝から出土しているだけである。包含層も厚いものではなく、出土遺物量も少なかった。北端で出土した軒丸瓦や平瓦・丸瓦は『落地廃寺』から流れたものと考えるか、微高地の西側に瓦葺きの建物があったとするか興味ある資料である。

立会調査区は、谷部でピート層になるような腐植土層が堆積しており遺構や遺構面が存在するわけではない。しかし、北東方向の源氏屋敷と呼ばれる『落地廃寺』から流れた遺物が堆積している可能性が考えられたため、立会調査を行った地点である。

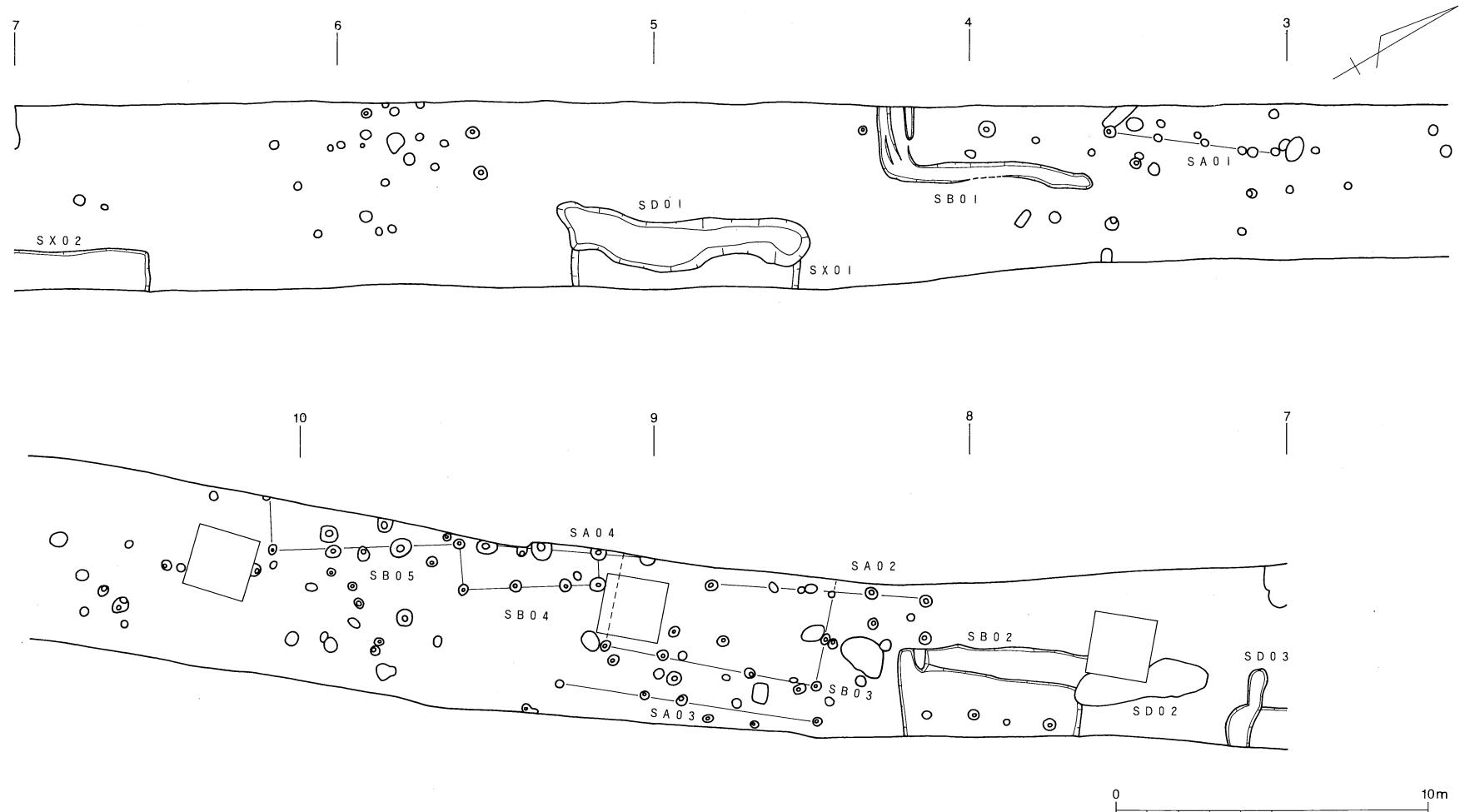
約100m²を対象としたが、包含層は認められず遺物も僅かに出土しただけで、当地点まで遺物の流出はなかったものと思われた。

飯坂調査区は約12m²と極めて狭い範囲の調査であった。溝を2条確認している。1条は『落地廃寺』と同じ平安時代初期の遺構であったが、もう1条はそれより遡る古墳時代初頭の遺構



- | | | |
|---------------|----------------|-------------|
| 1 表土（耕土） | 14 灰褐色シルト混じり細砂 | 27 灰褐色シルト質砂 |
| 2 暗灰色細砂質シルト | 15 暗褐色シルト混じり細砂 | 28 褐色砂礫 |
| 3 灰白色中砂質シルト | 16 灰褐色シルト混じり細砂 | 29 黄褐色砂礫 |
| 4 明灰色シルト | 17 暗褐色シルト混じり細砂 | 30 褐色砂礫 |
| 5 灰色細砂質シルト | 18 暗灰褐色砂 | 31 黄褐色砂礫 |
| 6 暗灰色細砂質シルト | 19 暗灰色礫混じりシルト | 32 黄褐色砂礫 |
| 7 暗灰色シルト | 20 暗灰色礫混じりシルト | 33 褐色砂礫 |
| 8 灰色砂混じりシルト | 21 灰色細砂質シルト | 34 黄褐色砂礫 |
| 9 黄灰色中砂質シルト | 22 灰褐色細砂質シルト | 35 黄灰色砂礫 |
| 10 褐色砂 | 23 灰色シルト | 36 黄灰色砂礫 |
| 11 暗黄褐色シルト | 24 灰褐色砂礫 | 37 暗褐色砂礫 |
| 12 暗灰褐色シルト質細砂 | 25 灰色砂質シルト | 38 黄色粗砂 |
| 13 淡灰褐色シルト質細砂 | 26 灰褐色砂 | 39 暗褐色砂礫 |

第21図 土層断面図



第22図 落地遺跡 遺構配置図

であった。少量の瓦と古式土師器が出土している。

(2) 全面調査区の調査結果

検出した遺構は、竪穴住居跡2棟・掘立柱建物3棟・落ち込み2基・柵4列・溝2条と多数のピットである。以下、項目ごとにその遺構と遺物を報告する。

1. 住居跡

① S B 0 1 (竪穴住居跡)

遺構の概要と遺物の出土状況

S B 0 1は、調査区北部で西壁に接して検出され、その主要部は調査区外に位置している。このため、その全容は明らかではない。

遺構としては、砂礫層のベースに掘りこまれたL字形に屈折する溝が検出されており、この溝に囲まれた範囲で柱穴が検出されている。柱穴が検出された(床)面は、溝の外周より約20cm低い。このため、一応竪穴住居跡として取り扱った。

溝は幅約70cm、最大深度は検出面から約25cmを測り、竪穴住居の周壁溝であるとすれば、幅・深さともに異例であるといえよう。延長は約8mを測り、埋土は暗褐色の細～中砂である。

溝の北端は、延長約1mにわたって他の部分より深くなり、土器が一括状態で検出された。検出された土器は5個体からなり、他に、焼土・炭の混入も認められた。

柱穴は床面から多数検出されたが、そのうち柱痕が検出された大型の柱穴2基が、住居の主柱穴と考えられる。主柱穴(柱痕)間の距離は、約3.8mである。柱穴内からは、遺物の出土は見られなかった。

遺物(第24図)

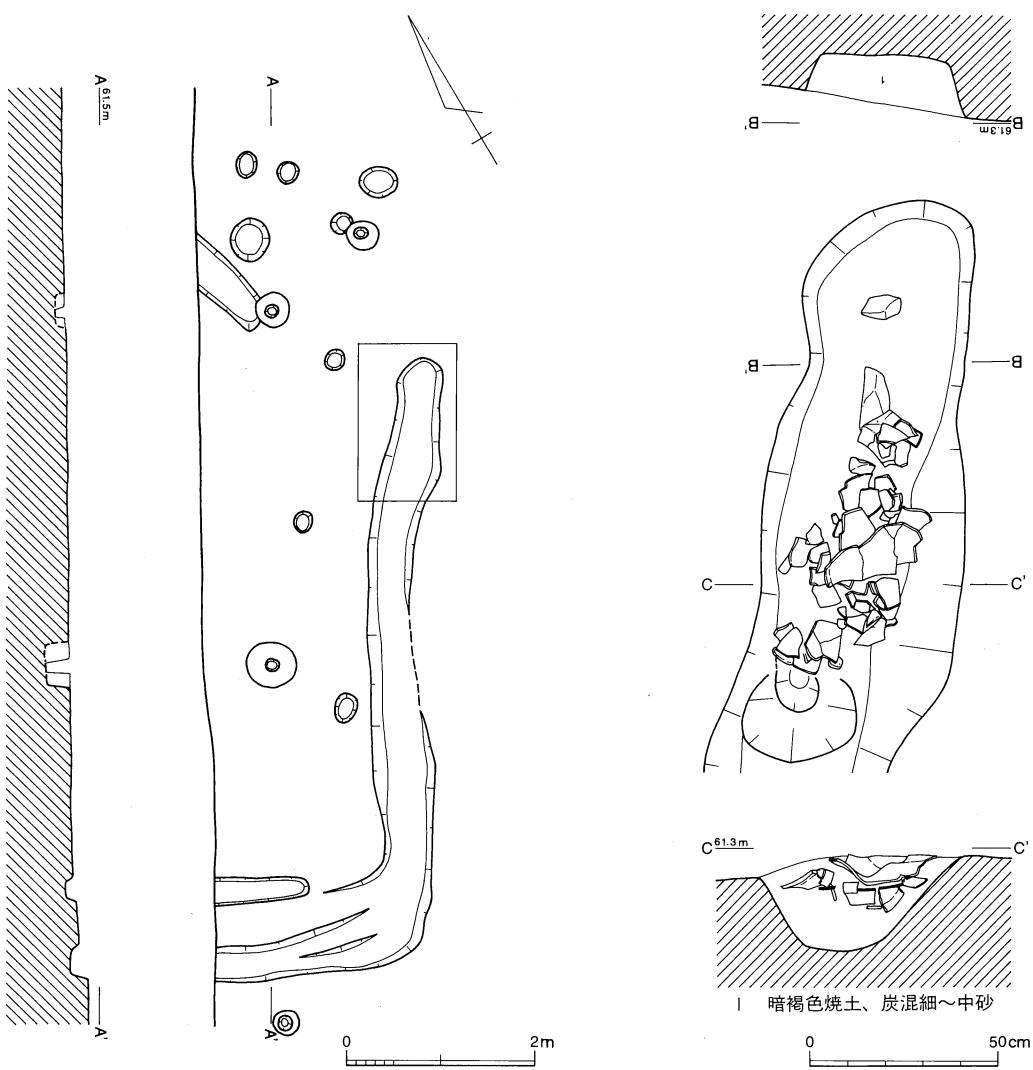
図示した遺物は、いずれも溝北端で一括出土したものである。

(1)は、復原口径が20cm前後となる、小型の須恵器甕である。緩やかな膨らみをもつ体部から屈曲して、わずかに外反気味にのびる口縁部をもつ。口縁端部には、平坦な面が形成され、その上端は丸味をもって仕上げられている。体部外面は、平行タタキの後、カキ目調整が施される。同内面は、同心円のタタキが施されている。

(2)～(5)は、土師器の甕である。

(2)は、膨らみの小さい体部から、強くひらく口縁部に至る破片である。口縁端部には面が形成されており、その下端は丸く仕上げられている。体部外面は、縦方向にハケ目調整(単位幅1.5cm)が施され、また、口縁部外面はヨコナデによって仕上げられている。内面調整は、風化のため明瞭ではない。

(3)は、やはり膨らみの弱い体部をみせる。口縁部の開きは(2)に比べてやや弱い。口縁端部

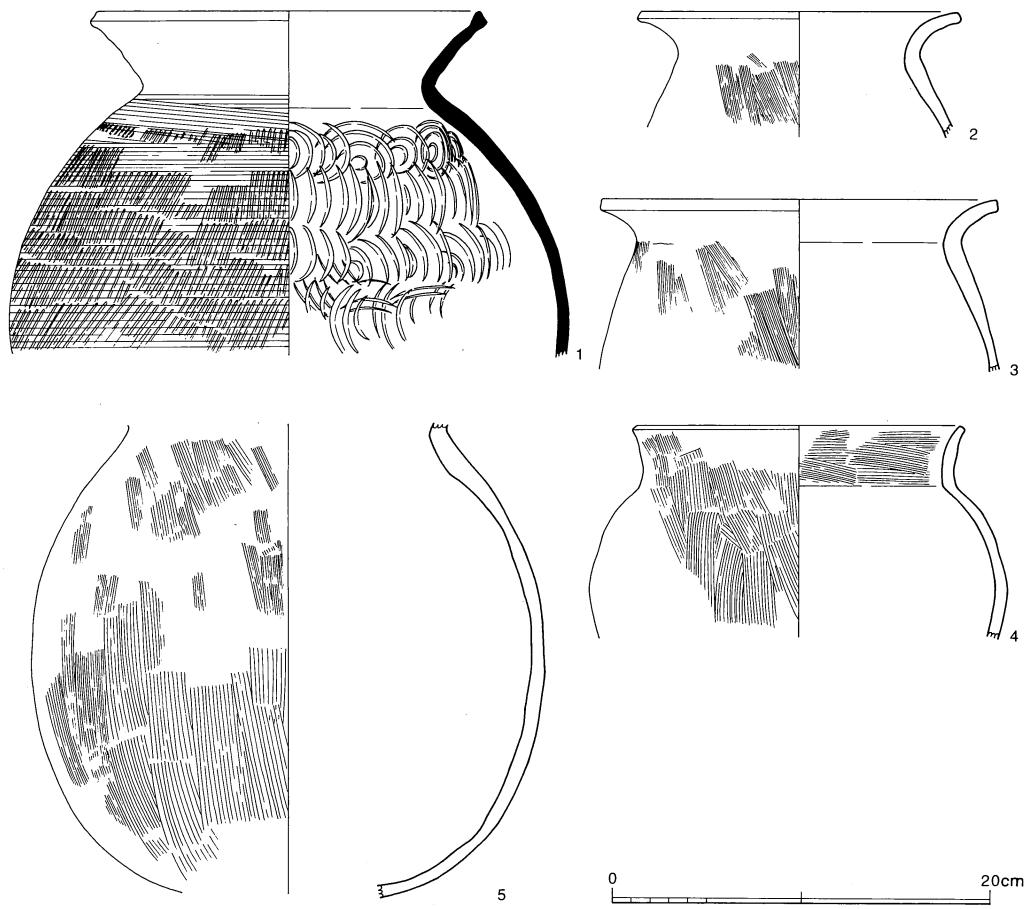


第23図 SB01 実測図

は、わずかに凹面となるように仕上げられている。体部外面は縦方向のハケ調整(単位幅約1.6cm)、口縁部および内面は、ナデによる調整が施される。

(4)は、直立からやや外反する口縁部をみせる。体部は膨らみをもち、口縁部にかけて、緩やかに屈曲している。口縁端部には、平坦面が形成されている。口縁部～体部外面は縦方向のハケ目調整(単位幅1.6cm)、口縁部内面には横方向のハケ調整が施されている。

(5)は、甕の体部破片である。底部、口縁部ともに欠いている。歪んだ球形を呈し、外面は、



第24図 SB01 出土土器実測図

縦方向のハケ目調整(上半は単位幅1.6cm、下半は2.2cm)が施される。

遺構の性格と時期

SB01は、一応竪穴住居跡として記載をおこなった。しかし、柱穴と溝との関係から、その一辺を復原するならば、8m以上にもなり、遺構の所属時期から考えて、異例の大きさと言わねばならない。既述のように、溝自体も周壁溝としては異例であり、これらの点から、遺構の性格そのものが、竪穴住居跡とは異なる可能性も考慮せねばならない。

しかしながら、溝内から出土した遺物からは、特殊な機能はうかがわれず、やはり居住に連する遺構であることに変わりはなかろう。

所属時期は、他の遺構群と大差のない、7世紀前半と思われる。

②S B 0 2 (豎穴住居跡)

遺跡中央よりやや南側の8・9区に存在する住居跡である。全体のほぼ半分にあたる西半を調査しており、東半は現県道下に延びている。

残存状態は良好とはいえない。周壁も高さ0.2m前後である。南北の長さは6.0mであるが、北側にあと数cmは延びる可能性はある。東西方向の残存長(調査した長さ)は2.8mである。北西コーナー部に溝(S D 0 2)が存在しており、豎穴住居跡の肩部を削平している。

壁溝は認められないが、西側に高床部(ベッド状遺構)を持っている。西辺に沿って幅0.7~1.0mの高床部がある。高床部は削り出して作るのではなく、砂礫土を盛って築いている。南西隅まで高床部は及んでおらず、北側の方が広い不定の台形状となっている。

南西隅近くの西辺に小規模ながら土壙が設けられていた。底には精製された砂が敷かれ、また壙内から住居跡床面にかけて焼土が広がっていたことから、炉跡と考えられる。土壙の規模は住居跡周壁と接する西辺で幅0.5mあり、長さは0.7mを測る。調査段階での深さは0.2mと浅いものである。土壙底は強く火を受けておらず、長時間使用したとは思われない。

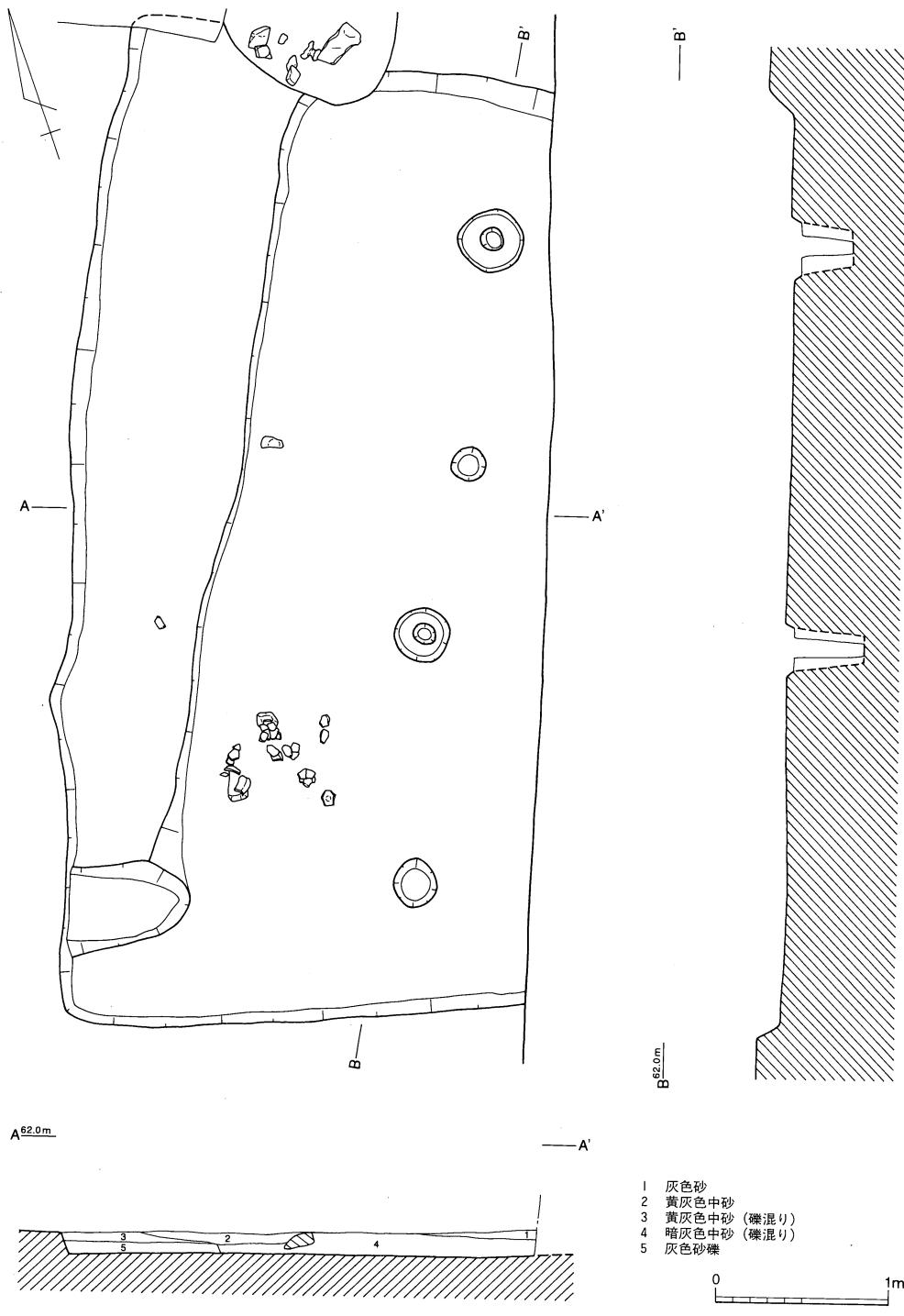
床面で4基のピットを検出している。そのうちの2基は深く明瞭に柱の痕跡が観察され、埋土も同じであることから、当住居跡の柱になるものと思われる。現状で上屋構造を推定すると4本柱の建物になろうかと考えている。柱の位置と住居跡の規模を合わせて考えると正方形に近いプランになろうかと想定される。北側の柱は、掘り方の径が0.4m、深さも0.4mで柱痕の径は0.15mを測る。南側の柱は、掘り方の径が0.35m、深さは0.5mで柱痕は0.15mとほぼ同規模の数値が得られる。他の2基のピットはともに径が0.2mと小さく、柱痕を確認出来なかった。支柱のような機能を果たすのか、あるいは後世の遺構が床面まで達したのかもしれない。

床面は砂礫土を敷いているからか、床面(低床部)よりも高床部の方が固くしまっていた。

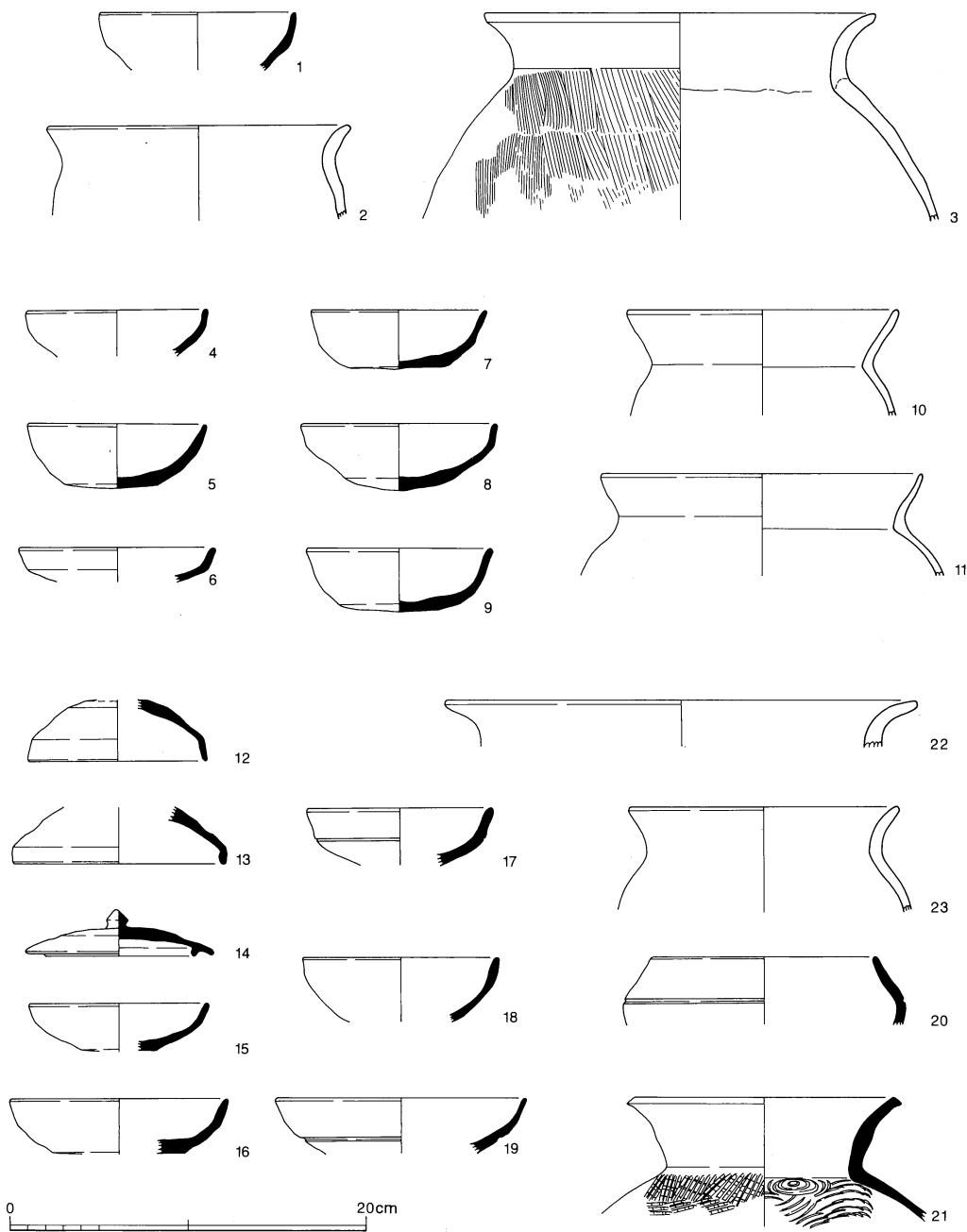
遺物は多くは出土していない。炉と炉に接した高床部からは須恵器杯身(1)と土師器甕2点〔(2)(3)〕の3点と鉄器が2点出土している。住居跡床面直上の遺物は須恵器杯身6点〔(4)~(9)〕と土師器甕2点〔(10)(11)〕の8点を図化している。住居跡埋土からは須恵器杯蓋3点〔(12)~(14)〕、須恵器杯身2点〔(15)(16)〕、須恵器高杯3点〔(17)~(19)〕、須恵器鉢1点(20)、須恵器甕1点(21)、土師器甕2点〔(22)(23)〕の12点が出土している。

鉄器は2点で、1点は全長6.1cmの鍛造鉄斧である。肩は張らないタイプで刃幅3.9cmで現重量79.6gを測る。高床部に近い床面から刃を周壁方向に向けて出土している。他の1点は不明品で、片側は刃のように見えるが明らかでない。残存長7.1cm、幅2.0cm、現重量22.3gを測る。鎌の可能性が高いと思われるが断定できない。高床部から出土しており、炉に近い部分に位置している。

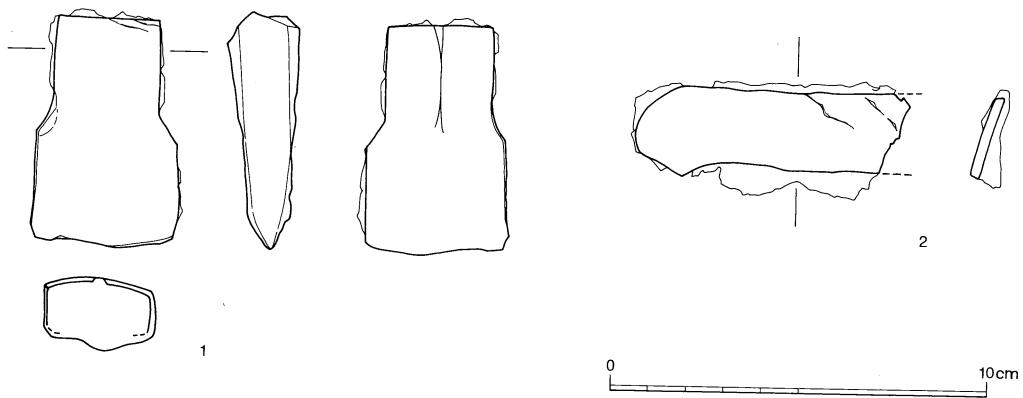
炉出土の土器は3点で、(1)は須恵器杯身である。口径10.8cm、残存高3.3cmで焼成は甘く、作りも丁寧とはいえない。(2)(3)は土師器甕で(2)は炉から(3)は炉に近い高床部から出土して



第25図 SB02 実測図



第26図 S B 0 2 出土土器実測図

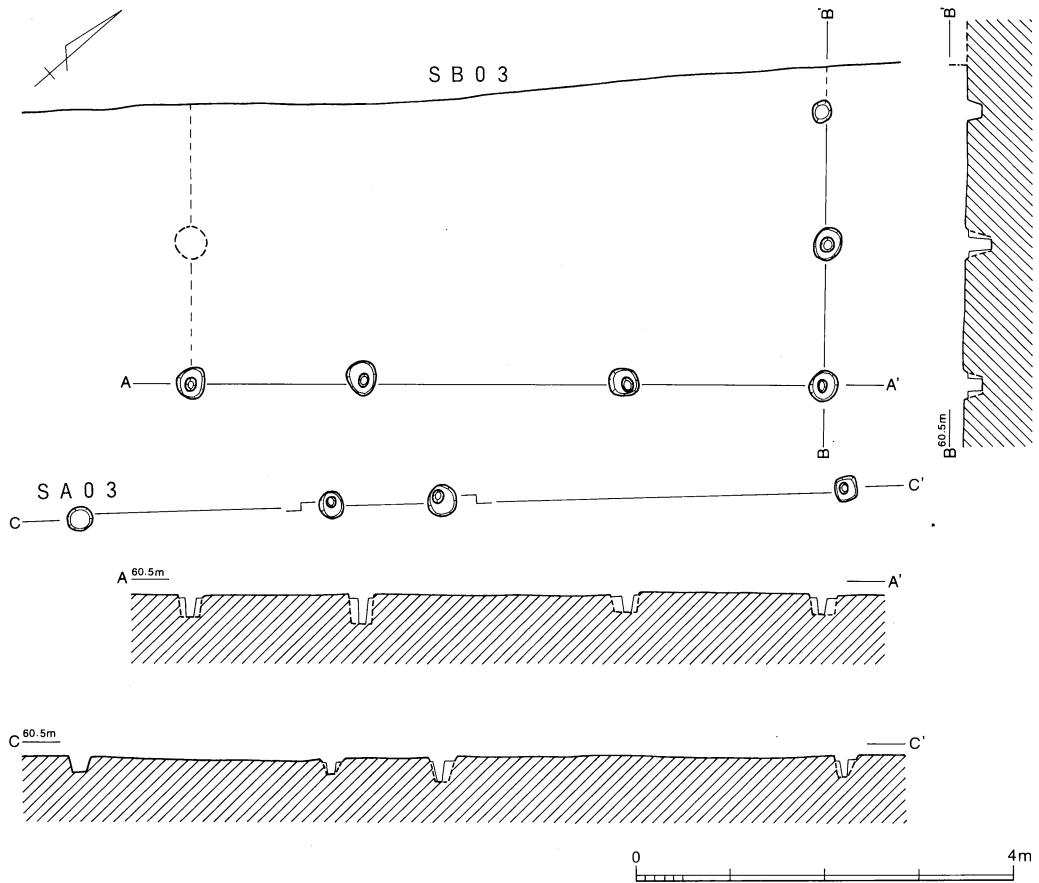


第27図 S B 0 2 出土鉄器実測図

いる。底部を欠く口頸部の破片である。(2)は口径16.6cm、残存高5.0cm、(3)は口径21.6cm、残存高11.5cmを測る。(2)は表面が磨滅しており、整形技法など不明であるが、(3)は内外面ともユビ成形したのち、外面はハケで整形している。口縁部のみヨコナデで仕上げている。

住居跡床面出土の土器は8点である。須恵器杯身6点と土師器甕2点である。杯身はつまみを持つ蓋へと移るものである。(6)(8)は焼成が甘く、生焼けかと思われるものである。焼成不良の須恵器はS B 0 2に伴っているS D 0 2からも出土しており、特徴的なことである。口径は9.6~10.7cmと小型である。ナデで仕上げており、端部は丸く納めている。(10)(11)の甕はともに磨滅しているため整形技法を看取出来ないが、ハケ整形されたものと思われる。どちらも二次焼成を受けており、にぶい赤褐色に色調が変化している。口縁部も内彎しており、端部も丸くなっている。頸部内面の稜線も明瞭である。(10)は口径15.0cm、残存高5.9cmで、(11)は口径17.8cm、残存高5.7cmを測る。

住居跡埋土出土の土器は、須恵器杯蓋3点、須恵器杯身2点、須恵器高杯3点、須恵器鉢1点、須恵器甕1点と土師器甕2点である。杯蓋の3点はすべて形態を異にしている。(14)だけ宝珠つまみを有している。口径8.3cmと小さくセット関係となる身は出土していない。内面の反りや端部はあまりシャープではない。(12)(13)の蓋は端部近くで直立ぎみになっている。杯身は底部が安定し始めており、つまみを持つ蓋とセットになるものであろう。高杯は3点とも杯部だけの破片である。柱状部は出土していないことから、杯身であるかもしれない。ただ、(17)(19)は体部に沈線を持っていることから高杯の可能性が高いと思われる。(18)は焼成が不良で生焼け状態であることから不明な点が多い。(20)は鉢もしくは無頸壺で、最大腹径のところに1条の沈線が施されている。口径12.4cm、残存高3.8cmを測り、胎土・色調から備前産の須恵器ではないかと思われる。(21)は口頸部だけ図化しているが、体部も残存している甕で、口径14.4cm、残存高6.5cmを測る。体部は外面が格子目状のタタキが見られ、内面は同心円(青



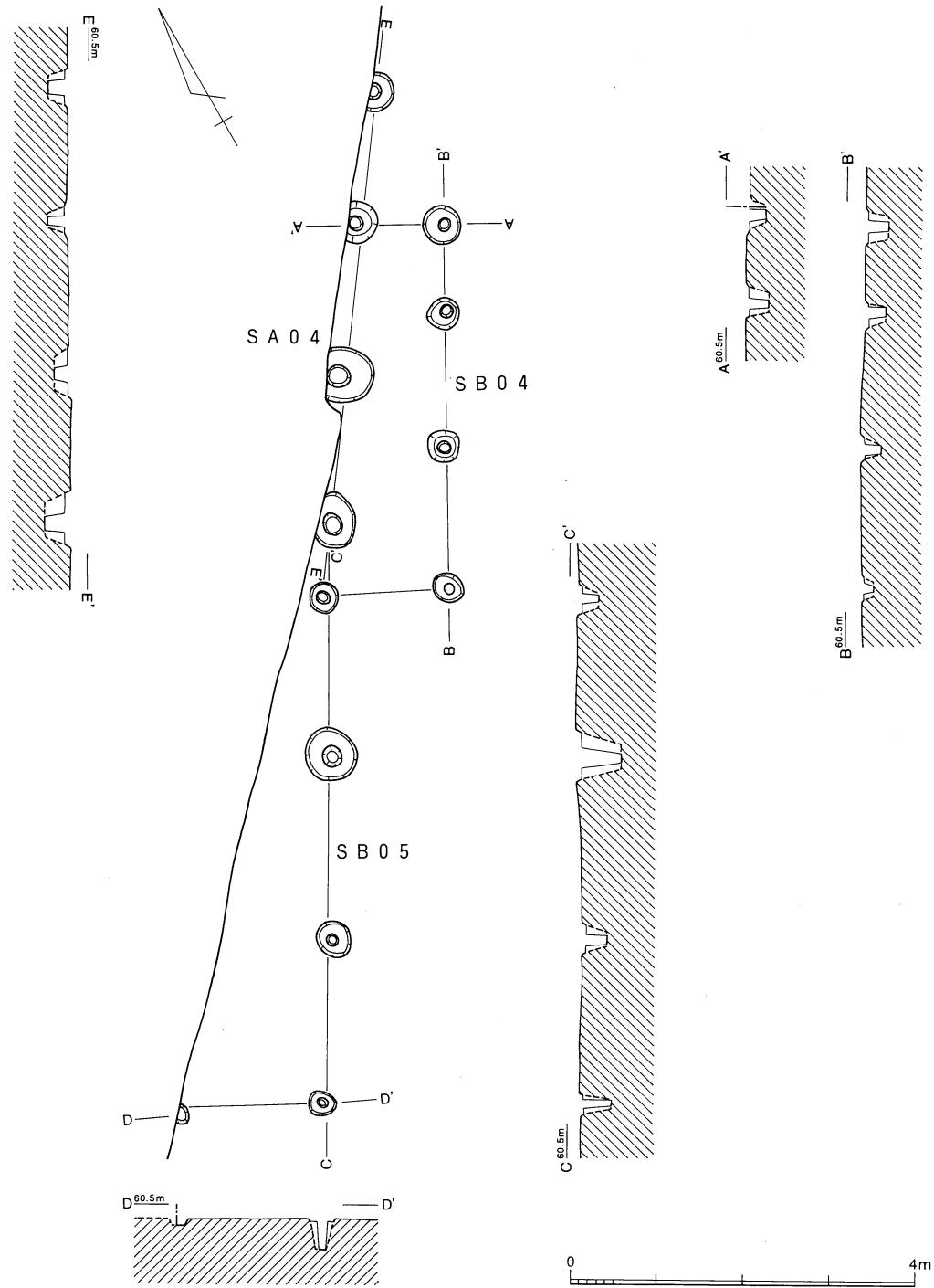
第28図 SB03・SA03 実測図

海波)の當て具の痕跡が認められる。(22)(23)は高床部出土の甕と似たプロポーションの口縁部を折り曲げて作ったもので、口縁部は外反している。他の土師器同様に表面が磨滅していることから整形技法は不明である。

③SB03(掘立柱建物)

調査区南寄りの9・10区で検出した掘立柱建物である。SB02の南に2.5mと隣接している。主軸はN41°Eと北東—南西方向となっている。SB02の主軸がN35°Eであるから、僅かながら東に振っていることになる。

遺構は西側の調査区外へ延びていることから全容はわからない。調査した中では東辺だけが確実に押さえられ3間検出している。東西方向には2間だけ確認している。それ以上の規模の建物であるとしかわからず、桁がどちらかも不明である。調査した東辺の柱間は、北から2.1m



第29図 SB 04・SB 05・SA 04 実測図

—3.0m—1.8mである。北辺は東から1.6m—1.6mを測る。

柱の埋土は黒褐色土である。出土遺物は確実ではないが、建物内のピットから出土〔第42図(1)(5)〕しており、SB02などと同じ古墳時代末を示している。確実な時期決定は困難であるが、埋土から考えても、古墳時代末に近い時期かと思われる。

東側にSA03が平行して築かれている。SB03に伴う柵であると思われる。

④SB04(掘立柱建物)

調査区南寄りの10区で検出した掘立柱建物である。SB03とほとんど接しているが、主軸方向が異なっている。主軸方向はN28°Eと南北方向に近くなっている。主軸方向が異なることからも時期の違う建物であろうと思われる。南側には主軸が同じSB05が接して存在している。

遺構はSB03と同じく西側の調査区外へ延びていることから全容はわからない。調査した中では東辺だけが確実に押さえられ、3間検出している。東西方向には1間だけ確認している。それ以上の規模の建物であるとしかわからず、桁がどちらかも不明である。調査した東辺の柱間は、北から1.2m—1.6m—1.6mである。北辺の1間は1.2mで南辺の1間は1.6mを測る。

柱の埋土は黒褐色土である。出土遺物は僅かで、時期決定も困難である。埋土がSB03と異なっていることも時期が違う証拠かもしれない。SB03よりも新しい時代の遺構であろう。

⑤SB05(掘立柱建物)

調査区内で検出した遺構のなかで最も南に位置する遺構である。10・11区で検出した掘立柱建物である。SB04と接しており、主軸方向も同じである。主軸方向はN28°Eと南北方向に近くなっている。同時期の建物で、2棟が一体となる建物である可能性も考えられる。

遺構はSB03・SB04と同じく西側の調査区外へ延びていることから全容はわからない。調査した中では東辺は3間検出しており、東西方向には1間だけ確認している。それ以上の規模の建物であるとしかわからず、桁がどちらかも不明である。調査した東辺の柱間は、北から1.8m—2.1m—2.0mである。南辺の1間は2.0mを測る。SB03・SB04が東辺は終結して3間と確認されているが、SB05はさらに北へ延びているかもしれない。その場合、SB04と切り合い関係が生じてくる。主軸方向や埋土が同じであることから、別の遺構としても、大きな時期の隔たりはないものと思われる。

柱の埋土は黒褐色土である。出土遺物はなく、時期決定も困難である。SB03よりも新しい時代の遺構で、SB04とほぼ同じ時期の建物と考えられる。

3. 落ち込み

① S X 0 1

5・6区の北寄りで確認している。当初、住居跡の可能性を考えて調査したが、住居跡であるとの結論が出せなかつたので、落ち込みとして報告する。

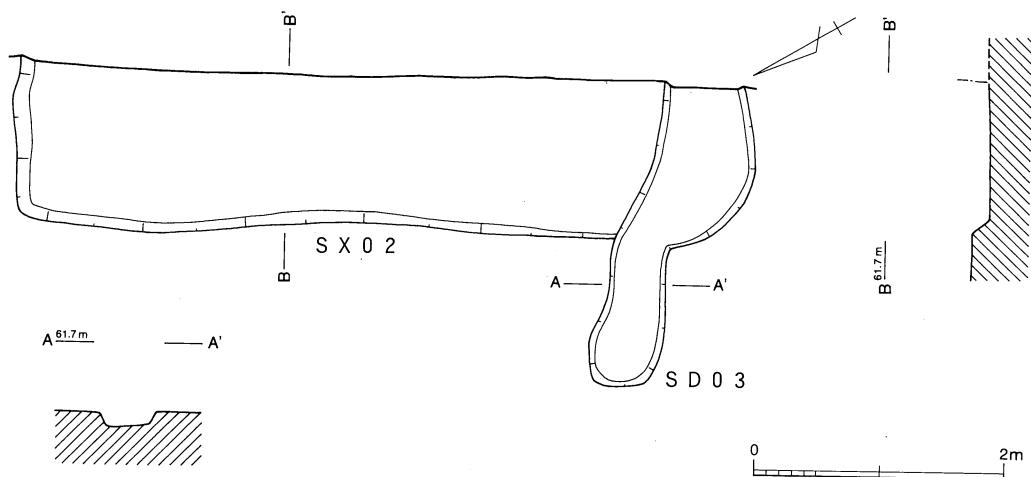
規模は南北4.6m、東西の調査した長さは2.5mを測る。調査区東側へ続いている遺構である。西側に溝（S D 0 1）があり、遺構としては一体のものと思われる。柱は検出されなかつた。S X 0 1内からは遺物は小片しか出土せず、図化したものはない。S D 0 1に土器があり、7世紀初頭が遺構の時期と考えて大過ないものと思われる。

② S X 0 2

7・8区で確認した方形の落ち込みである。S X 0 1とは13m、S B 0 2とは4.8m離れている。主軸方向は、すべてほぼ同じである。

南辺に溝が築かれており、性格な数値ではないが、溝の南肩までを計測すると、南北6.5mを測る。調査区東側の現県道下へ延びており、調査した東西の長さは1.4mである。深さは0.2～0.4mと浅く、埋土もS B 0 2とは異なつてゐる。同一の土質であるが、還元状態に近い色調となつてゐる。

出土遺物はないが、主軸方向や埋土から古墳時代末の遺構と思われる。



第30図 S X 0 2・S D 0 3 実測図

3. 棚

① S A 0 1

4区で検出している。下層の遺構ではもっとも北に位置している遺構である。南には接してS B 0 1が存在するが、時期は異なるものと思われる。S A 0 3同様に4間分調査している。柱間は、北から1.3m-1.5m-1.5m-1.5mである。他の棚と比べて柱間が統一されている。主軸方向はN28°Eとやや方位が異なっている。柱の径も小さく時期が異なるかもしれない。
遺物は出土していない。

② S A 0 2

9区で確認している棚である。調査区西端で検出しているので、掘立柱建物になる可能性も残されている。S B 0 3と平面を共有していることから、前後関係があるはずであるが、決定出来ない。主軸方向はN35°Eと他の遺構と大きくは変わっていない。4間分確認している。柱間は、北から1.8m-2.0m-1.3m-2.0mである。

やはり、遺物は出土していない。

③ S A 0 3

9・10区に位置する遺構で、S B 0 3の東側の棚と考えられる。主軸方向はN40°Eである。柱間がやや不規則であるが、3間確認している。柱間は、北から2.6m-1.2m-4.3mである。中央が狭く両側の柱間が広くなっている。

やはり、遺物は出土していない。

④ S A 0 4

10区で検出している遺構で、調査区西端で確認している。S B 0 4と平面を共有しているが、規模はS A 0 4の方が大きい。東側には続いているが、西側に延びて掘立柱建物になる可能性も考えられる。その場合、今回調査した中で最も大きな建物になろうかと思われる。ただ、現状では1列のピット列を検出しているだけなので、棚として報告する。

3間検出しているが、まだ北側には続いている可能性がある。柱間は、北から1.6m-1.8m-1.8mである。他の遺構の掘り方の径が0.3~0.4m、柱痕の径が0.15~0.2mであるのに比べて、掘り方の径が0.5~0.7m以上、柱痕の径が0.2~0.25mと規模が大きくなっている。主軸方向はN38°Eである。出土遺物はない。

時期は確定出来ないが、古墳時代よりは下るものと思われる。以前から知られていた寺院跡としての落地遺跡と同時期の遺構の可能性が高い。

4. 溝

① S D 0 1

遺構の概要と遺物の出土状況

S D 0 1 は、褐色の砂礫層のベースに掘りこまれており、最大幅1.48m、延長7.76mを測る。不規則な平面形を呈するが、底面はほぼ水平であり、むしろ長大な土坑とすべきかもしれない。最大深度は、検出面から約46cmを測る。

溝内は、細砂を主体とする自然堆積によって充填されていたが、最下層は水の滞留を示す灰色のシルト質砂の堆積が見られた。

溝内からは、多数の礫・遺物が検出されており、特に南半中央寄りに顕著な集中が認められる。この部分では、溝の西側から堆積した形で、焼土ブロックをまじえた砂層が認められ、その突出をとりまくように弧状に礫・遺物のまとまりが見られる。

礫は、概ね径10~30cmの角礫であり、遺物は礫の間に挟まれ、あるいは礫に混じった状況で検出された。礫の多くは、溝底に密着した状況で検出されており、遺物とともに一括して廃棄されたものと考えられる。

遺物(第32~35図)

溝内からは多数の遺物が出土しており、その大部分が、礫集中部に分布していた。ここでは、土器33個体、鉄製品1点を記載する。

土器は、須恵器・土師器からなり、全体の約3/4が土師器で占められる。須恵器が杯・大甕を主体とする器種構成であるのに対し、土師器の大部分は甕・甌からなる。

(1)~(6)は須恵器杯蓋および杯身である。

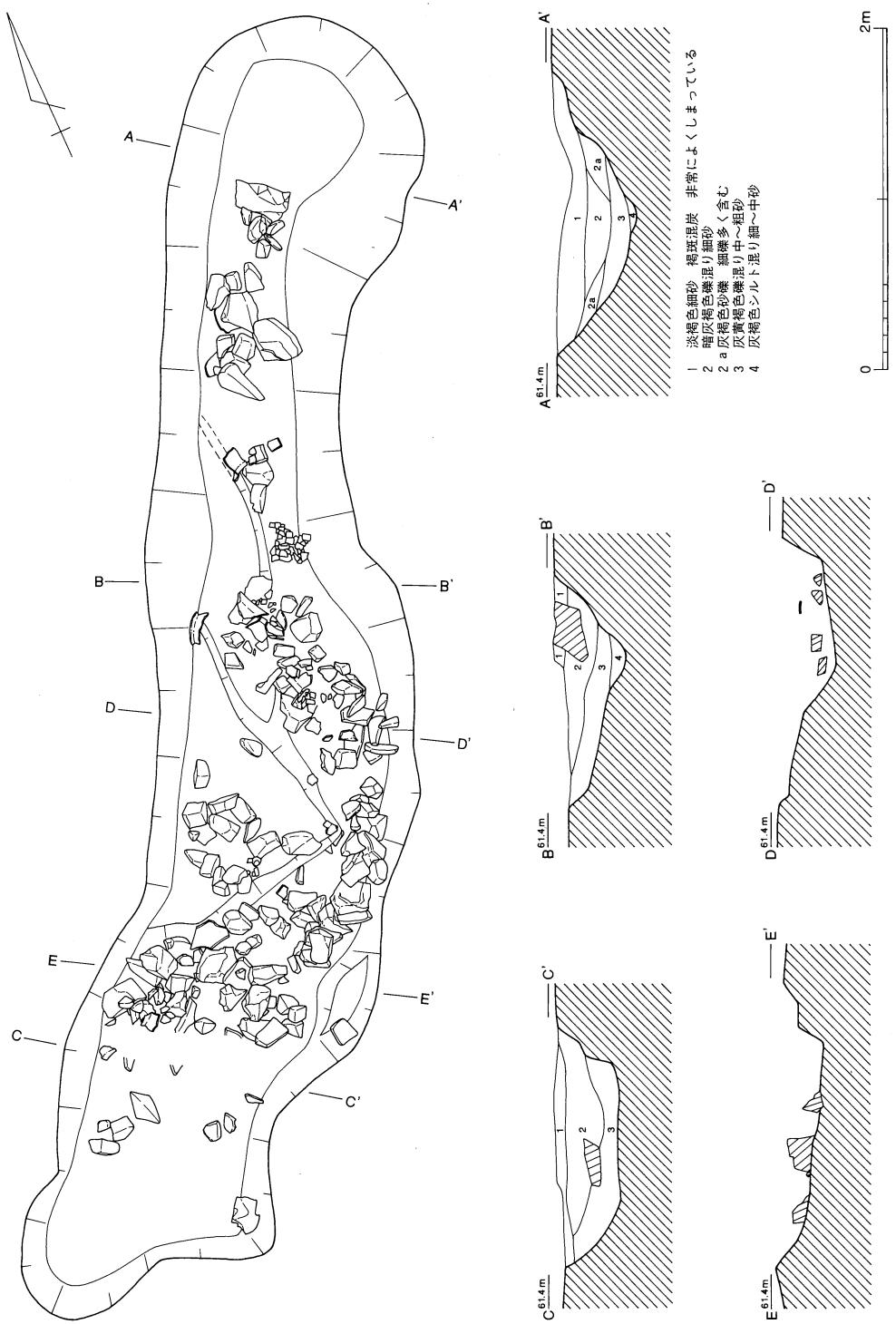
杯蓋(1)は、小型の乳頭形つまみを有するもので、内面の反りは大きく下方へのびる。天井部は、ヘラケズリが施されている。

杯身(2)~(6)は、いずれも高台をもたない。焼成不良で磨耗の著しい(6)を除き、底部はいずれも、ヘラ切り後、ナデ調整が施される。(2)は、高・径比が他と大きく異なる。口径は縮小し、体部の立ち上がりは急斜度となっている。型式上、(3)より後出の要素といえよう。

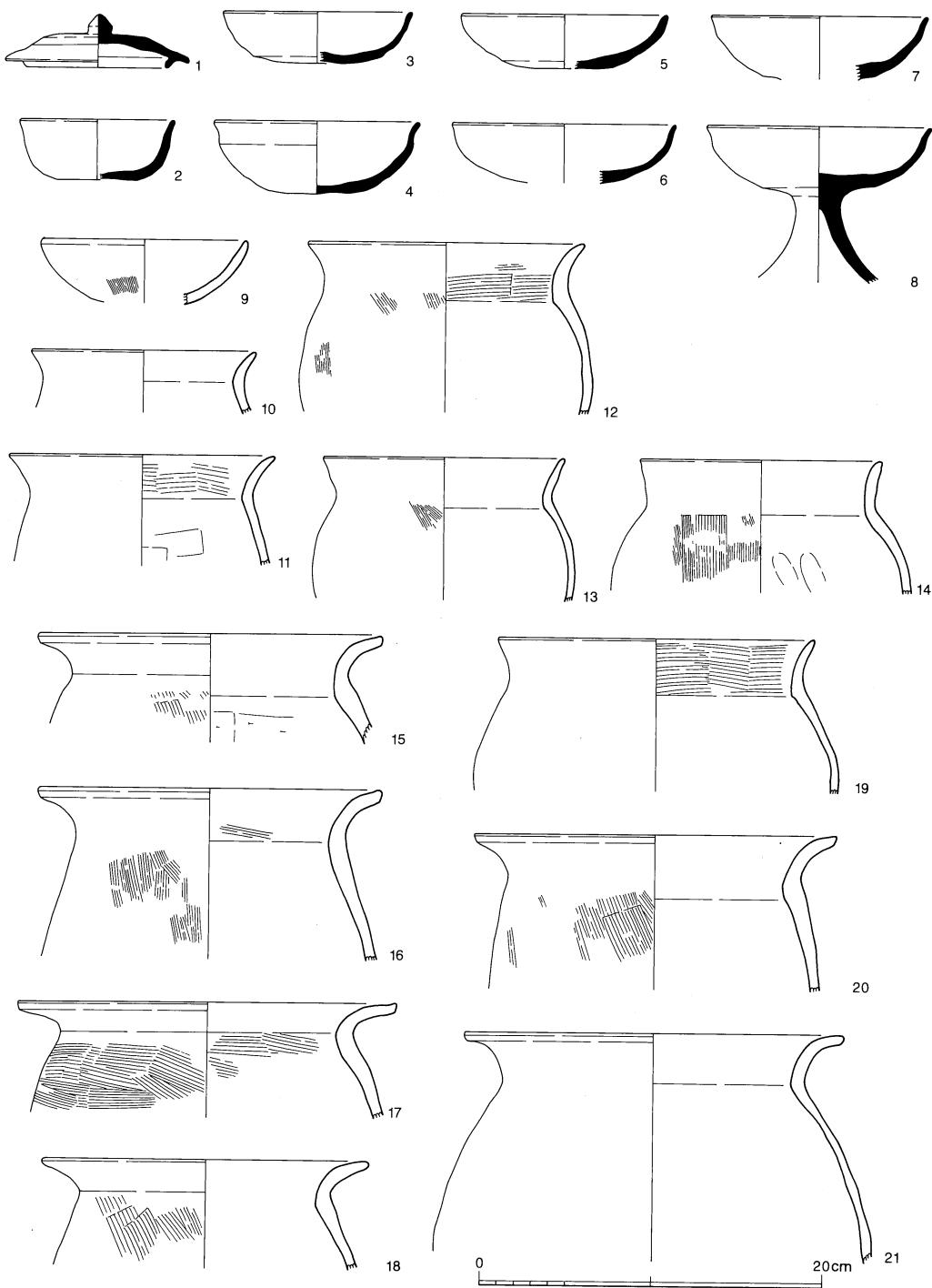
(2)は、口径9.6cm、器高3.6cmを測る。(3)~(6)は、口径11.2cm~13.2cm、器高2.4cm~4.4cmを測る。

(7) (8)は須恵器高杯である。杯部の形態は、相互に酷似している。口縁部は外反し、端部は丸く仕上げられている。焼成が良好でないため、調整痕の観察は困難である。杯部の径は、13.6cmを測る。

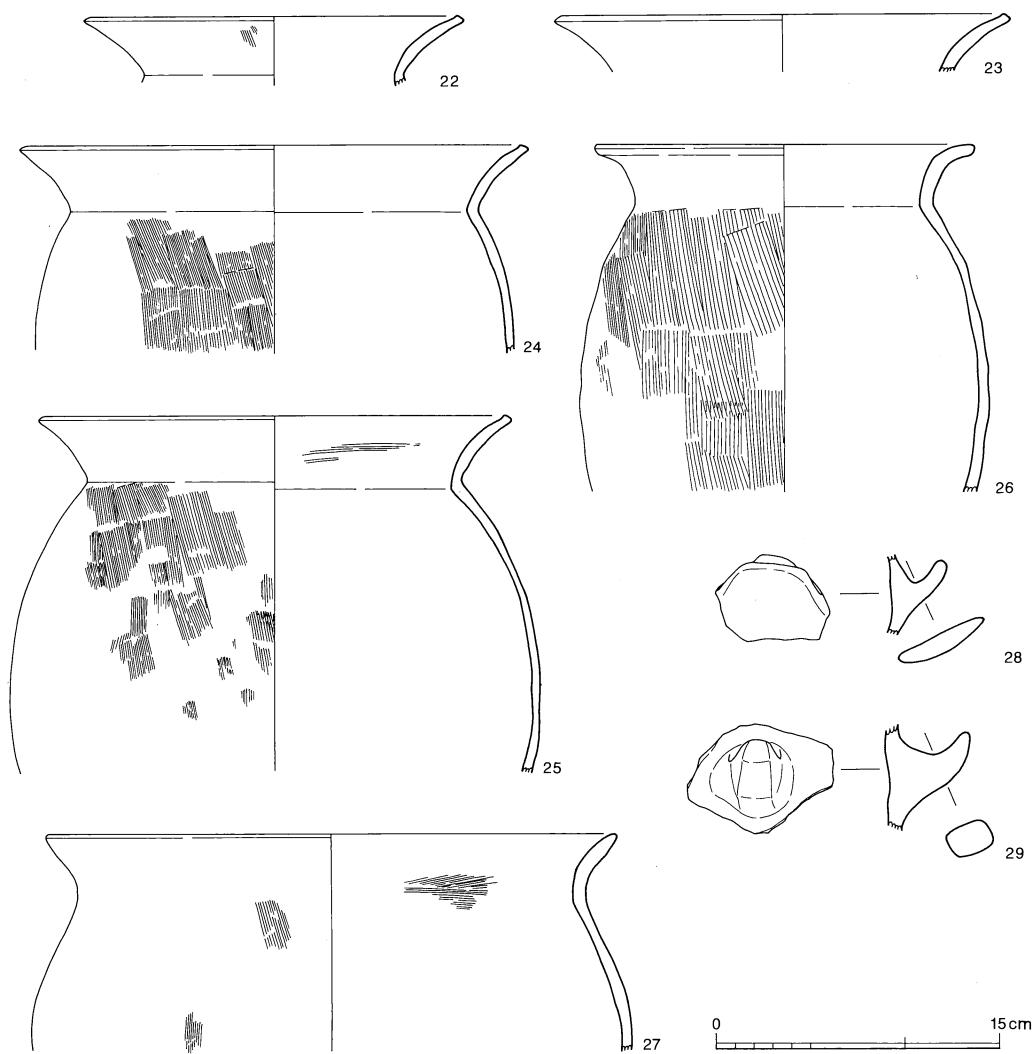
甕(30)(31)はいずれも、やや外反する短い口縁部をもつ。(31)では、外反したのち上方に屈曲しており、ともに端部には平坦な面をもつ。体部外面は、(30)が格子目タタキ、(31)は平行タタキの後カキ目調整が施される。内面はともに同心円タタキが施される。



第31図 S D O I 実測図



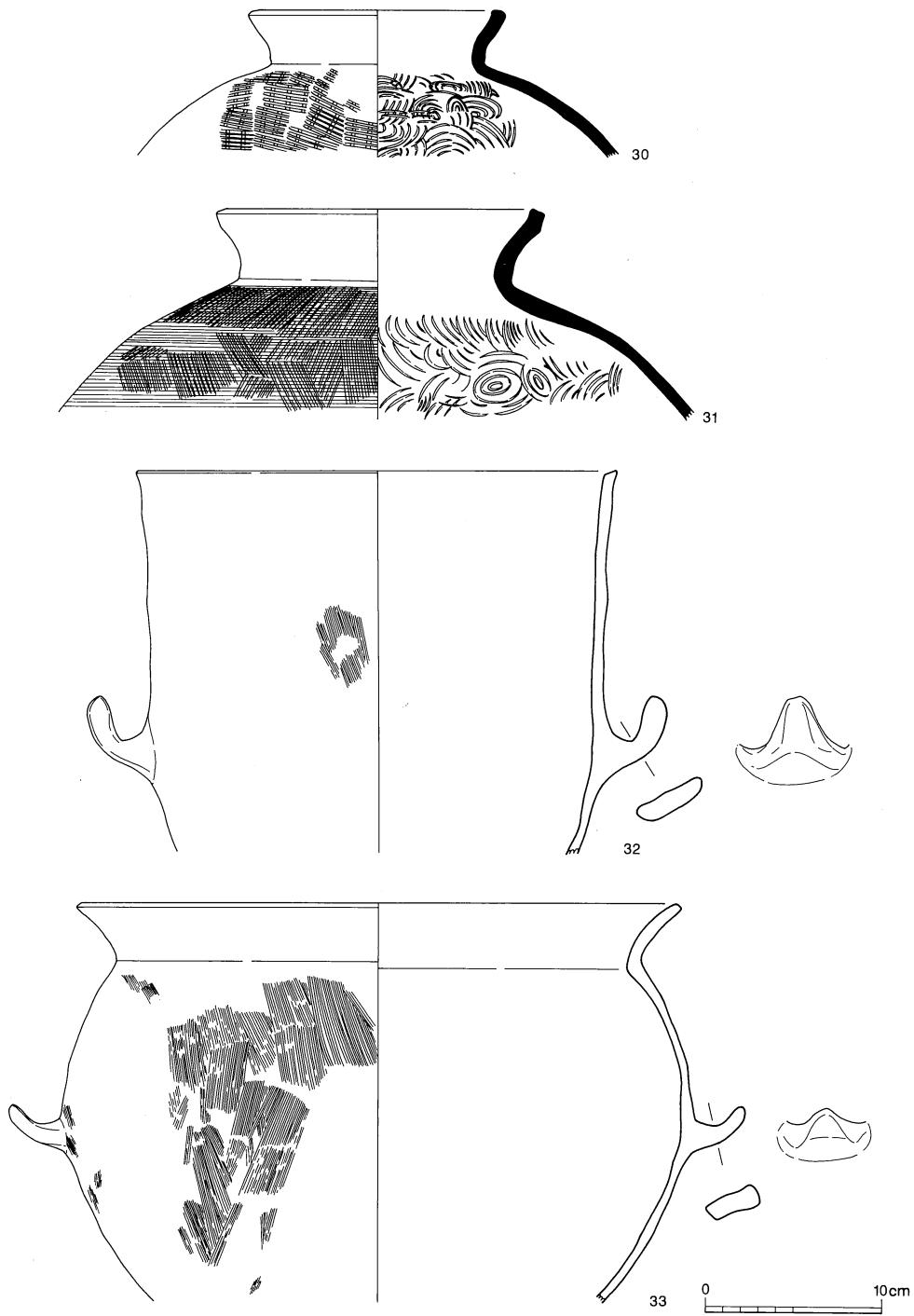
第32図 SD01 出土土器実測図(I)



第33図 S D O I 出土土器実測図(2)

(9)は、土師器杯である。体部は緩やかな丸味をもち、口縁部はわずかに厚みを増し丸く仕上げられる。器表は磨耗のため、調整は鮮明ではないが、一部にハケ目の痕跡が認められる。口径は約12.4cmを測る。

土師器甕は、3形態に大別される。口縁部が短く、外反の程度が弱いもの(10~14・19)と、口縁部が強く外反するもの(15~18・20・21・26)、体部から口縁部への屈曲が明瞭なもの(24・25)である。(22・23)は、体部を欠くが、形態は後者に類似する。口径は、前者・中者・後者の順に大型化する。



第34図 S D O I 出土土器実測図(3)

口縁部の形態は、前者は体部から緩やかに口縁部に至り、やや外反しつつ立ち上がる。端部は丸く仕上げられている。中者は、強く外反する口縁部をもち、(17・21)等では水平に近い。端部外面は、面をもつように仕上げられる。後者では、体部から口縁部への屈曲が明瞭であり、やや外反気味に立ち上がる。端部は、明瞭な平坦面をもつように仕上げられている。

器面調整は、遺存状況が必ずしも良好でないため不明の点も多い。概ね、外面については横または縦方向のハケ目、口縁部内面はナデ、横方向のハケ目が施される。体部内面には、ヘラケズリが施されるものが見られる。

甌は、把手のみのものを含め、4個体が認められる(28・29・32・33)。ほぼ直立する体部から、そのまま口縁端部に至る形態の(32)、膨らみをもつ体部から、屈曲して開く口縁部をもつ(33)という、対照的形態を見せてている。

器面調整は、風化による磨耗のため観察困難な部分もあるが、体部外面には概ね縦方向のハケ目が施されている。

把手(28・29)も、同様の甌のものであろうが、(28)はやや小型である。

第35図(1)は、鉄製品である。下半を欠くが、断面が方形の釘状を呈し、先端を折り曲げられている。

遺構の性格と時期

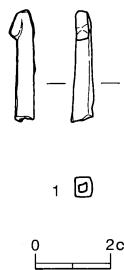
土器類とともに廃棄されていた礫は、径が10cm前後のものから、20cmを超える大型のものまでを含んでいる。礫自体には人為的破碎・使用等の痕跡は認められない。しかしながら、廃棄状況は既述のように土器類との一括性が強く、何らかの構造物をなしていた可能性も考慮すべきであろう。

SD 0 1は、廃棄を目的として掘られた遺構であろう。出土遺物は、甌・甕などの日常生活に用いられたと考えられるものが主体を占めている。SD 0 1の北には、SB 0 1が位置しており、既述のSB 0 2と、SD 0 2の位置関係とに類似する。

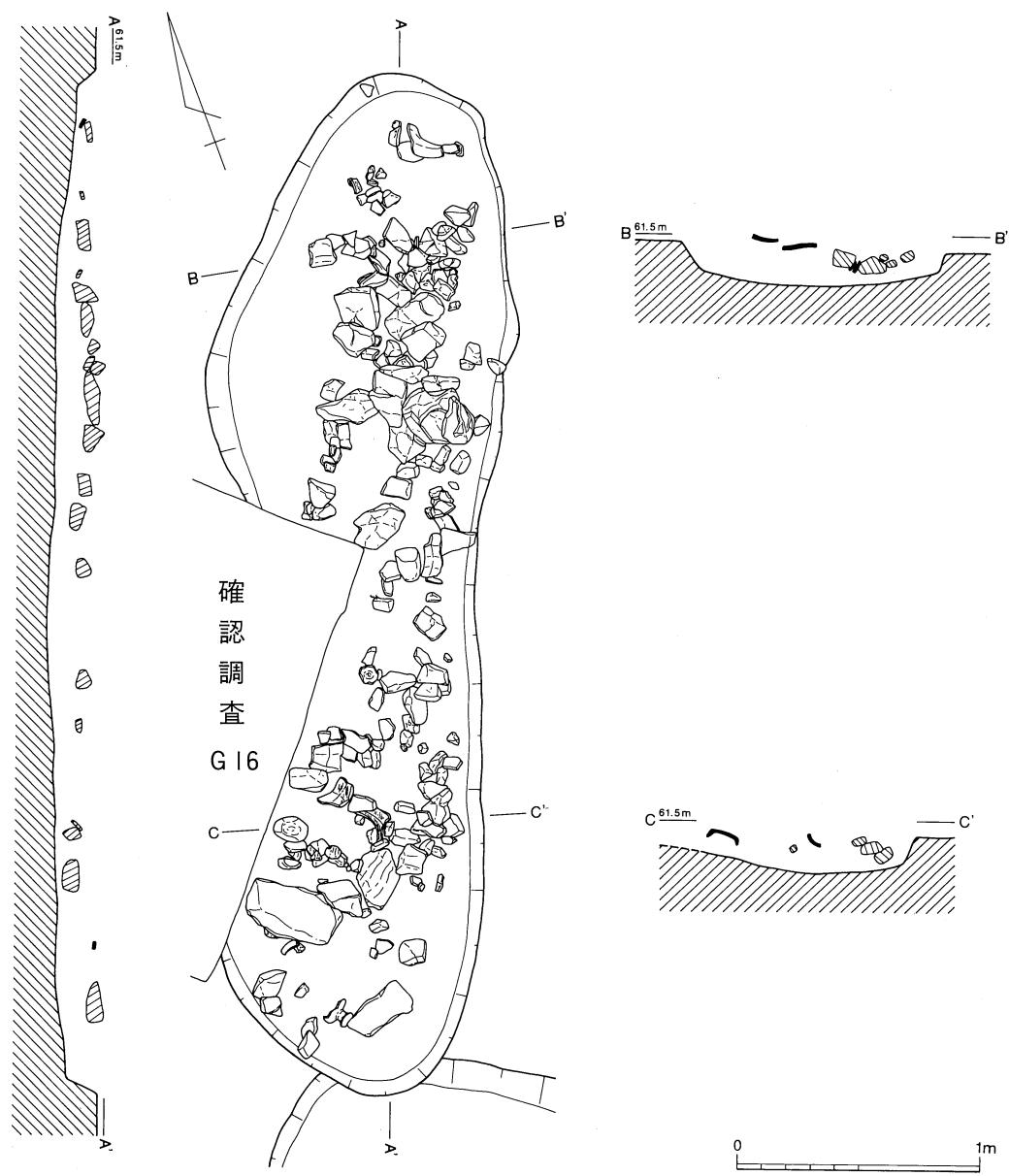
また遺構の所属時期は、出土遺物から7世紀前半の比較的限定された期間に収束するものと考えてよいだろう。

② SD 0 2

SB 0 2に伴う溝であるが、SD 0 1のようにぴったりとはオーバーラップしていない。竪穴住居跡の西辺の延長上に築かれ、僅かに住居跡の北西コーナー一部だけが重複している。主軸はN24°EとSB 0 2と僅かに異なっている。一部は確認調査の坪によって欠失している。溝内は角礫とともに遺物が含まれている。意図的に入れられたものと思われる。長さは4.45mで全長である。幅は一律でなく増減がある。最も広いところで1.25m、狭いところで1.0mである。



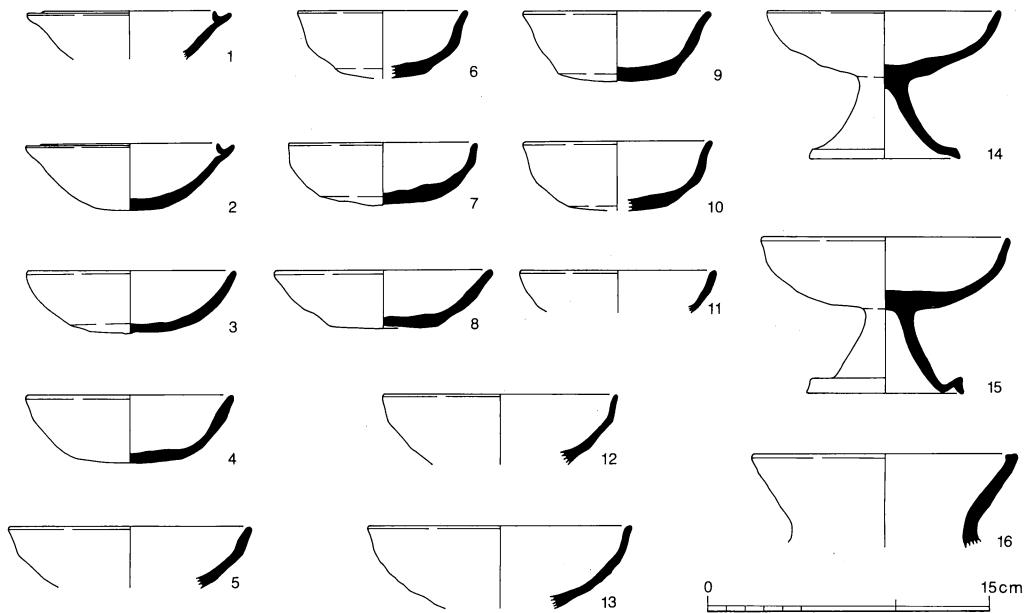
第35図 SD 0 1
出土鉄器実測図



第36図 SD02 実測図

浅い溝で、深さは0.1~0.15mである。

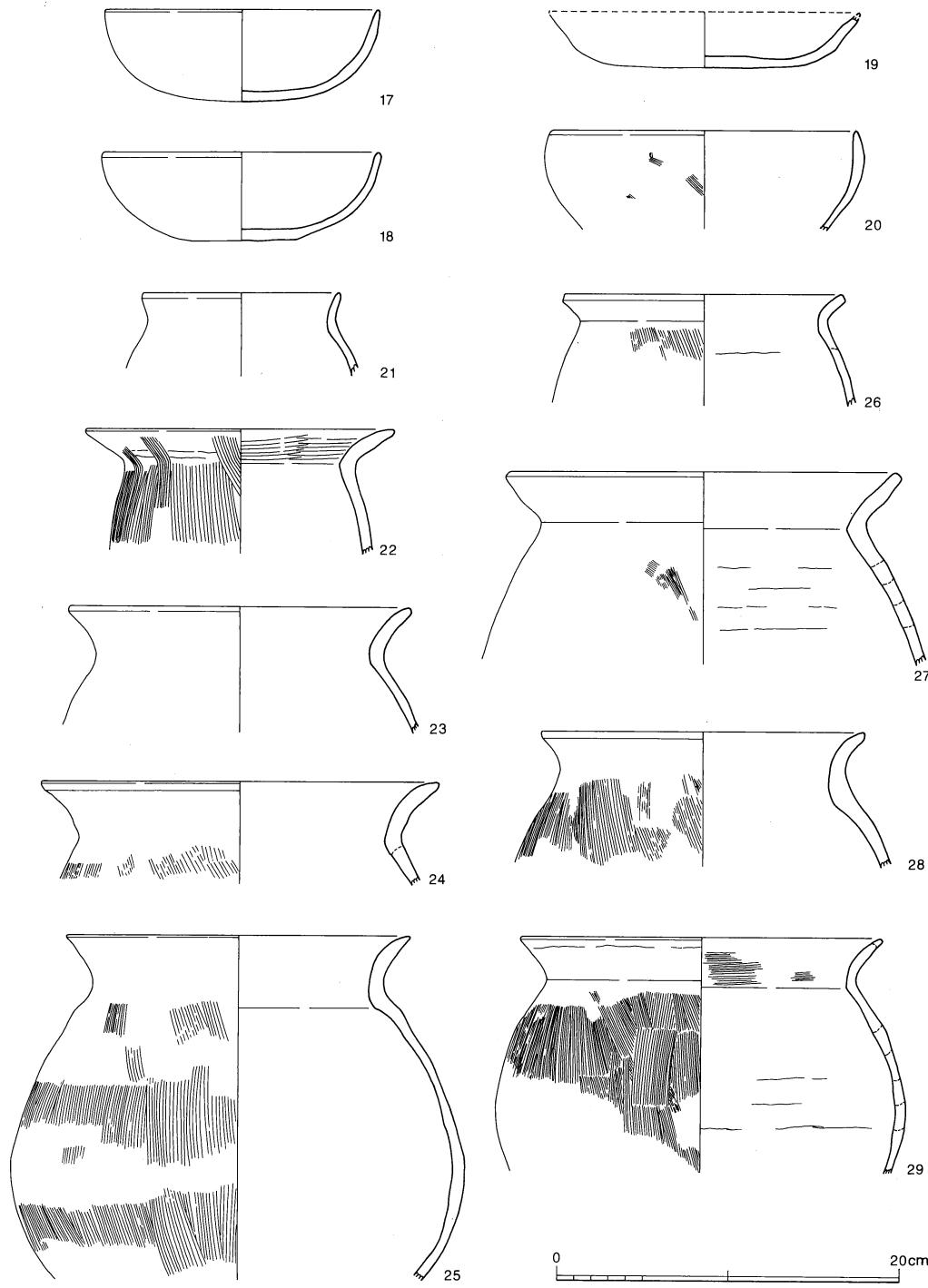
断面の形状は舟底状になっており、中央部分が最も深かった。大半の土器・礫は底には接していないかった。土器の出土状態からは規則性は見出せなかった。図化したものは33点を数える。



第37図 SD02 出土土器実測図(I)

須恵器は16点図化している。その内訳は杯身11点、高杯4点、甕1点である。杯身のうち2点だけは立ち上がりが残っている。消失寸前のもので、端部がほぼ同じ位置まで下がっているタイプである。ともに口径9.0cm余りの小型品である。他の杯身は底部が丸い、やや安定を欠くものと、安定性のあるものとに分けられるが、中間形態のものも多く時期差とは思われない。(3)は最も丸いもので、口径10.8cm、器高3.4cmを測る。自然釉がかかっており、口縁端部は歪んでいる。口縁端部も尖りぎみのものや丸く納めるものなどがあるが、個体差であり、時期的なものとは思っていない。高杯は4点出土しているが、全体がわかるのは2点である。(14)は口径12.2cm、裾径7.9cm、器高7.8cmを測る。表面磨滅のため、整形技法は不明である。杯部は椀状で端部は丸く納めている。裾も緩やかに彎曲しており端面を有している。(15)はやや大きく口径12.9cm、裾径8.05cm、器高9.3cmを測る。杯部は(14)に比べると底が平たい杯部になっている。脚部は直線的に広がったのち、端部手前で大きく屈曲し、上方に延びてから端面を持っている。屈曲部は僅かに裾部より高い位置にある。やはり、表面が磨滅しており焼成は甘い。(16)は甕の口縁部である。口径13.8cmと中型の甕で、ロクロナデで仕上げられている。

土師器は17点図化している。その内訳は杯2点、皿1点、鉢1点、甕11点、把手付甕(鉢)1点、大型鉢1点である。杯はともにやや径が大きく、(17)で15.8cm、(18)で15.9cmを測る。ともに磨滅著しい。(19)の端部は残っていないが、ほぼ全容を想像出来る皿である。口径17.8cm、器高3.3cmに復元される。(20)は2次焼成を受けている鉢で、内面には有機質が付着している。



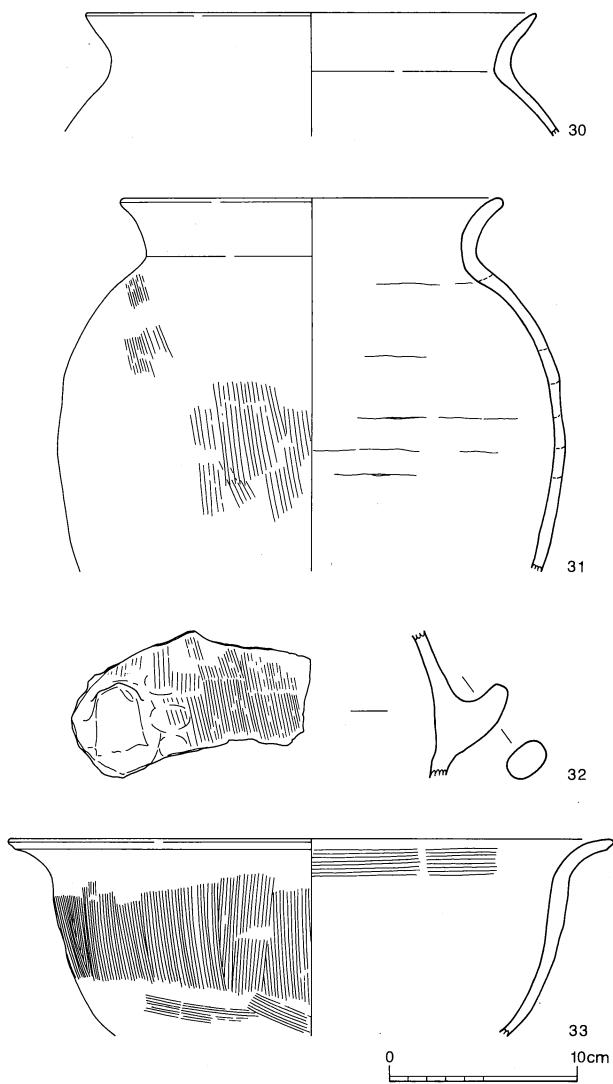
第38図 S D 0 2 出土土器実測図(2)

最大腹径のところが最も器肉が厚くなっている。口縁端部に向かって内傾している。端部はヨコナデで仕上げている。外面はハケ整形である。口径17.6cm、残存高5.75cmを測る。甕は11点あるが、体部が球形のもの〔(25)(29)〕と長胴を予想させるものの(31)がある。すべて外面はハケ整形で、内面はユビで仕上げるものである。特に内面は粘土紐の継ぎ目が明瞭なものが多く実用品と思われ、精製甕は出土していない。端部の変化はあるが、大きな変化とは思われない。(32)は把手部の破片であることから、明確に器種は言えない。対となる一般によく見られる把手である。(33)は口径31.8cmと大型の鉢(鍋)である。外面・口縁部内面はハケ整形を施し、口縁部はその後ヨコナデで仕上げている。

③ S D 0 3

S X 0 2 に伴う溝で、8区に位置している。S X 0 2 の南側の肩部に築かれている。他の遺構と異なり、主軸がN45° Wと直交方向になっている。形状は不定形であるが、S X 0 2 と重複していることから、不定形になっているのかもしれない。現状では広いところで幅0.85m、狭いところで0.5mである。現存長は2.5mである。S X 0 2とともに東側に延びている。深さも0.2~0.3mと浅いものである。

出土遺物はないが、埋土などから古墳時代末の遺構群よりは、やや新しい遺構ではないかと思われる。



第39図 S D 0 2 出土土器実測図(3)

5. 上層の遺構

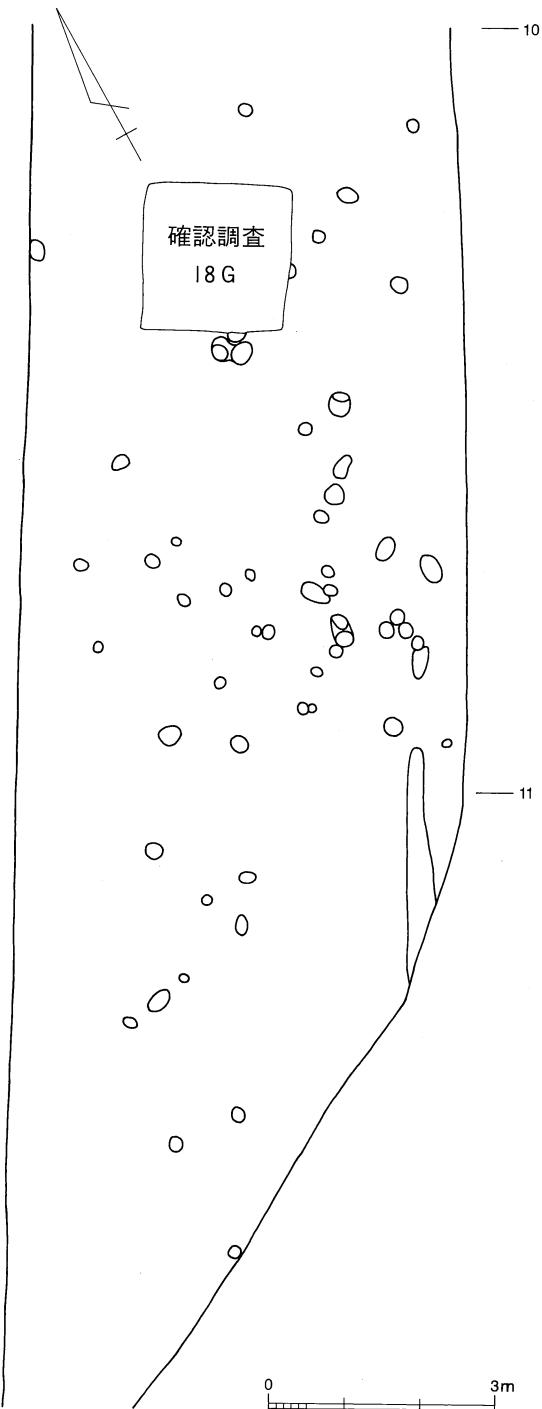
調査区の両端である1区と11・12区でのみ層序(垂直)的に遺構を検出した。多少規模の大きなものもあるが、大半はピットである。しかも明瞭に柱痕が残っているものは検出されなかったことから、特に北側については確実に生活していたか否かは不明である。また、遺物もほとんど出土していないことから、時期も確実には決定出来ない。南側はある程度まとまってピットも検出されていることから、小規模ながら遺構を築いていたのではないかと考えられる。さらに北側(7~9区など)で検出されている一部が同時期の遺構になる可能性もある。

6. 上記以外の遺構出土の遺物

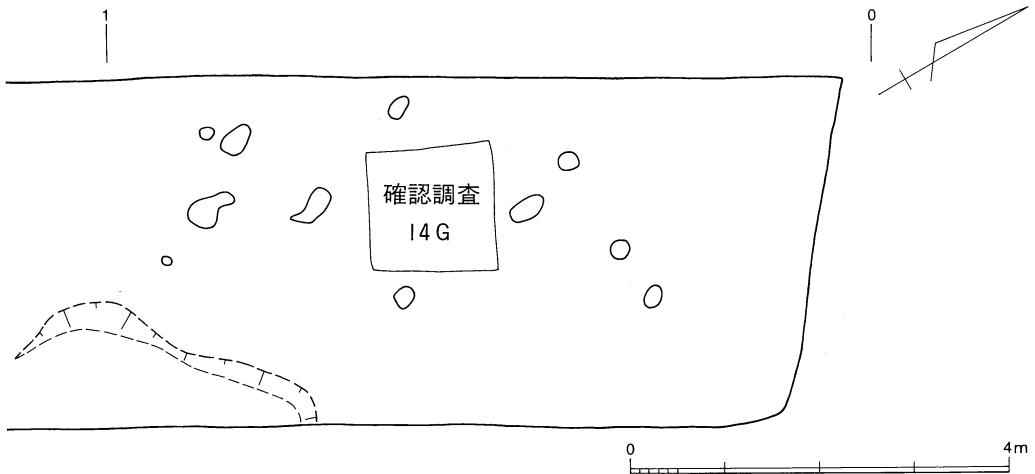
住居跡・溝など上記の遺構以外の遺構および遺構面上から出土した遺物をここで報告する。図化したものは10点である。須恵器5点、土師器5点である。遺構でみると、(1)(5)はSB03出土の可能性が残されているが、他はそれら遺構には属さないピット・溝などからの出土である。

(1)~(4)(6)は須恵器杯身である。端部の細かい差はあるものの同時期の杯身である。径も小さいもので、器高も3.3~3.7cmと一般的である。(2)(6)の口縁端部には重ね焼きの痕跡が見られる。

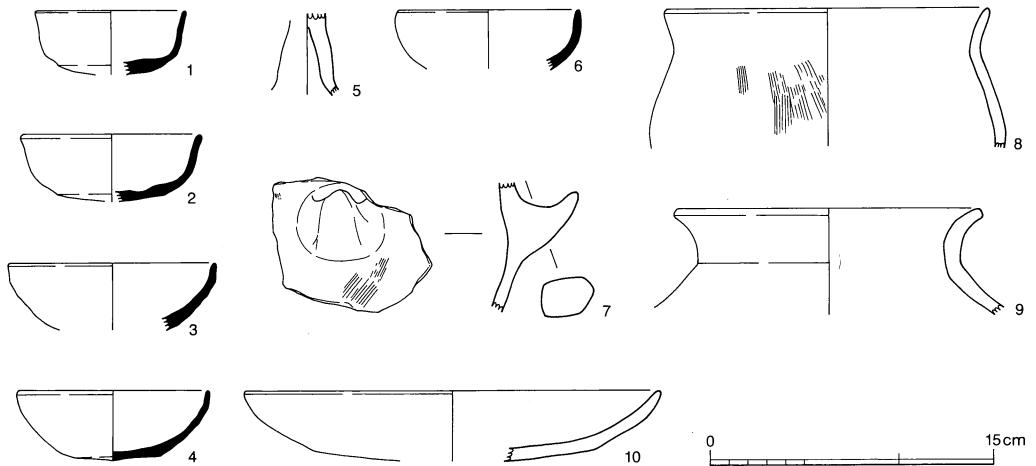
(5)は磨滅しているものの高杯ミニチュアの柱状部と思われる。(7)は把手付甕の把手部で、内外面ともハケ整形している。(8)(9)は甕の口縁部である。(8)は口径16.9cm、残存高8.3cmを測り、やはり表面が磨滅して



第40図 上層遺構 実測図(I)



第41図 上層遺構 実測図(2)



第42図 遺構 出土土器実測図

いる。口縁部は折り曲げて成形している。外面はハケ整形であるが、内面は磨滅のため不明である。(10)は丹塗りの精製土器である。口径21.7cm、残存高3.15cmを測る皿である。磨滅しているが、数少ない奈良時代の遺物である。

7. 包含層出土の遺物

包含層出土の遺物を最も多く数える。須恵器・土師器の土器の他に石器・鉄器・瓦が出土している。図化した点数は80点である。

①土器

図化した点数は68点である。その内訳は、須恵器54点、土師器14点である。第43図はS B 0 1・0 2などの古墳時代末の遺構の上面に広がった包含層出土の遺物で第44～46図は確認調査も含めてそれ以外の層から出土したものである。

須恵器の中で最も量の多いのは、杯である。杯蓋にはつまみのあるものとないものがある。ただ、つまみが残っているものはない。(1)は唯一図上で完形の蓋で、天井部は丸くなっている。口径10.7cmのわりに器高4.1cmとやや高いものである。(2)～(7)は宝珠つまみを有する蓋であるが、すべてつまみ部を欠いている。ほとんど端部と反りが同じ高さであるが、(7)は反りが下がっており、作りもシャープである。大半は端部が厚く、鈍い稜を持っている。特に(5)(6)はそれが顕著である。(2)(3)(7)は天井部に自然釉が付着している。

杯身は22点図化している。(8)(9)は立ち上がりが残っているタイプである。(9)は端部もシャープで口径も11.0cmとやや大きい。自然釉付着のため確実ではないが、ケズリを施しているようで、古相を示しているのかもしれない。(10)～(29)は立ち上がりを持たない杯身であるが、プロポーションや細部は異なっている。端部でも外反するもの[(10)(11)]、やや内彎するもの[(12)(24)]、端部が肥厚するもの(13)、口縁部が直立し端部が尖りぎみのもの(16)、端部より下に最大径を持ち端部が内傾するもの(17)などに分けることが可能である。底部も平底に近いものや丸底のものもある。細かい差はあるが、大局的には同時期と考えざるを得ないかもしれない。

(30)(31)は壺の口縁部である。(31)は頸部がやや歪んでいることから平瓶の可能性も十分に考えられる。内面にナデ調整の際の布の痕跡が見られる。

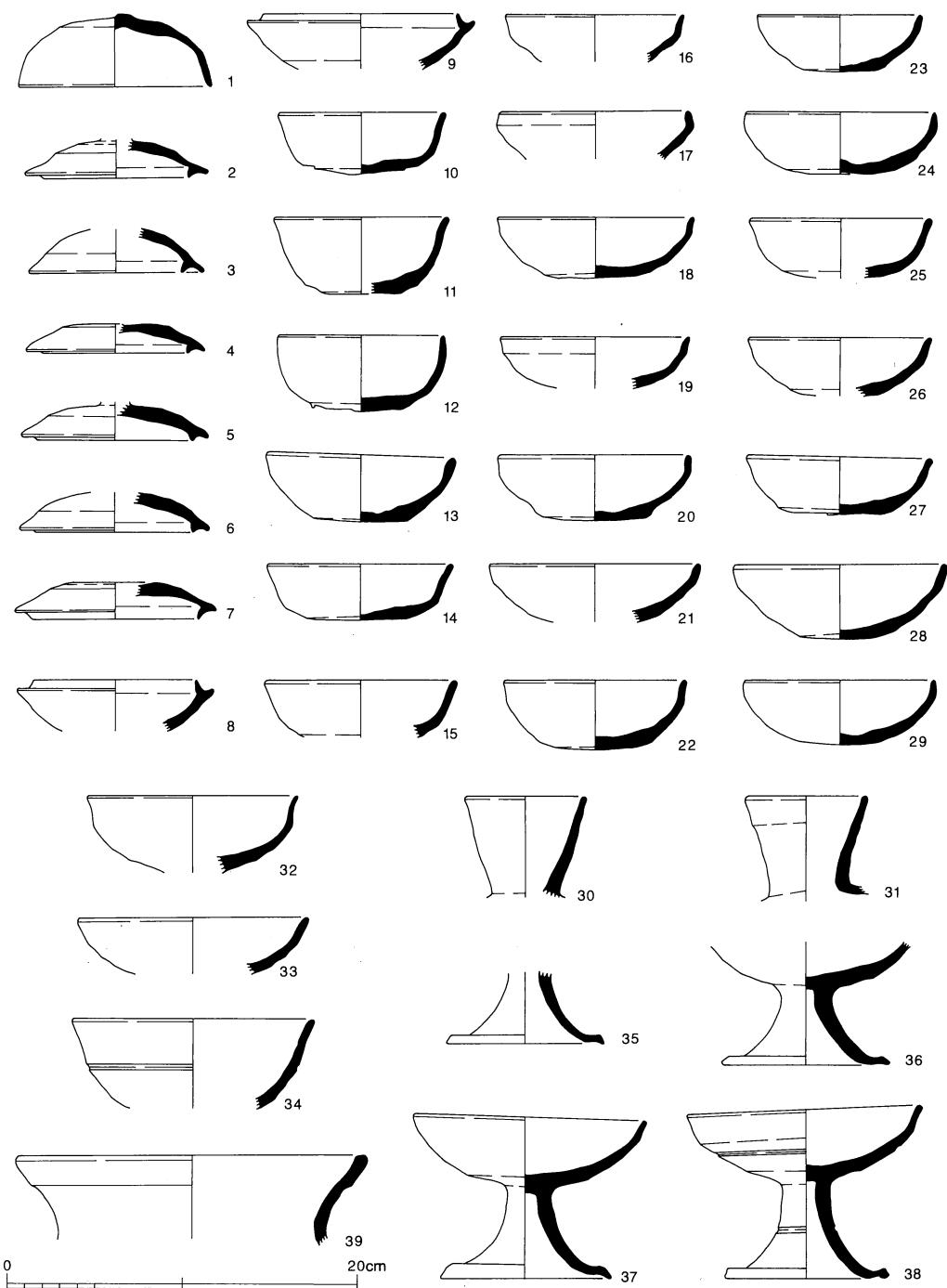
(32)～(38)は高杯である。(32)～(34)は杯部の破片で、(34)には体部に沈線が施されており、やや杯部が深めである。(35)(36)は脚部の破片で、(37)(38)は図上で完形になる。端部など細部は異なるが、同じタイプの高杯である。(38)は(34)同様杯部に沈線が見られる。

(39)は甕の口縁部である。口径19.6cmと中型の甕である。端部は面となるように幅広く肥厚している。(39)までの須恵器が古墳時代末と考えられる。

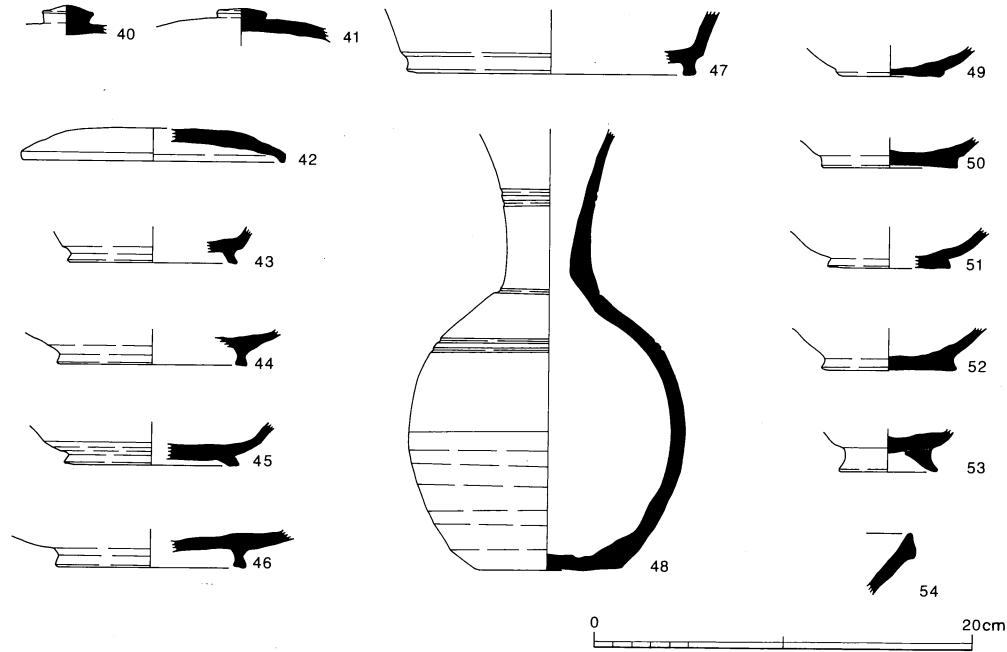
(40)～(42)は奈良時代の杯蓋である。(40)(41)はつまみ部が残っているが天井部だけの破片で、(42)はつまみ部を欠く破片である。つまみは退化しており、口縁部も屈曲せず軽く曲げただけである。(42)には重ね焼きの痕跡が見られる。

(43)～(47)は輪高台を持つ底部である。(43)(44)は杯、(47)は壺で、(45)(46)の器種は決めがたいが、やや大型の土器になろうと思われる。端部は外方に踏ん張るものと内外面に肥厚するものがある。

(48)は長頸壺で、口縁部を欠くがほぼ完形に近いものである。体部は球形に近く、体部のほぼ中位に最大腹径14.6cmをもっている。肩部に2条の沈線があり、最大腹径より上部はロクロ



第43図 包含層 出土土器実測図(1)



第44図 包含層 出土土器実測図(2)

ナデで仕上げられている。沈線は頸部に2条と頸部と体部の接合部にも1条見られる。残存高は23.1cmで、あと僅かで口縁端部と思われる。底径は7.4cmを測り、ヘラ切りによって平らになっている。が、体部が球形であることから、平底には見えにくい。ナデ調整を加えている。器壁は余り薄くないが精製品で、外面にかかっている緑色の自然釉がなおさら精製品に見せている。

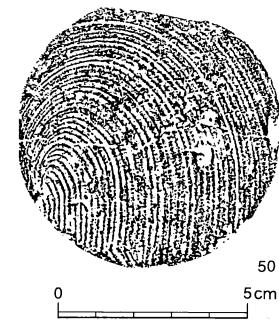
(49)～(53)は底部である。(53)だけが外方へ広がる輪高台を付けているが、その他は糸切りのベタ高台である。(52)は静止状態での糸切りで糸が太いようである。

(54)は東播系の鉢の口縁部である。耕土などから出土する陶磁器を除くと落地遺跡の下限を示す遺物である。12世紀後半から13世紀初頭のものと思われる。

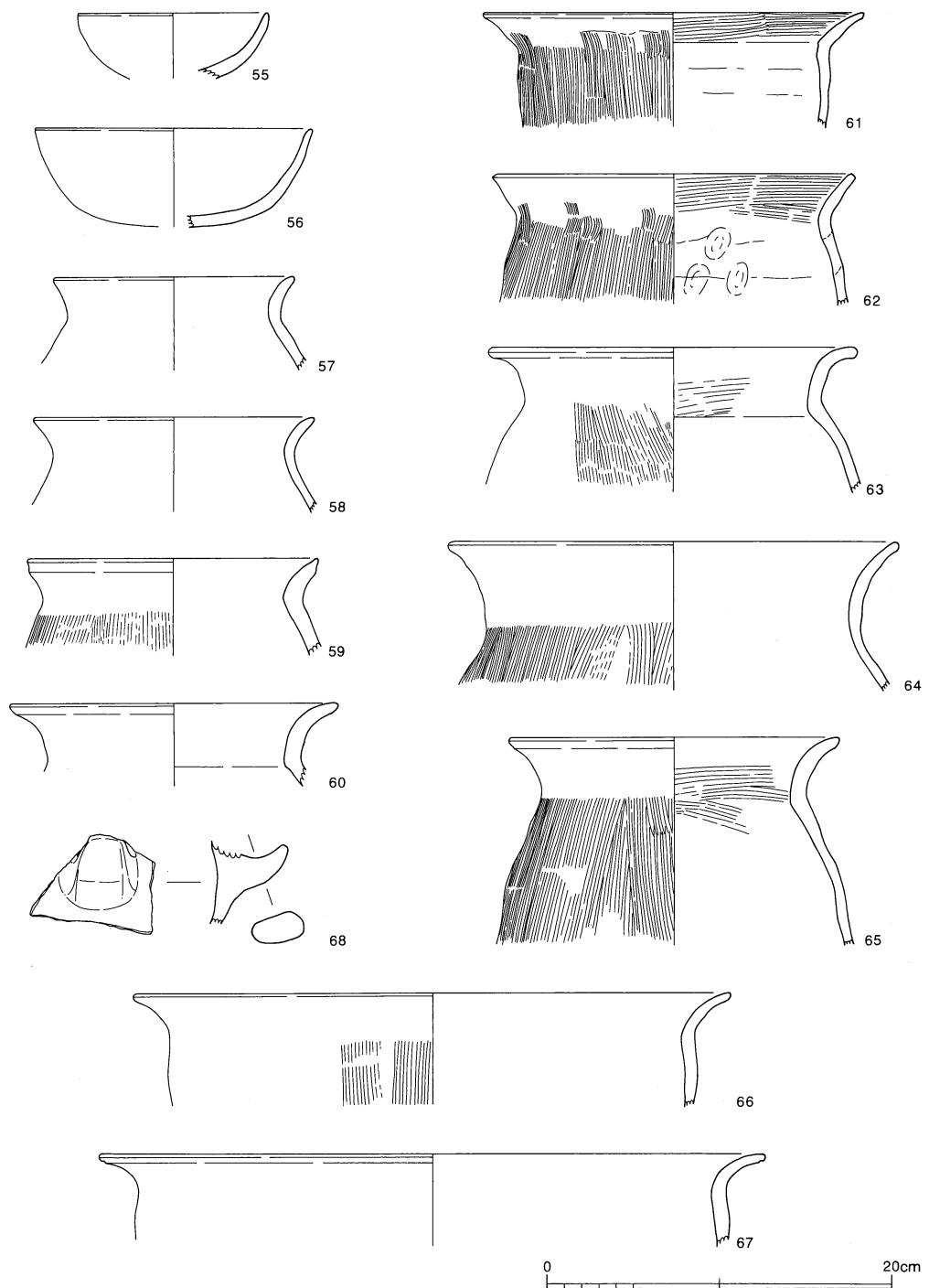
土師器は14点図化しているが、土器の性格上磨滅し、細片となっていることが多いため、出土量が少なくなったもので、出土割合は須恵器と変わらないものと思われる。

(55)(56)は椀で底部が丸くなっている。古墳時代末のものと思われる。(55)で10.8cm、(56)で15.9cmの口径を測る。

その他は甕で、(68)は把手部だけの破片である。甕には体部が球形のものと長胴になるもの



第45図 出土土器拓本

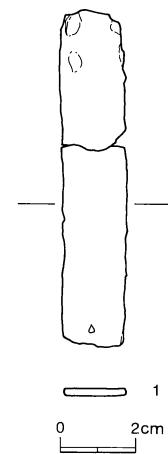


第46図 包含層 出土土器実測図(3)

がある。口縁部はくの字のものだけであるが、口縁部が大きく体部が小さくなっていく鍋に近いものもある。磨滅しているものが多く成形技法も明確でないが、外面はハケ整形しているものが主である。内面も口縁部はハケ整形を施しているものが多く見られ、その後ヨコナデで仕上げている。端部は外反するものや、肥厚するものなど数タイプ見られる。

②鉄器

小札状の鉄器である。長さ11.0cm、幅1.8cm、厚さ0.2cmを測る薄い板状の鉄器である。片側に0.15cm前後的小孔が穿たれている。形状などは小札に似るが断定は出来ない。



第47図 包含層
出土鉄器実測図

③石器

今回の調査では、遺物包含層中より4点のサヌカイト製石器と、1点の砂岩製砥石が出土した。以下にその記載をおこなう。

(1)は、二次加工のある剥片である。打点の偏った横長剥片を素材とし、その打面側側縁に、腹面側から粗い二次加工が施されている。

上半部は二次加工後に、折損している。

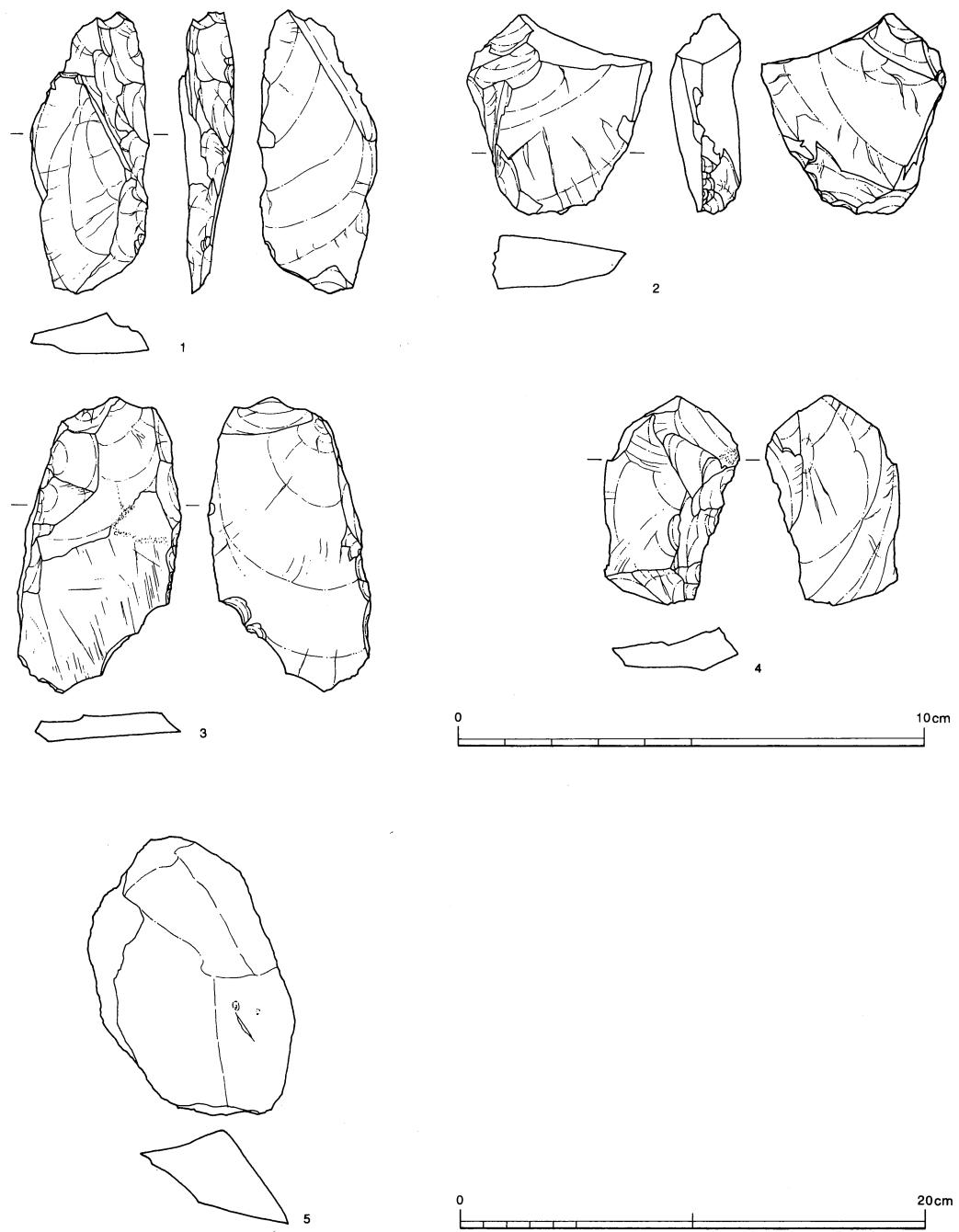
素材剥片の縁辺は、蝶番状剥離となっており、鋭利なものではない。

(2)は、上半を欠くが、厚い剥片の一端に、背面側から二次加工を施したスクレイパーである。素材剥片は、平坦打面を有する。

(3)は、縦長剥片である。背面側下半は、研磨されており、その状況から、本来大型の磨製石器であったものから剥離されたものであろう。背面側には、内側縁からの剥離痕が見られる。

(4)は横長剥片である。打面は2枚の剥離面からなり、背面側打面縁には、比較的小さな剥離痕が認められる。背面側の剥離痕は、いずれも腹面側と同一の剥離方向を示す。

(5)は砥石破片である。2面に、わずかに凹面となる砥面がもうけられている。他の面は破碎面、もしくは、素材となった亜角礫の礫面である。石材は、判然としないが、石英質がほとんどを占める。微結晶質の火山岩と思われるもので、砥面などから、わずかにラミナ状となる構造を識別することができる。現存重量は、720gである。

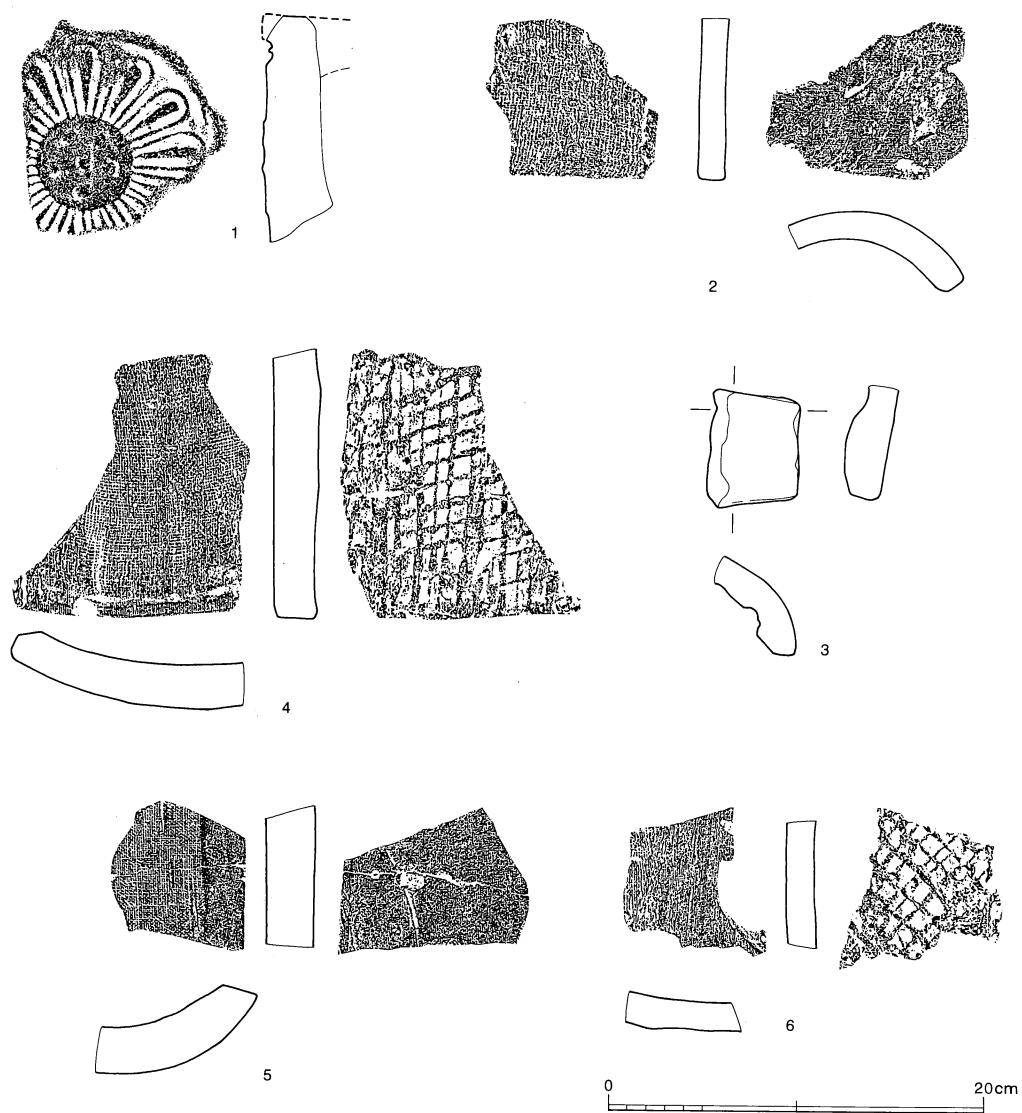


第48図 包含層 出土石器実測図

④瓦

少量ながら瓦が出土している。やはり、瓦を伴う遺跡の本体が北側に存在するためか、南側までは広がっていない。調査区北側に限って出土している。他に小片も10数点出土しているが、図化したのは6点である。

(1)は軒丸瓦である。今里氏の分類する古大内亞式と呼ばれるものである。調査区北端である1区から出土している。大きな磨滅は受けておらず、『源氏屋敷』から流れてきたとは思われ



第49図 包含層 出土瓦実測図

ない。十三葉細弁蓮華文で内房の蓮子は1:5である。包み込み式の技法が採用されている。周縁は無文である。

(2)(3)は丸瓦である。凹面は布目で凸面はナデている。

(4)～(6)は平瓦である。凸面のタタキの種類は2種類あり、(4)(6)が格子タタキで、(5)はナデしていることから不明である。凹面はすべて布目である。(5)の平瓦は重量感があり古相を示しているようである。

(3) 飯坂調査区の調査結果

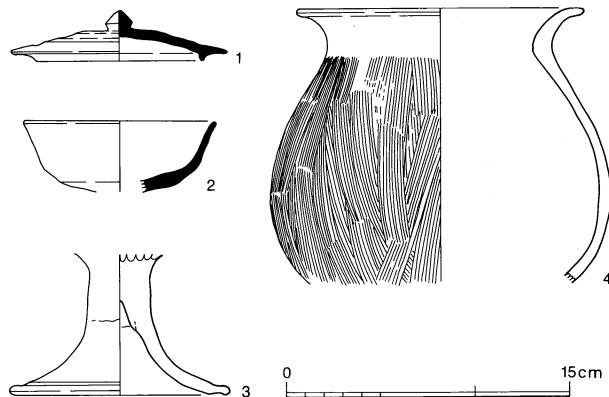
IV. 確認調査のところで記してあるように、飯坂地区については小面積であることから確認調査の際に併せて調査を実施した。その結果、溝を2条検出した。当調査区は『源氏屋敷』に隣接し、野磨驛家の関連遺構が確認されないかと期待されたが明瞭な遺構は確認されなかった。

遺構は溝で、明瞭な遺構とは言い難い。しかし、2条の溝は切り合っている。最大幅1.5m、深さ0.4mでしかも幅を変えていることと地形に即していることから自然の可能性も考えられる。

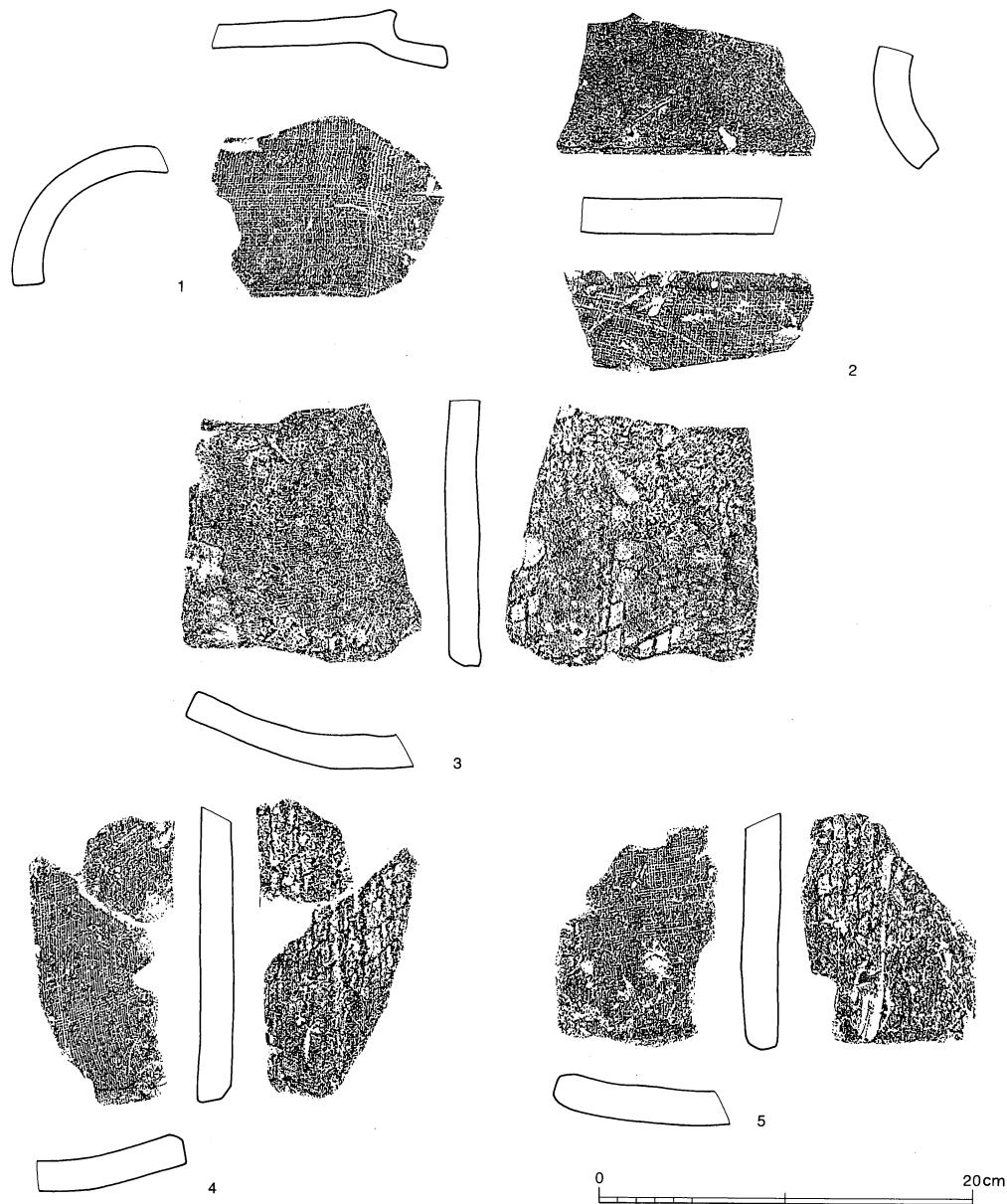
溝内からは、土師器・須恵器・瓦が出土している。須恵器は杯身と杯蓋が1点ずつ出土している。(1)は全体像のわかる蓋で、宝珠つまみを有している。端部は鈍く、器壁もやや厚い。口径8.7cm、器高2.7cmを測る。(2)は杯身で、(1)と同一層から出土しているがセットではない。(3)は土師器高杯脚部で、外面はヘラで粗く調整を加えた柱実の脚部である。(4)は甕で、最大腹径が下方にある下膨れのものである。外面は7本/cmのハケ整形で、内面はユビ成形のち調整を加えている。口縁部は折り曲げて作っており、頸部はやや厚い。(1)(2)とほぼ同時期になろうかと思われる。

瓦は5点図化している。表面採集のものも含まれている。丸瓦2点、平瓦3点である。平瓦には包含層出土の格子タタキ以外に縄目のタタキも見られる。

飯坂調査区から北東約40mに『源氏屋敷』と伝承される方1町に近い場所がある。杉林の中には瓦が散布し、雑木林のなかには土壇状の高まりや礎石（第53図）が残存している。野磨驛家とは断定出来ないが、遺跡の存在は間違いない、今回の調査で



第50図 飯坂調査区 出土土器実測図



第51図 飯坂調査区 出土瓦実測図

遺構が広がっていることが確認出来たのは大きな成果であったろうと思われる。他の遺跡に比べて旧態をよく保っているように思われ、今後の調査が期待される。

(4) 立会調査区の結果

確認調査の5～7Gの地域に相当する。確認調査で加工木を含む木・葉などから成る半泥炭層が存在することを確認しており、数点ながら瓦も含んでいた。

そのことから、この層に落地遺跡(廃寺)から流失した遺物、特に木簡などが包含されていないかを確認するために立会調査を実施することとなった。ただ、拡幅する対象が狭いため、重機掘削部分がほぼ建設予定地に相当することから、全域を対象とすることとした。出土遺物の採集とともに断面観察から遺構の有無や堆積状況などを行うことに主眼を置いて立会調査を実施した。

しかし、確認調査時にも増して湧水が激しく、半泥炭層という軟弱な土であることから、断面を保持することが困難であった。そのため、十分な観察は行えなかった。しかし、出土遺物は少量で、近くに遺構の存在を予想させるものは認められず、また遺物包含層の流れ込みを予測出来る状況も看取出来なかったことから、この部分には流入していなかったものと判断した。



第52図 立会調査の状況

VI. おわりに

落地遺跡の調査は、確認調査・全面調査・整理調査の3年度にまたがって実施した。落地遺跡は、古くは落地廃寺として広く知られた遺跡であり、最近では野磨驛家に推定されるようになった遺跡である。古代（律令期）山陽道とりわけ播磨国内の驛家・駅路が注目されるようになり、一層関心が高まってきた遺跡である。それは、主に歴史地理学からの検討によって駅路が確定されるようになったことや、以前からの長期にわたる今里幾次氏の播磨国府系瓦の研究成果によるものである。さらに近時これらの遺跡の調査が相次ぎ、なかでも龍野市・小犬丸遺跡の発掘調査成果によって、遺構とともに『布勢驛家』関連の墨書土器が出土したことによつても、その事実が実証されつつあることは重要である。

落地遺跡の調査も、同様の成果を期待して確認調査を実施したが、県道の拡幅予定地内では時期の異なる遺跡が対象となった。しかし、実働18日間・調査面積580m²と最近の調査では小規模の調査ではあったが、それなりの成果を上げることが出来た。また、地元では『源氏屋敷』として遺跡が周知され、関心の高いところであった。発掘調査が当地域ではじめてであったことも幸いしたかもしれない。確認調査は短期間であることから、直接落地の方々に調査を手伝って戴いた。そして、全面調査においても上郡建設に作業委託はしていたものの、やはり多数の落地の方々に参加して戴いたことから村ぐるみの調査の印象が強く、一時代前の調査形態で仕事ができ、担当者として思い出深い調査となった。調査中は、梨ヶ原小学校・梨ヶ原保育園の生徒・園児をはじめ地元中学生・高校生も見学に訪れ、遺跡の調査成果もさることながら、それ以上に社会教育活動として好ましい事業が出来たのではないかと思っている。見学に訪れた子供に作業に従事して戴いている祖父母の方々が説明をし、村の方々が文化財に対しての理解を示してくれた状況は発掘調査に追われる担当者として一服の清涼剤となつた気がした。

地元の方々の遺跡に対する熱意が感じられた調査であったが、落地遺跡としても予想外の成果を上げることが出来た。以下、その成果を箇条書きに記してみると、

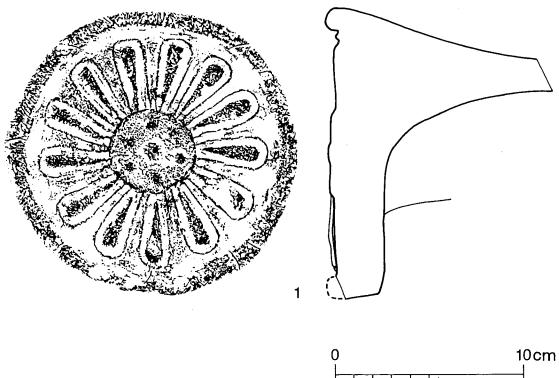
1. 落地遺跡は当初知られていた『源氏屋敷』以外にも遺跡が広がっている。
- 2.. 梨ヶ原川によって開析された谷部にも遺跡は存在し、第2章で記したような微地形に復原される。一見平坦に見える谷部の微高地を選定して遺跡を営んでいる。
3. ただ、上郡町教育委員会の調査結果も考慮



第53図 落地遺跡 碓石

すると、律令期になると微高地以外の部分も利用されており、落地遺跡として計画的に施工された可能性も考えられる。

4. 遺跡の始まりは古墳時代後期に始まる。ただ、出土している石器・土器片などから見ると弥生時代にまで遡る可能性がある。
5. 周辺では飯坂を越えた山野里の大池で縄文土器が数点出土しており、また鯰崎東側裾の落地遺跡南方向の馬路池遺跡で縄文土器・石鏃が多数出土している。落地遺跡周辺でも遡った時期の遺跡が存在する可能性は十分に考えられる。
6. 古墳時代末の遺構は、竪穴住居跡2棟と落ち込み2基・溝3条と多数の土壙・ピットと掘立柱建物・柵を検出している。掘立柱建物は3棟、柵も4列検出しているが、その時期は明確にできない。
7. 竪穴住居跡（S B 0 1）は建て替えを行っている。S B 0 2はベッド状遺構（高床部）を持つ住居跡である。ともに全体の半分も調査していないが、方形の住居跡である。
8. S B 0 2からは鉄斧が出土している。小型の鍛造鉄斧で特別な遺物ではないが、出土例が多いとは言えないものである。
9. 竪穴住居跡の1棟（S B 0 2）と落ち込みの1基（S X 0 1）には遺構に伴って溝が設けられている。S B 0 2は1辺の延長上に、S X 0 1は1辺の上部に重複するように築造されている。その溝の性格は不明であるが、多量の土器を包含しており、興味ある遺構と考えられる。
10. S B 0 2に伴う溝をはじめ、出土須恵器の中には生焼けのものが多く見られる。本遺跡の特徴の1つかと思われる。
11. 掘立柱建物も3棟検出している。時期は決定出来ないが、古墳時代の建物も含まれているものと思われる。柱痕の小さいものがそれに該当するのではないかと思われる。
12. 柵も4列調査しているが、掘立柱建物同様時期を断定することは困難であるが、やはり2時期あるものと思われる。北側の大型の掘り方を持つS A 0 4は律令期のものと考えている。
13. 大型の掘り方を有するS A 0 4などは、当初から問題としていた『野磨驛家』の時期の遺構と考えられる。また、それ以外についても『野磨驛家』以前の遺構として価値が高いものと思われる。
14. 『源氏屋敷』に近い地点である飯坂調



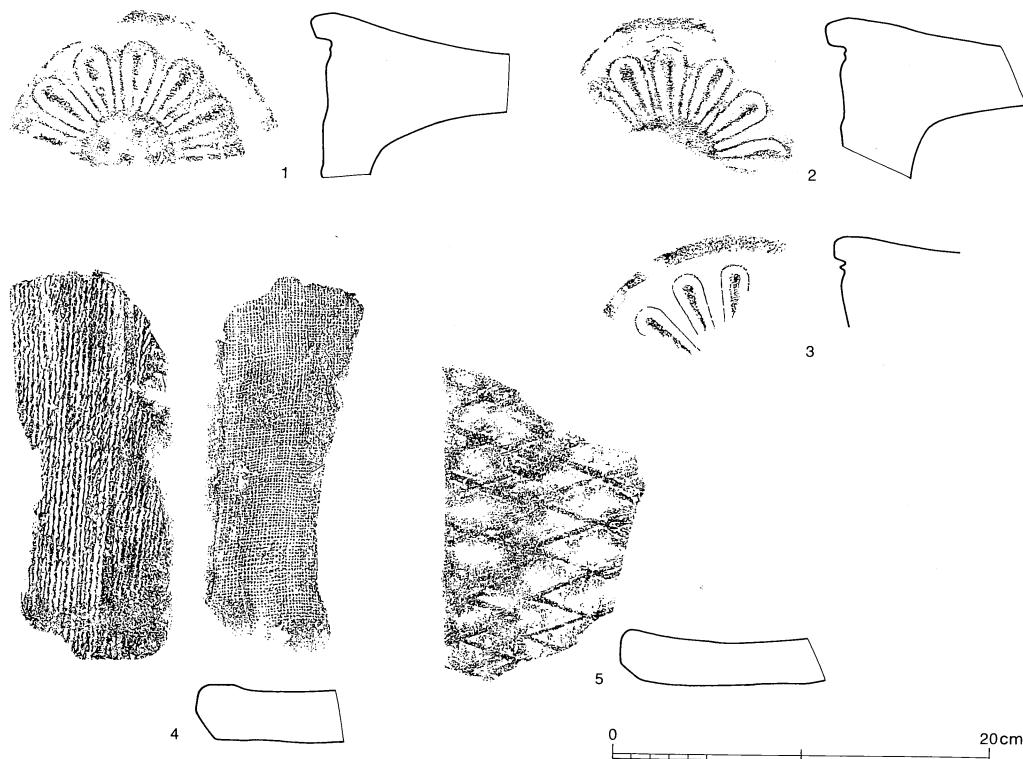
第54図 赤松啓介氏採集軒丸瓦

査区でも古墳時代と平安時代の2時期の遺構が検出されている。落地廃寺推定地はほぼ方形で高くなっている、遺構の保存状況も良好でないかと思われる。

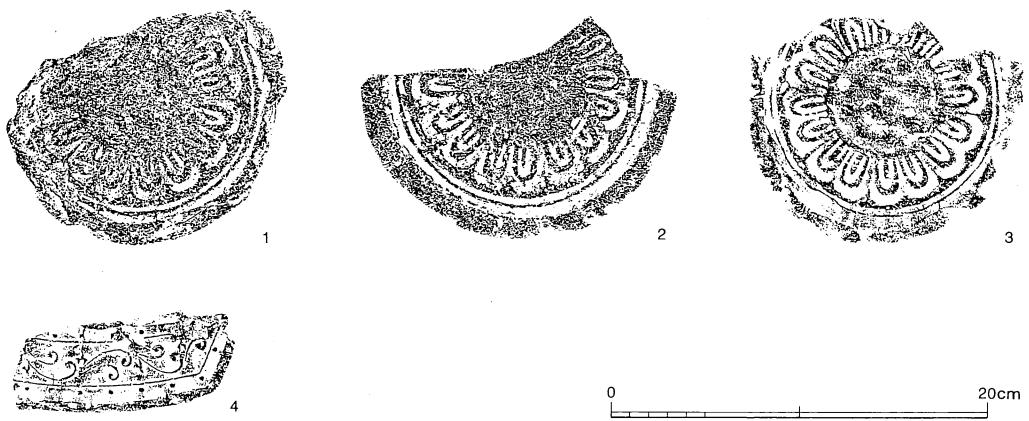
15.『源氏屋敷』下（北西）方向の谷部の調査では遺物はほとんど出土しなかった。大規模な遺物の広がりはないのではないかと思われる。

などが指摘できる。他にも問題点は多いが、以下調査した遺構と遺物から見た『野磨驛家』との関連を考えてみる。

前記のように大半の遺構は『野磨驛家』以前の古墳時代末の遺構である。しかし、驛家を築く土壤があったことを示してくれる資料である。直接驛家などの遺構との接点は結論付けられないが、その意味は大きいと思われる。上郡町教育委員会の農業基盤（圃場）整備に伴う調査では多大の成果があり、それを援用すると今回調査した遺構についても評価が変わってくる。町教育委員会の調査で古代山陽道と大型建物群が検出されている。今回調査を行った地域の北側に古代山陽道が通っており、その南側に位置していることになる。大型建物群は道の北側に立地しており、南側に立地する遺構群はその一部になるものと思われる。町教育委員会の調査



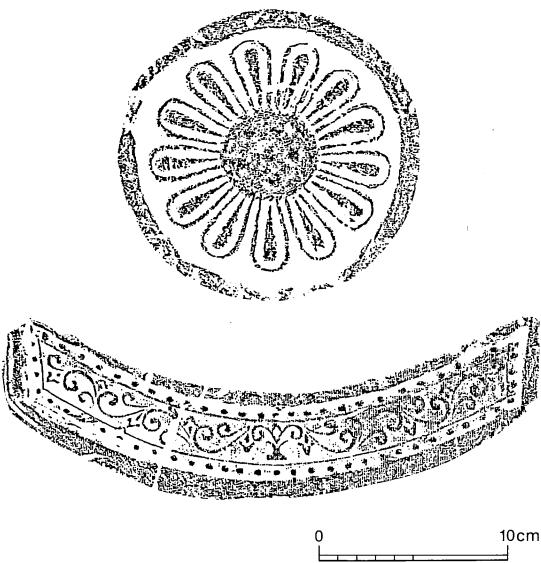
第55図 有年考古館蔵 瓦実測図



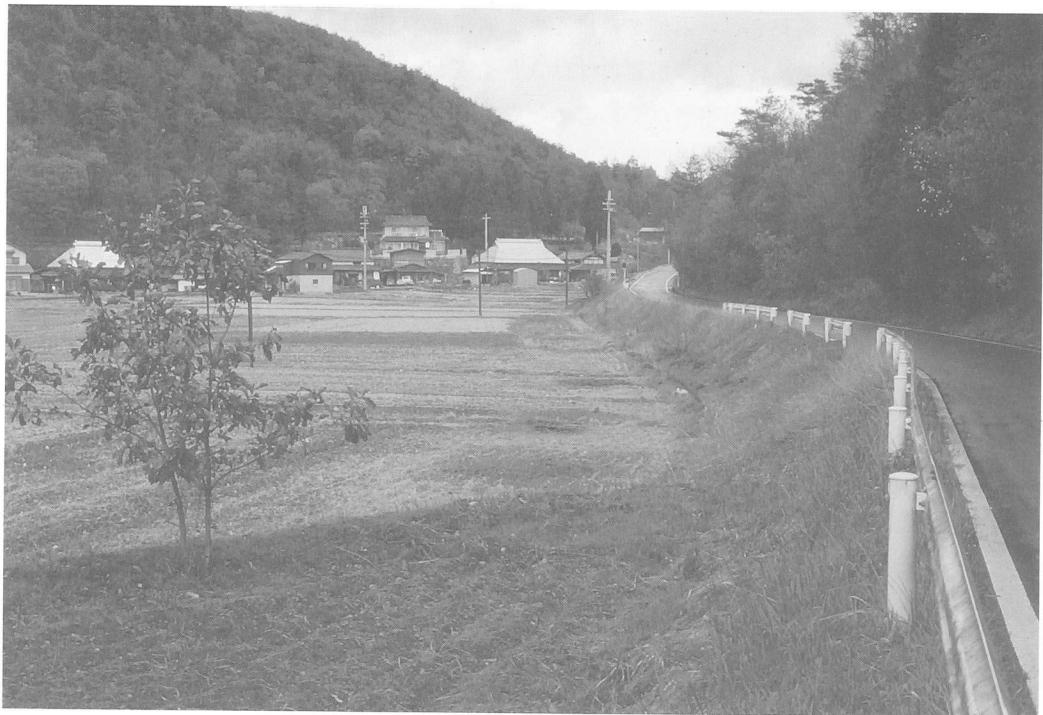
第56図 神明寺遺跡 瓦拓本（1・4 有年考古館 2・3 願栄寺 藏）

では山陽道南側では明瞭な建物は確認されていないが、北側同様の遺構が存在したものと考えられる。ただ、南側は山が迫っており、大規模な遺構は存在しないと思われる。柵（S A 0 4）は大型の掘り方を持つもので、建物群と同時期の遺構と考えられる。山陽道を中心に南北に建物群が立地していることになり、一般の集落とは考えられないものと思われる。まして、立地条件が良いとは思われない当地域で大規模な遺構が検出された意義は大きいと思われる。その性格を考えれば、当然『野磨驛家』の母体となった遺跡か、驛家の一部と考えて良いかと思われる。

出土遺物は須恵器・土師器・瓦などが出土している。町教育委員会の調査で円面鏡などの官衙的遺物が出土しており、その性格をより鮮明にしている。今回の調査による出土遺物では瓦だけが対象となろう。瓦は軒丸瓦1点と丸瓦・平瓦10数点である。軒丸瓦は、細弁13葉の蓮華文軒丸瓦で、平安時代でもやや新しい要素を持つものである。小犬丸式と呼ばれ、驛家関連の瓦である。軒平瓦は町教育委員会の調査で1点出土しているが磨滅しており、小片のためおおくは判らない。均正唐草文の軒平瓦であることは判るが、古大内式に特有の范の傷を看取できる資料ではない。今まで採集されている赤松啓介氏と有年考古館保管の瓦に目を広げても同様



第57図 小犬丸遺跡 瓦拓本（報告書から）



第58図 落地遺跡全景

の古大内式の軒丸瓦しか確認されていない。そのなかには古大内式と古大内亜式とされる小犬丸式が混ざっている。過去の採集品には本町式の重圈文軒丸瓦も知られている。単純な移行はしていないよう数タイプが混在していることを示している。重複して驛家が長期間営まれていることを示す資料でもあろう。出土遺物が少なく、遺構に伴っていないことから不分明な点が多いが、今後遺跡究明の調査が行われれば明らかになる点もあろうかと思われる。今回調査を実施している地域と『源氏屋敷』との関連も興味あるところである。

検出遺構・出土遺物ともに良好な資料とは言えないが、その提起された資料は価値あるものである。当初予測されていた時期の遺構に合致する遺構は、S A 0 4 の大型の掘り方を有する柵列だけで、他の遺構は前後する時期のものである。しかし、梨ヶ原地区では別名の銅剣は出土しているものの、それ以外の調査例はなく貴重なものと言えるだろう。また、当遺跡の時期的には遡る遺構の存在は、別名遺跡と落地遺跡（廃寺）との間を埋める資料として価値が高いものと思われる。驛家以前にも遺跡が存在しており、驛家が突然築かれたわけではなく、築かれる土壤があったことが判明したのが大きな成果であろうと思われる。

調査実施段階、特に確認調査を着手した段階では水田は耕作を終えたところで来季の作付けを行う準備がなされた生きた水田であった。現県道との段差も大きく山影に入ることから遺跡の存在を強く肯定する気持ちは薄かった。『源氏屋敷』周辺の飯坂地区のみが主な対象の感さ

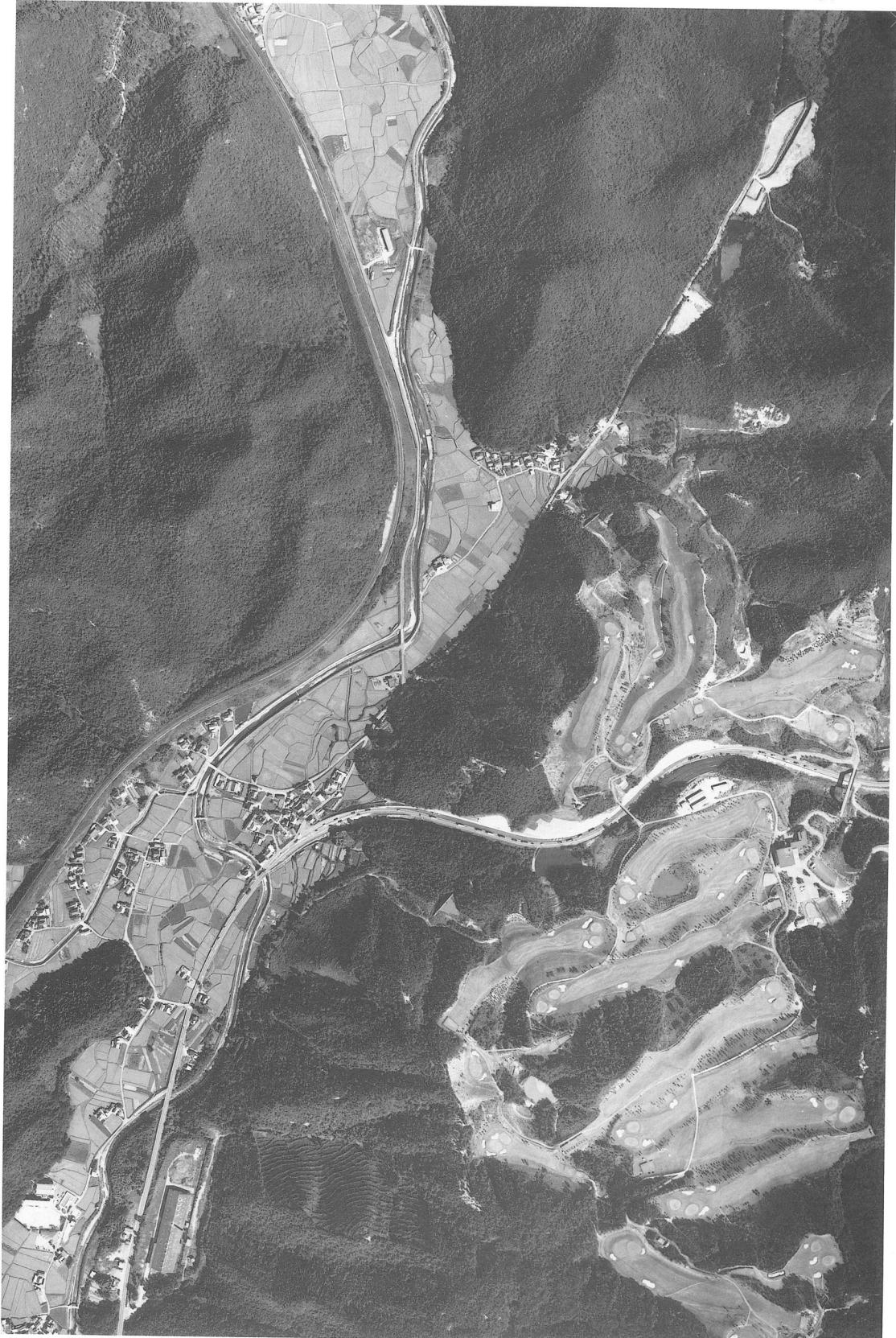
えあつた。しかし、調査を行い遺構が検出され、次年度の全面調査、2年後の町教育委員会による全面調査によって落地遺跡の位置付けは大きく変わつていつた。驛家を前提とした報道には戸惑いを感じ、逆に原稿が書きにくいものとなつた。調査担当者としても、落地遺跡の位置付けは同様の認識を持っていたが、大きく扱われるにつれ不安な面も出てきたことは事実である。発掘調査・整理調査において、有形無形の協力・教示を多數の方々から得たことはすでに述べたとおりである。特に上郡町教育委員会や落地の方々、そして深澤景弘・宮崎素一・荻能幸各氏には種々の面で協力を賜り感謝しています。報告書作成過程でも写真の提供を受けるなどしました。また、調査担当者はいつものことながら現場に追われ、整理調査関係者に迷惑をおかけしました。その分の負担を嘱託員の前田陽子氏にかけたように思われる。編集・校正の段階までも主担して戴き、その助力なしには本書の姿を見れなかつたのではないかと思われる。感謝の念に堪えません。

将来、上郡町教育委員会によって発刊される予定の報告書を含めて落地遺跡について評価されることを望むもので、多くの方々によって検討して戴けるよう期待します。その成果を得られるようになったのも、上述したように多くの方々の理解・協力によつたもので、それら多くの方々の謝意を表します。

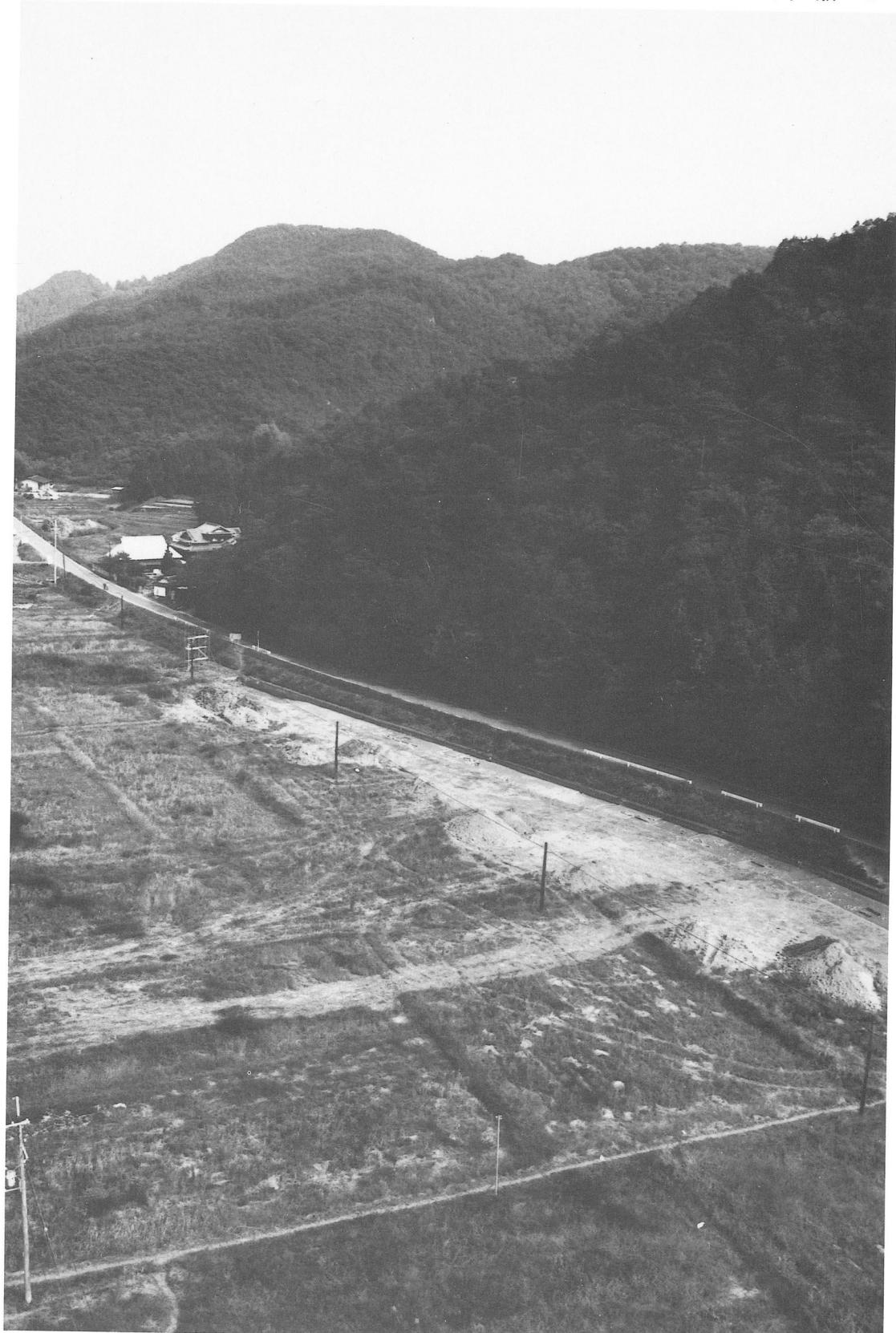


第58図 現地説明会風景

図 版



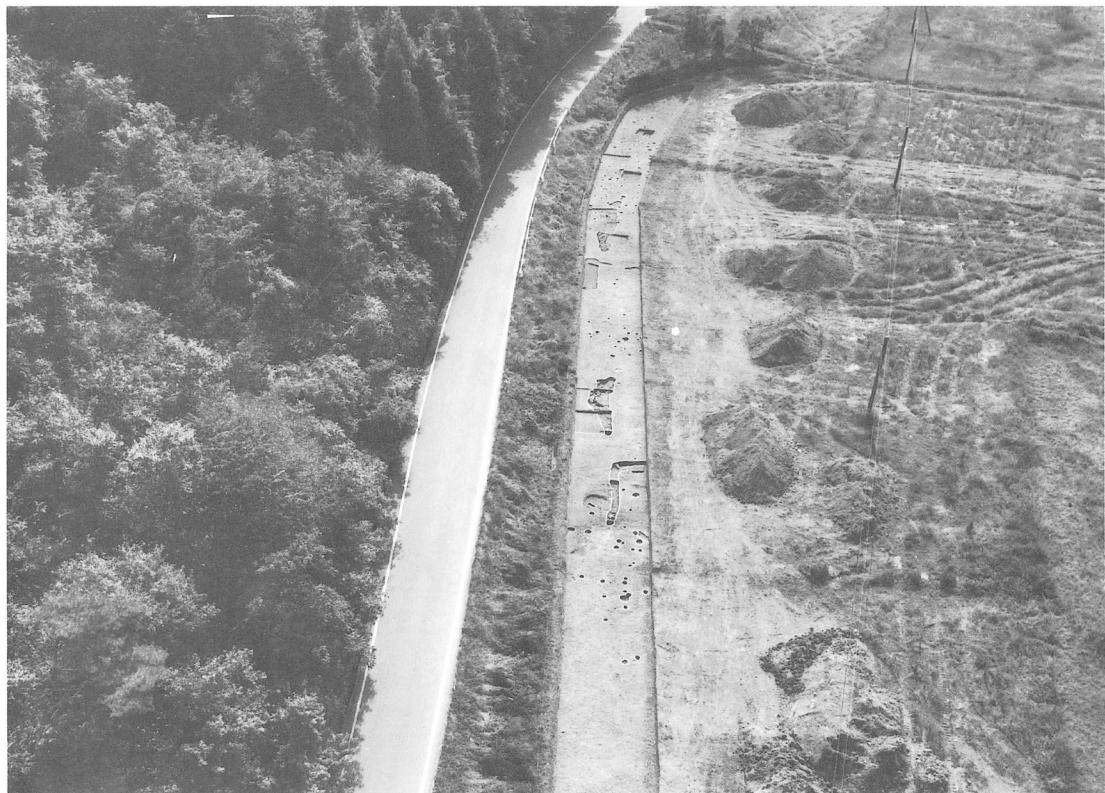
落地遺跡周辺空中写真（国土地理院撮影）



調査区全景と飯坂調査区



調査区全景（気球写真、西から）



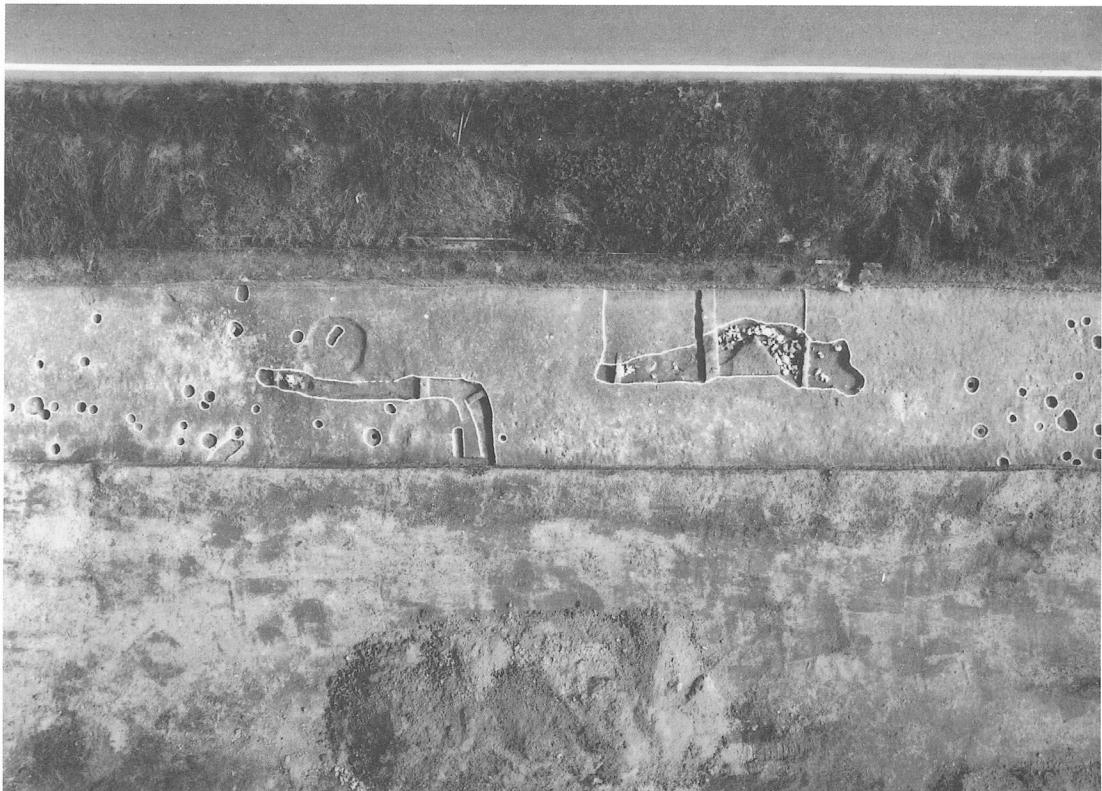
調査区全景（気球写真、東から）



調査区全景（東から）



調査区全景（西から）



S B 0 1 · S X 0 1 空中写真



S B 0 1 全景 (後方は S X 0 1)



S B 0 1 (南から)



S B 0 1 (東から)



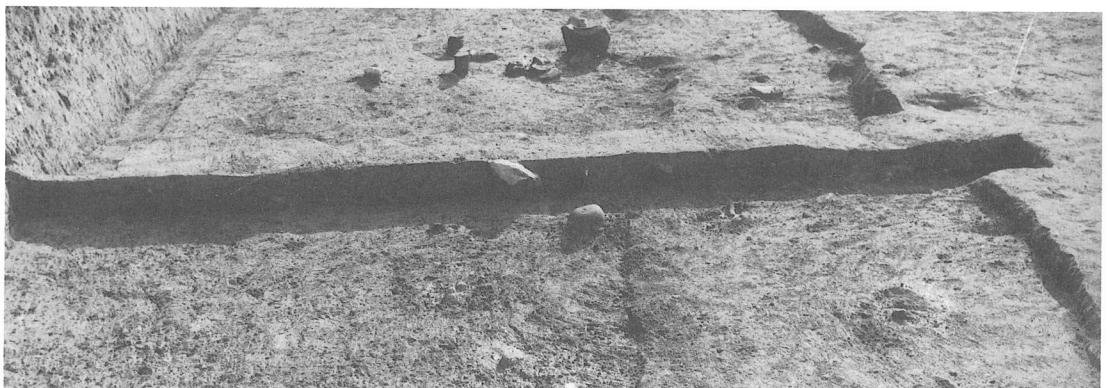
SB02・SB03 空中写真



SB02・SB03 全景（東から）



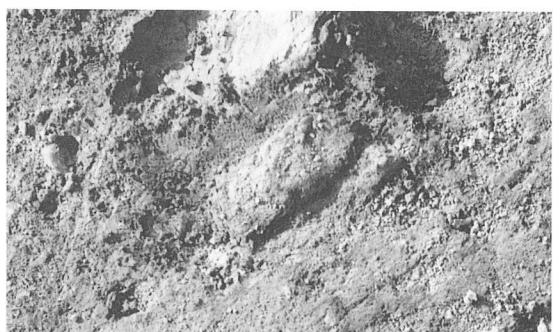
SB02全景（北から）



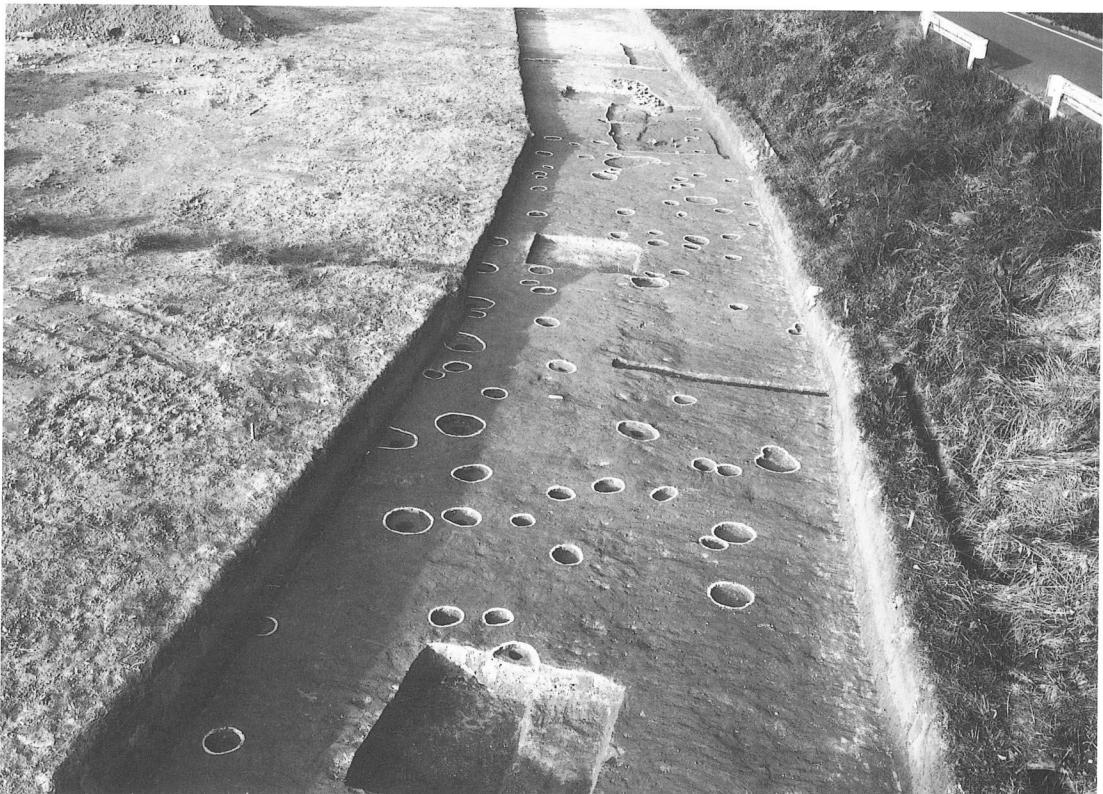
中央アゼ堆積状況



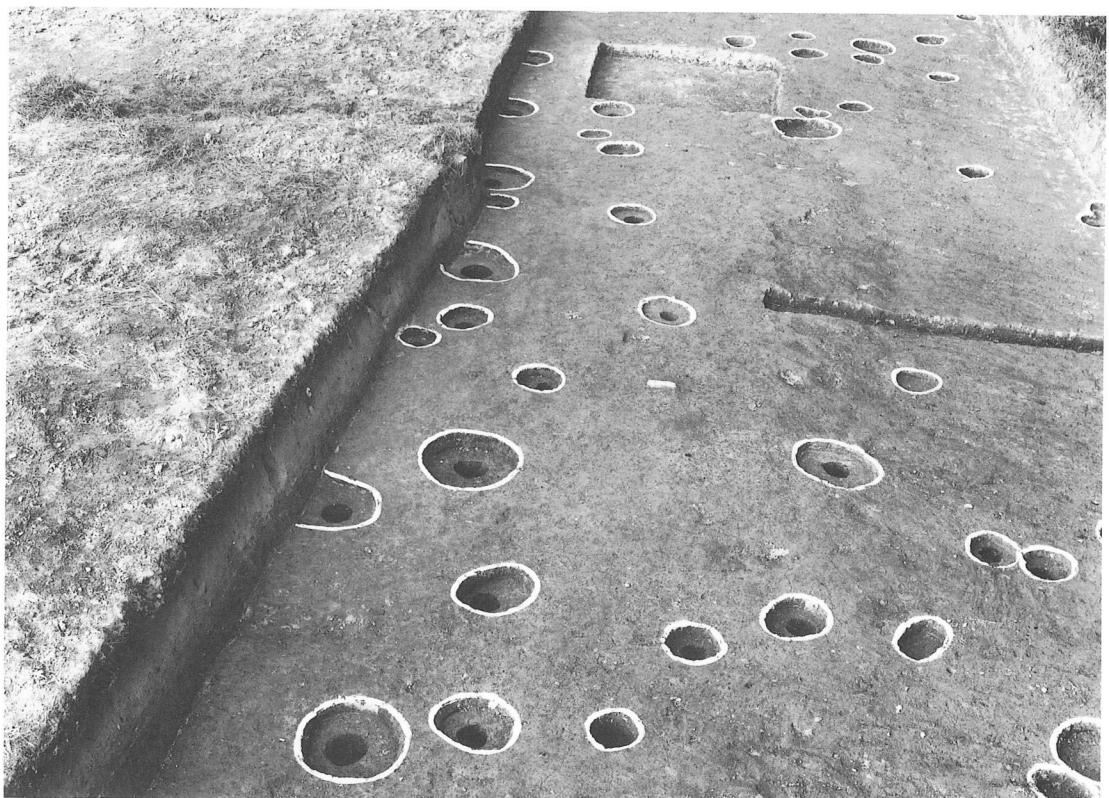
鉄器出土状況



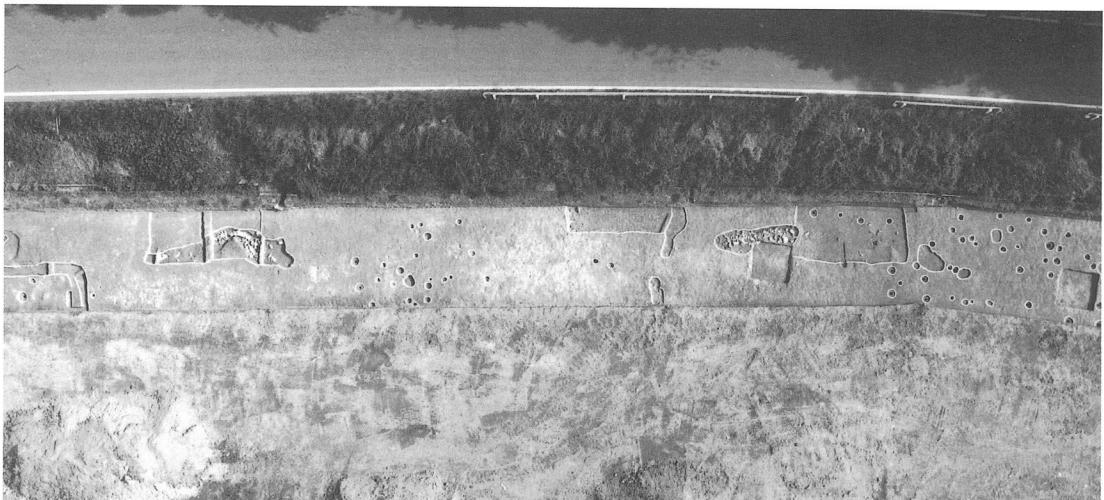
鉄器出土状況



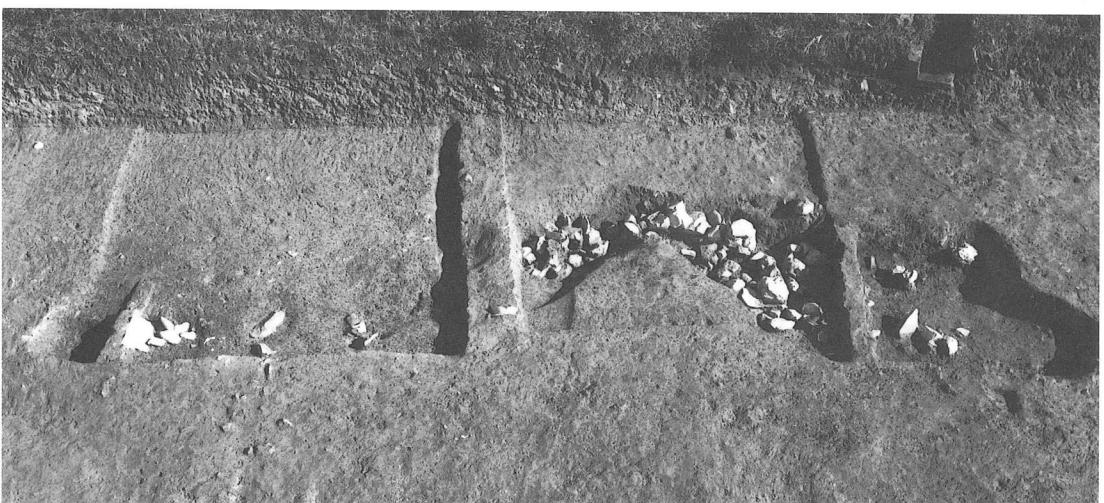
SB02～SB05・SA04全景（西から）



SB03・SA04全景（西から）



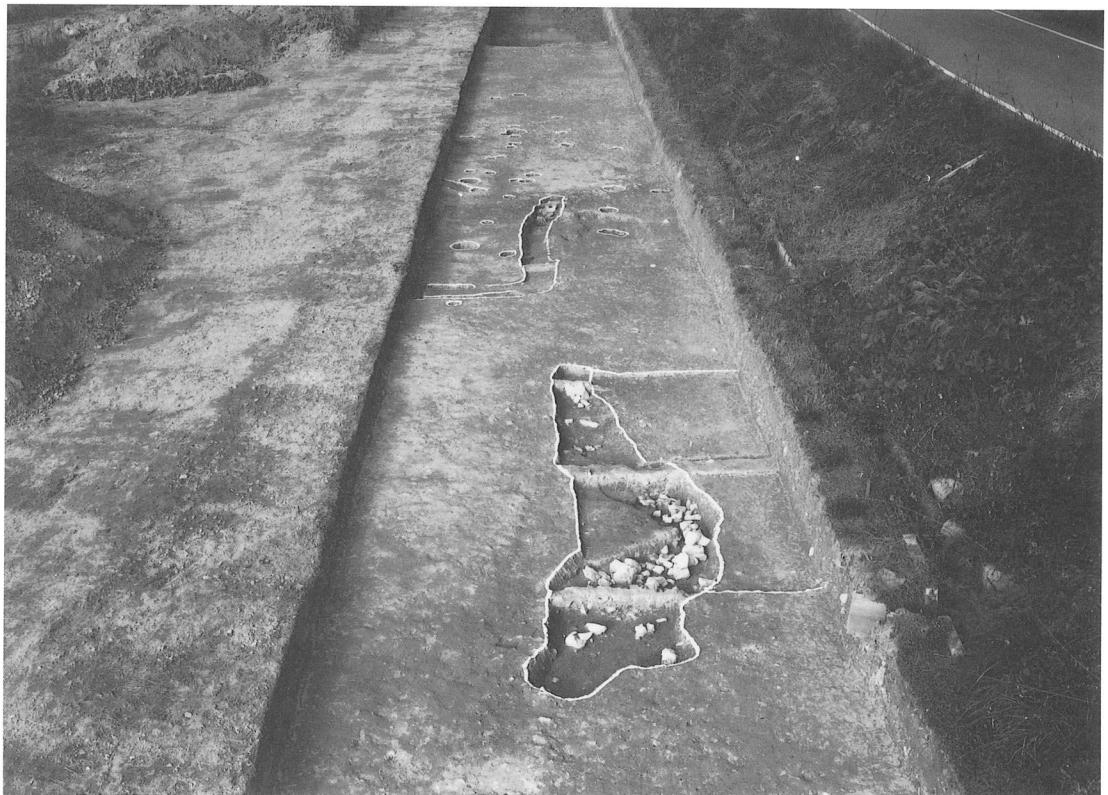
S X 01 周辺 空中写真



S D 01 全景 (北から)



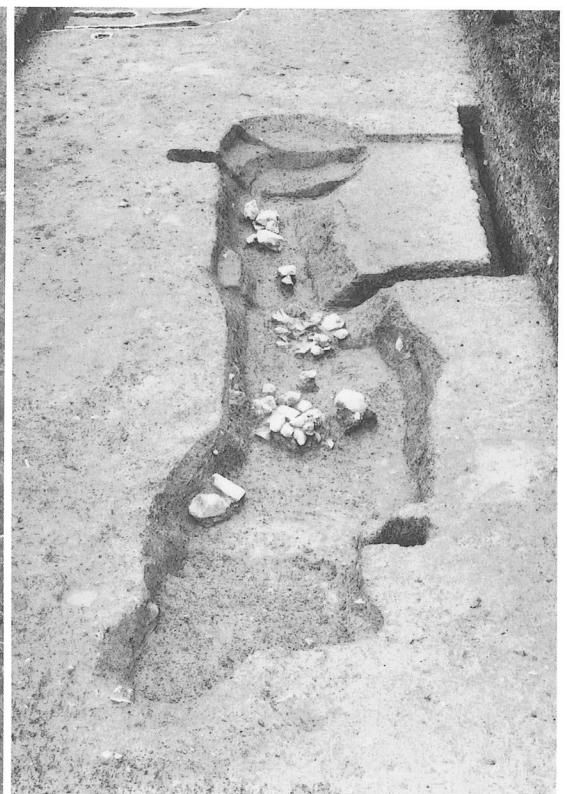
S D 01 全景 (溝礫除去後)



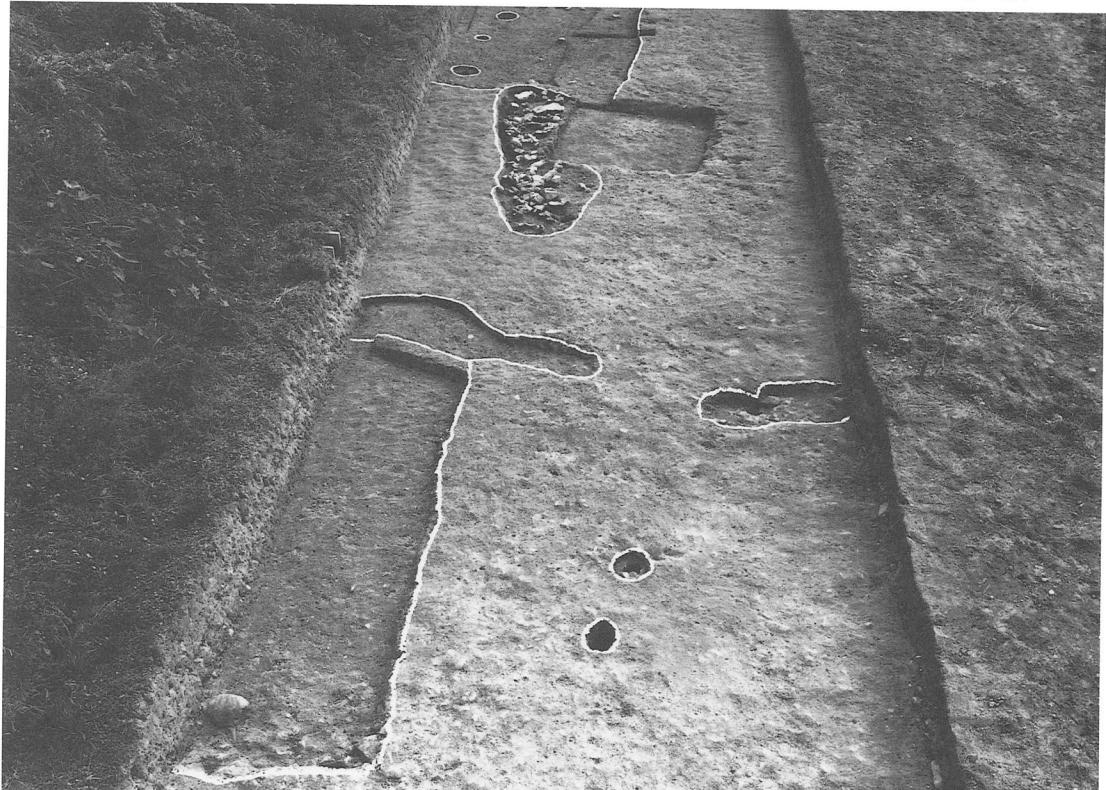
SX01・SD01全景（西から）



SD01全景



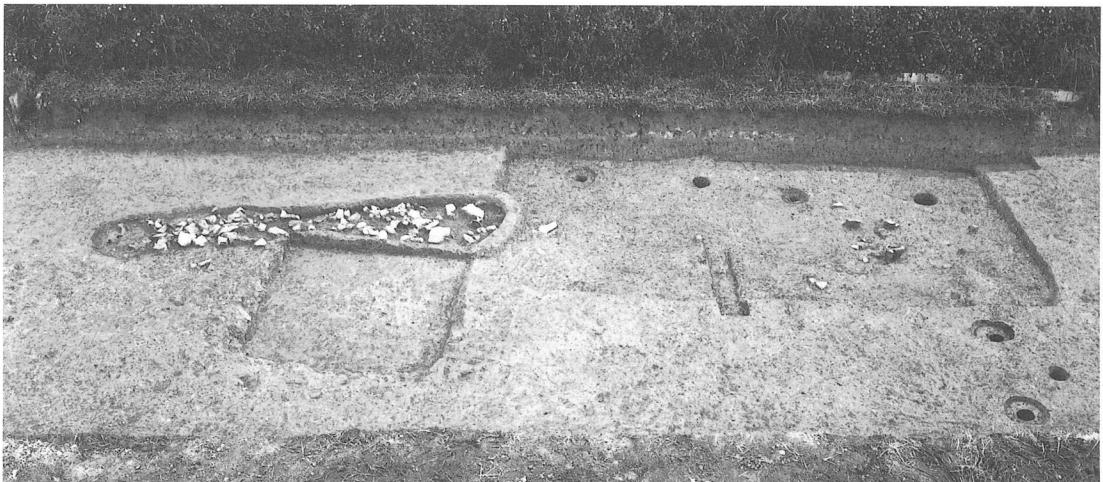
SD01全景（礫除去後）



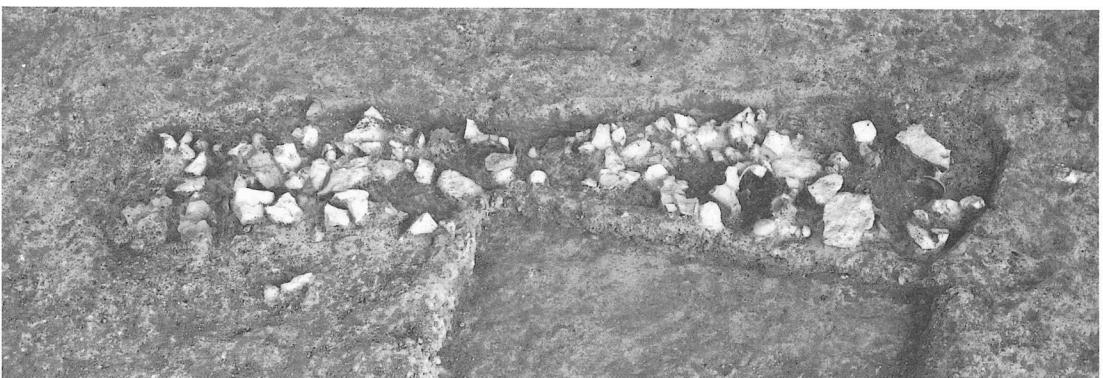
S×02 全景（東から）



S×02 全景（北から）



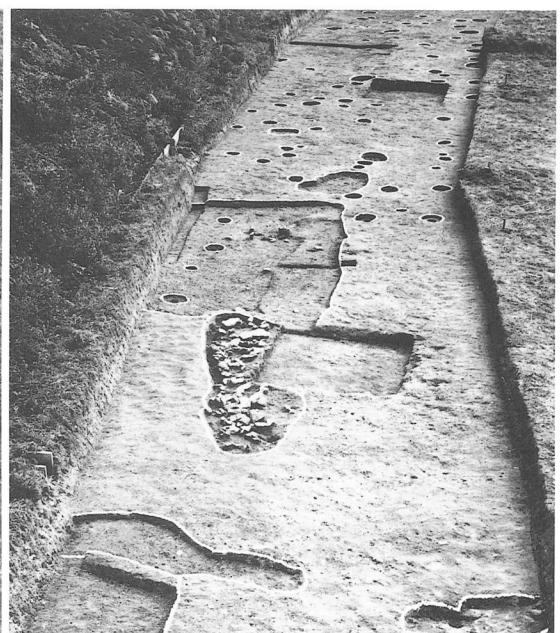
SB02・SD02全景（北から）



SD02全景（北から）



SD02全景（東から）



SD02・SB02



SB 03~05・SA 02~05とピット群（空中写真）



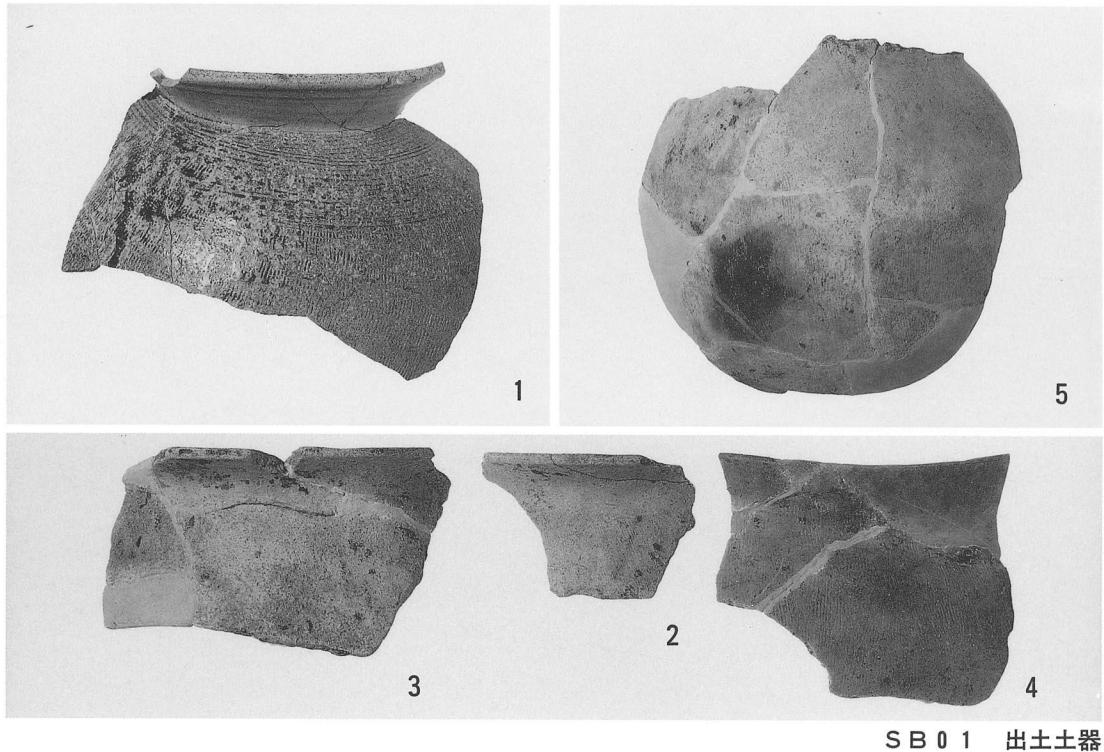
上層遺構 ピット群



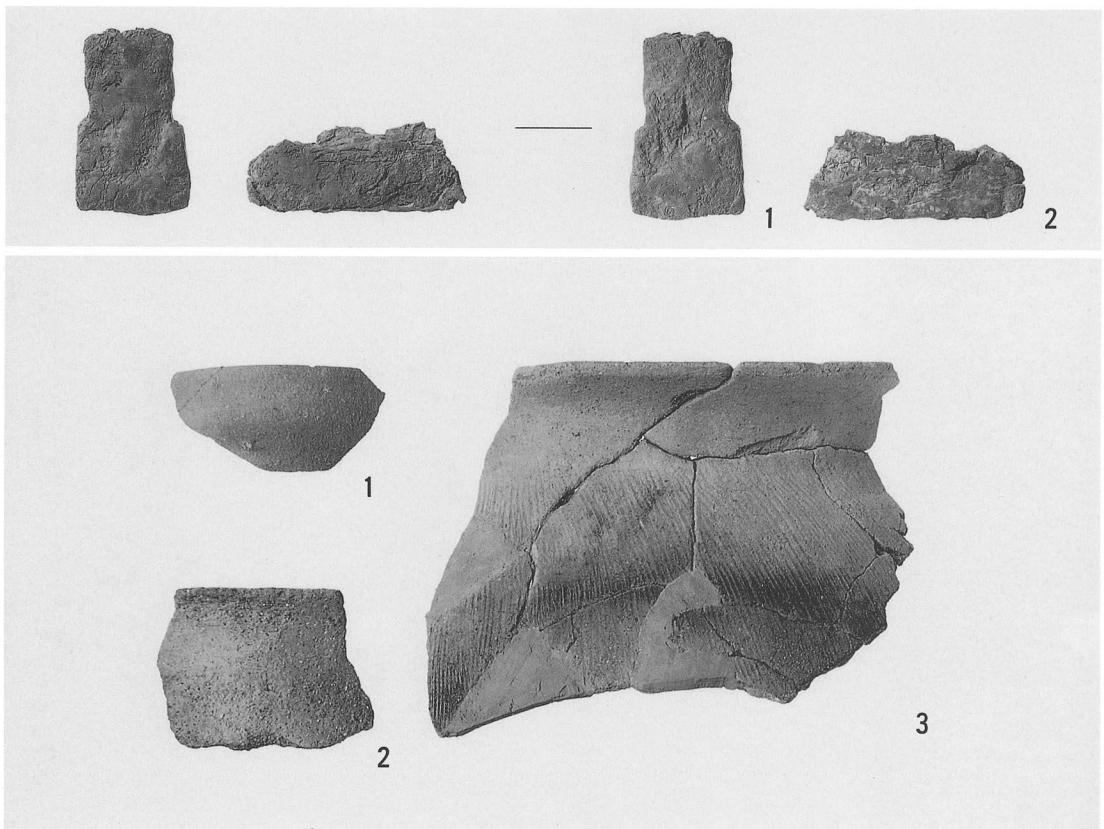
飯坂調査区と源氏屋敷



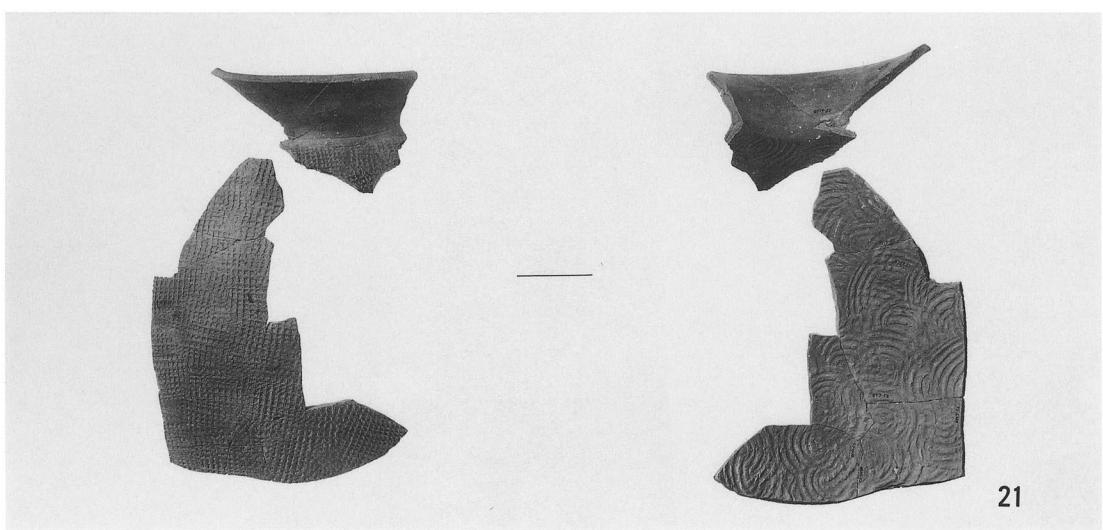
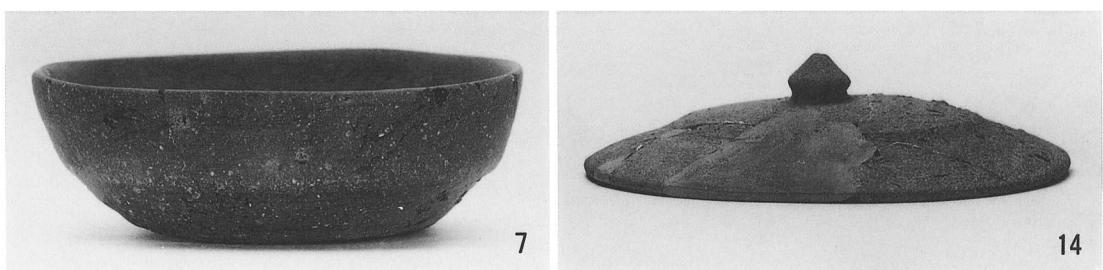
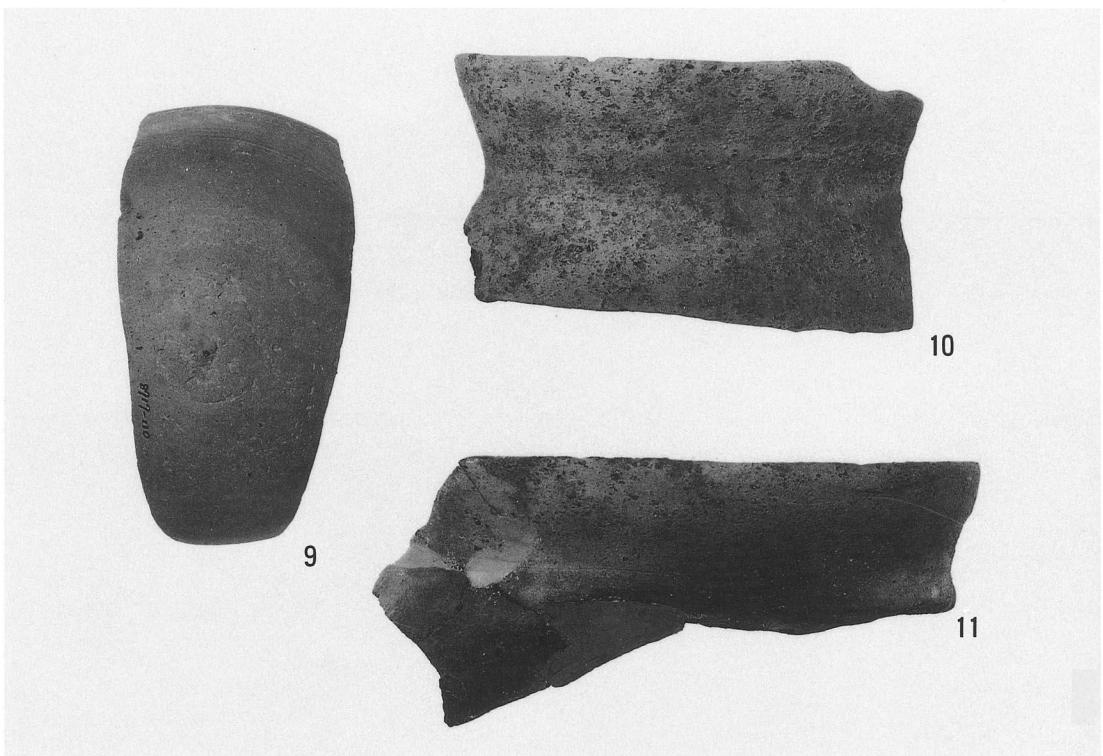
3G全景

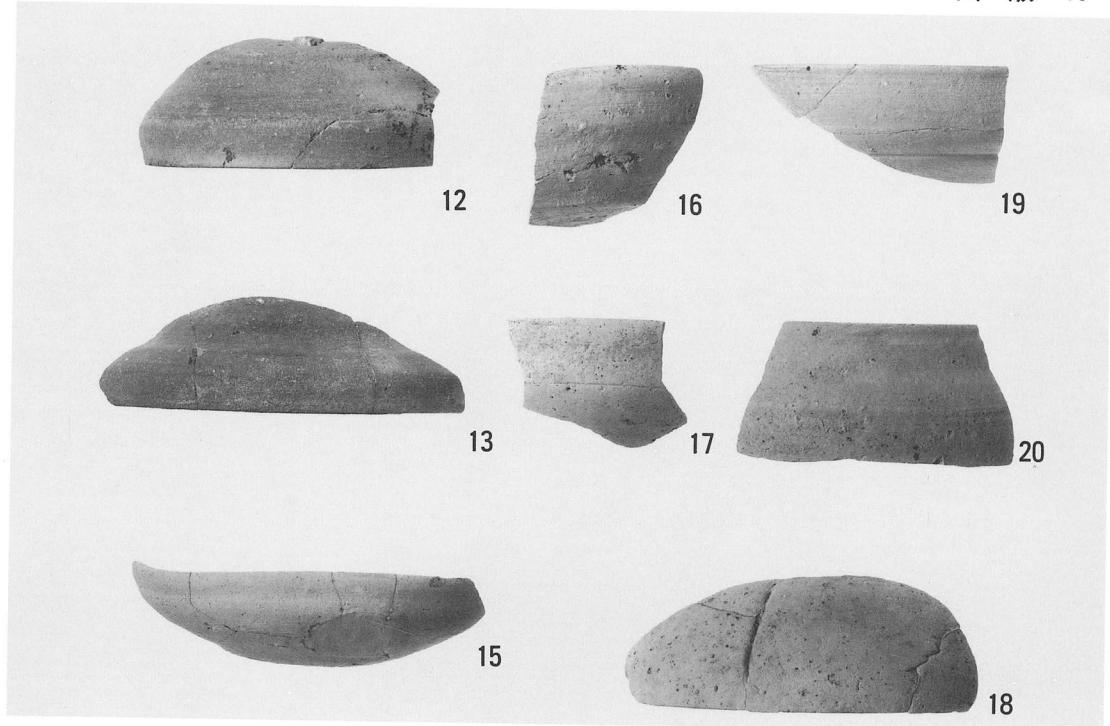


SB 01 出土土器



SB 02 出土土器・鉄器

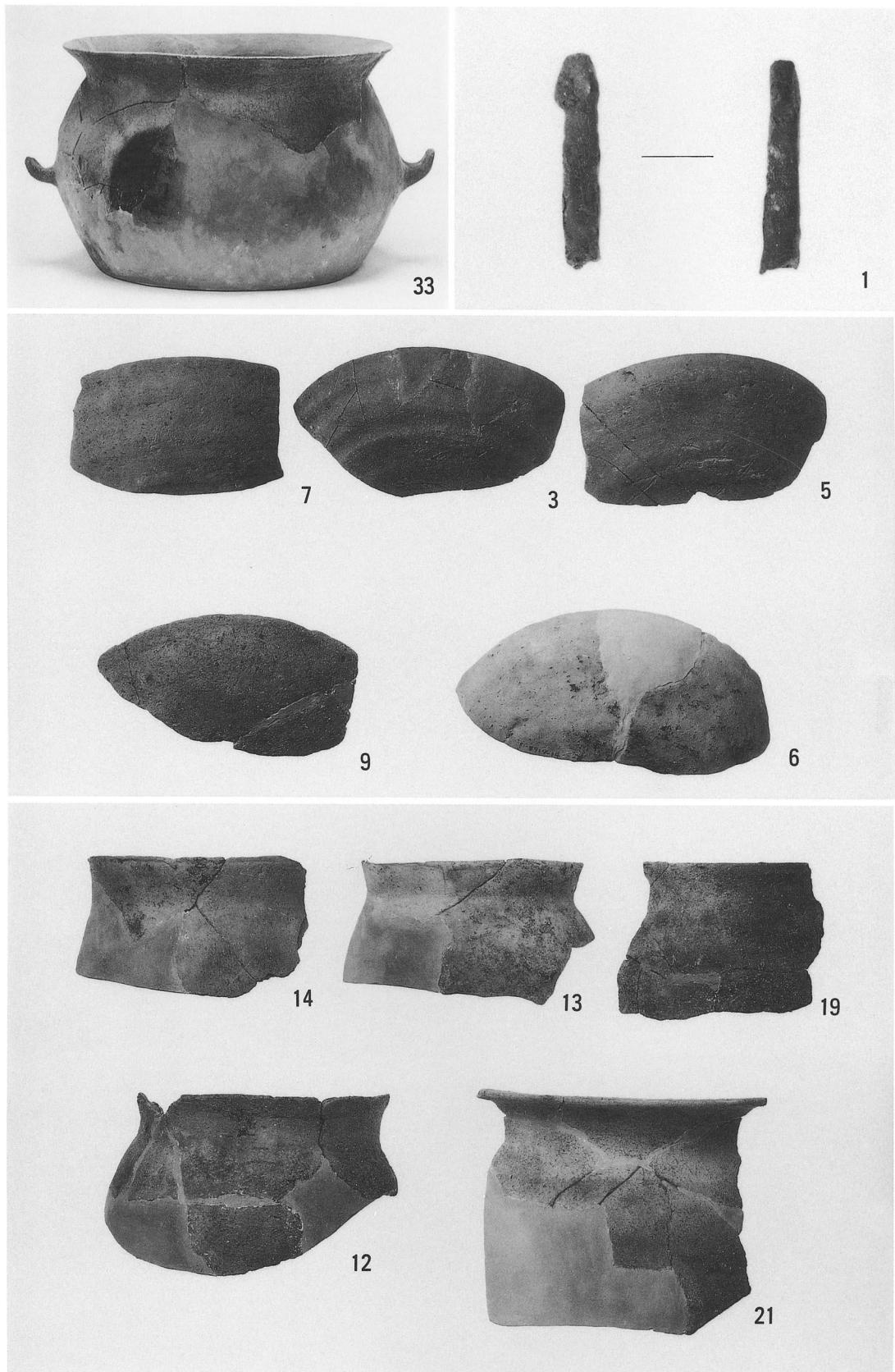


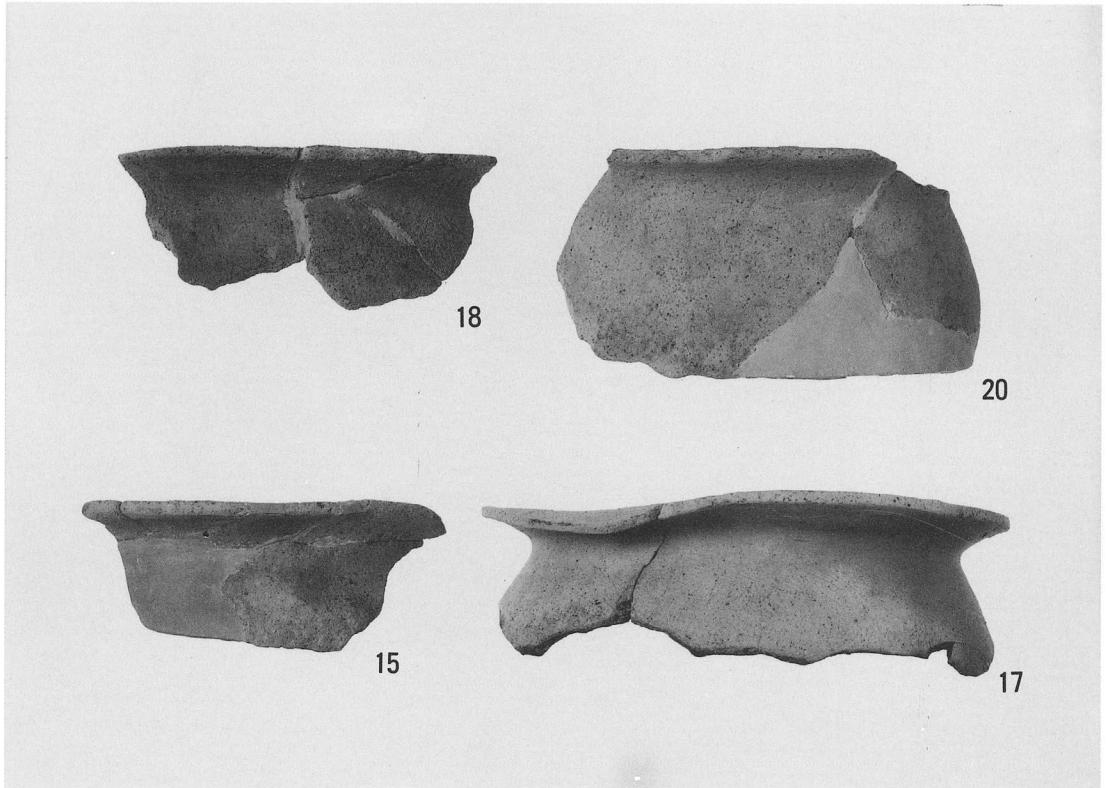


SB02 出土土器

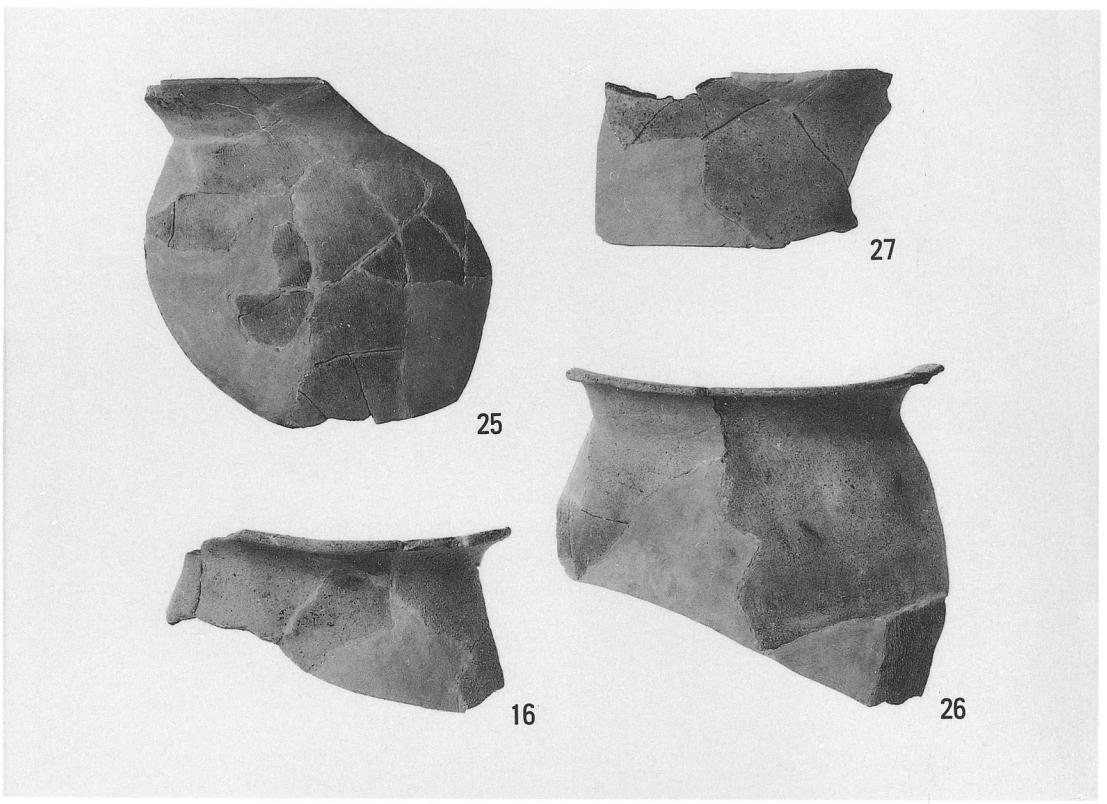


SD01 出土土器

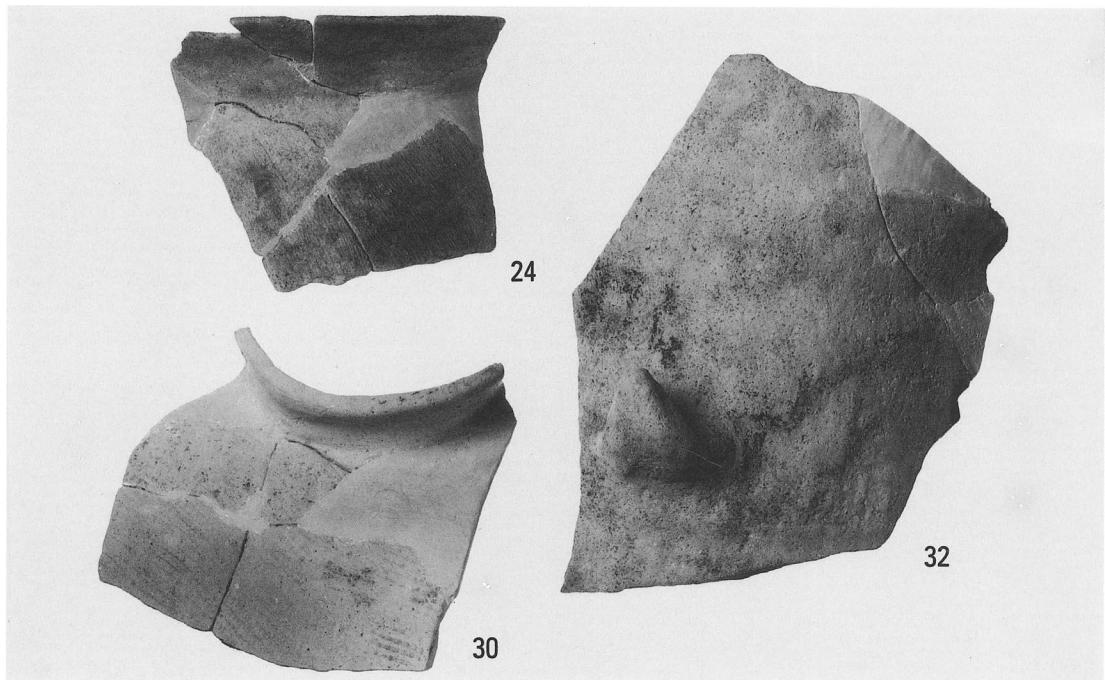




SD 01 出土土器



SD 01 出土土器



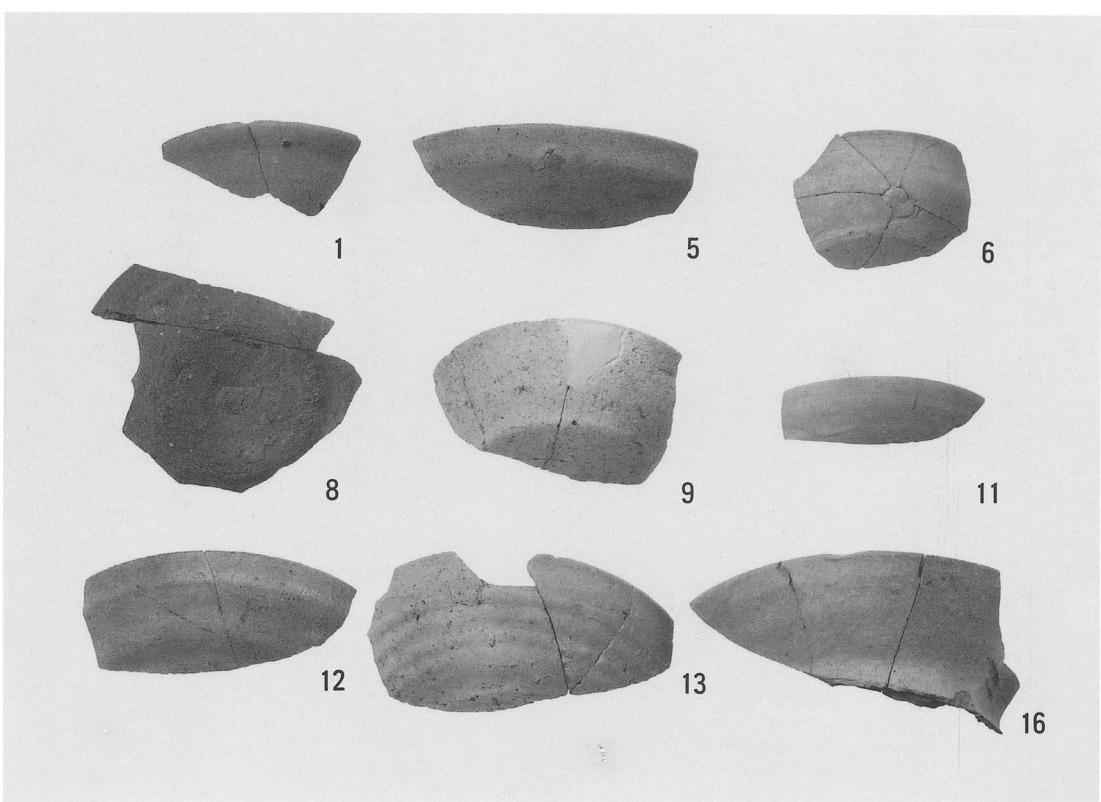
SD01 出土土器



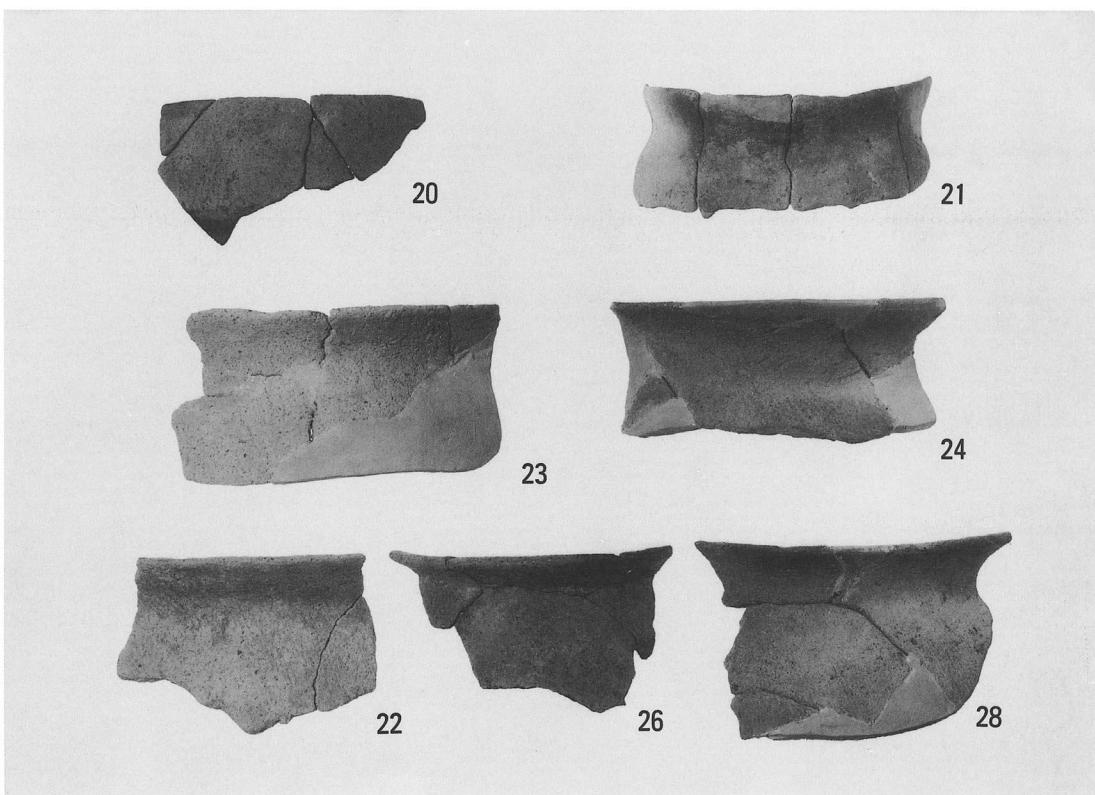
SD02 出土土器



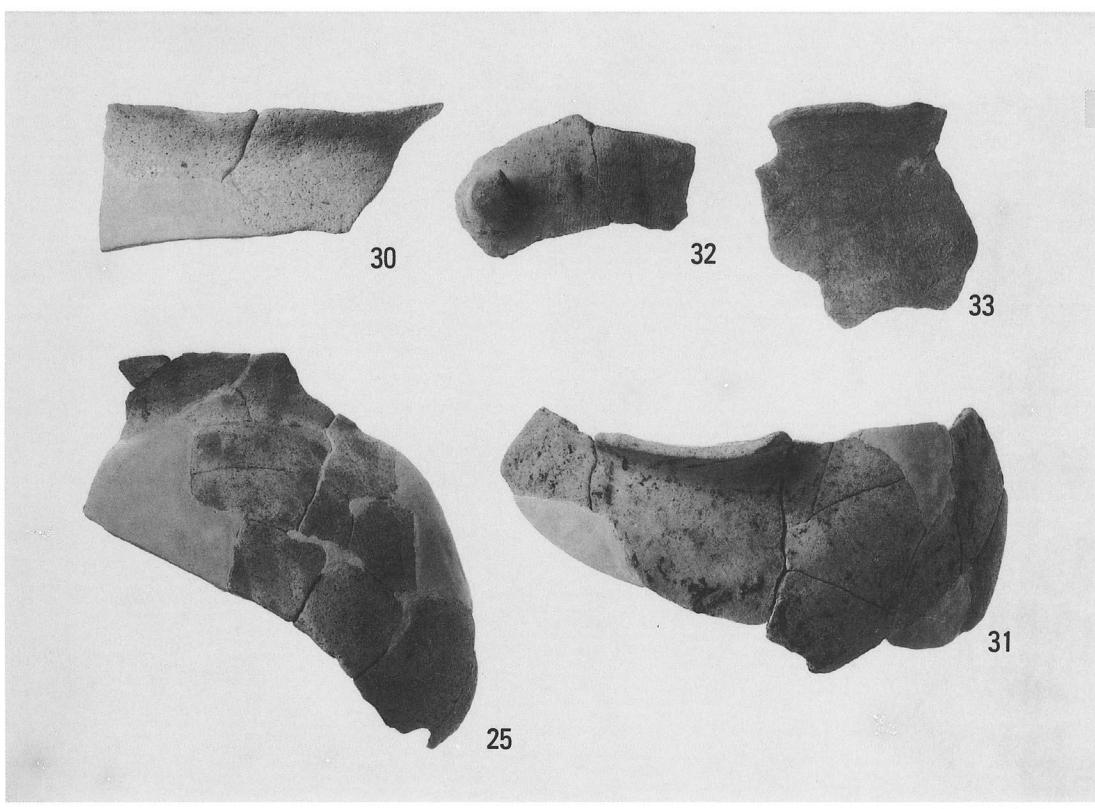
SD 02 出土土器



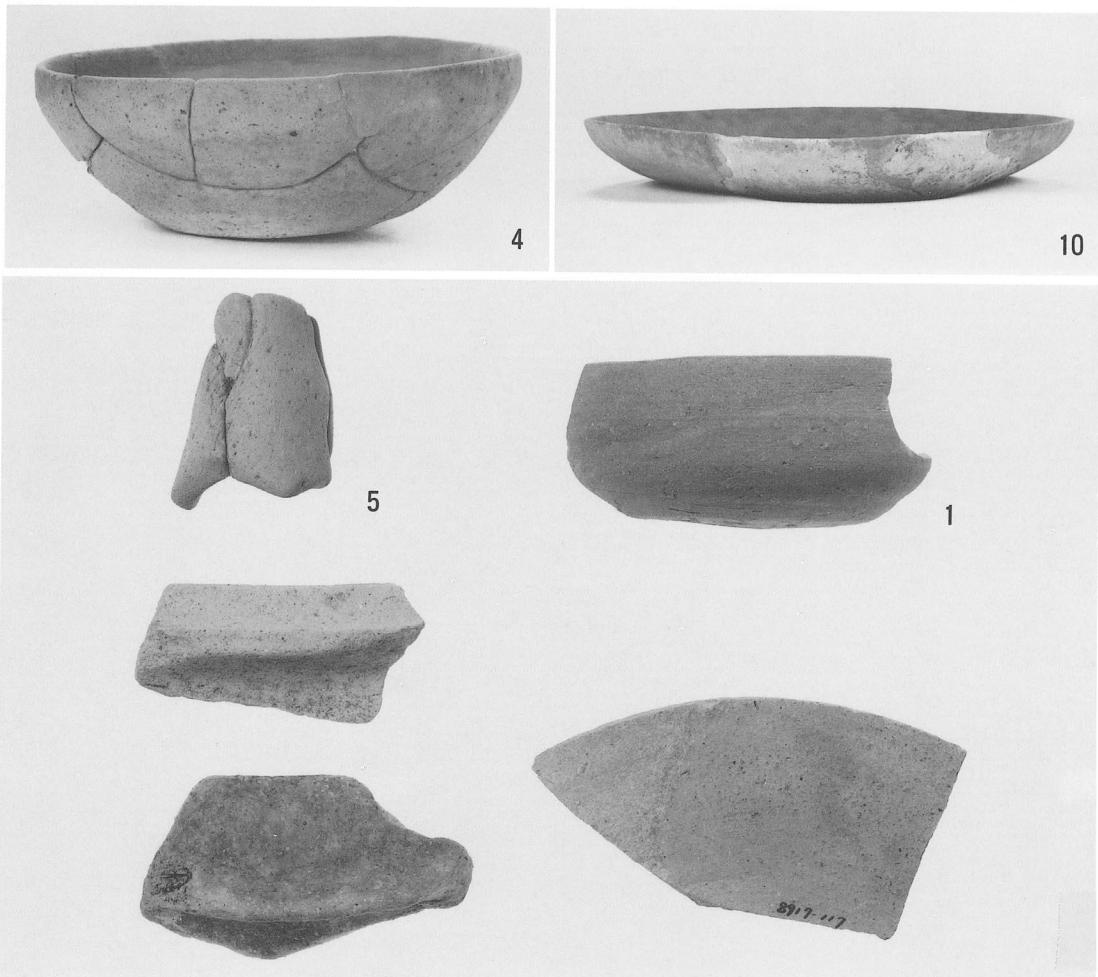
SD 02 出土土器



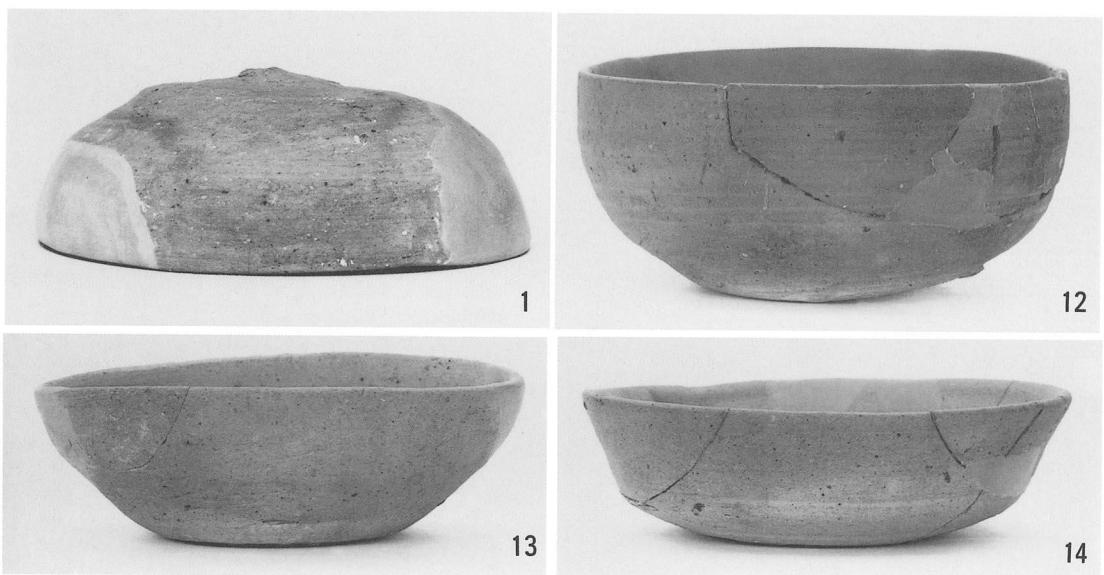
SD 02 出土土器



SD 02 出土土器



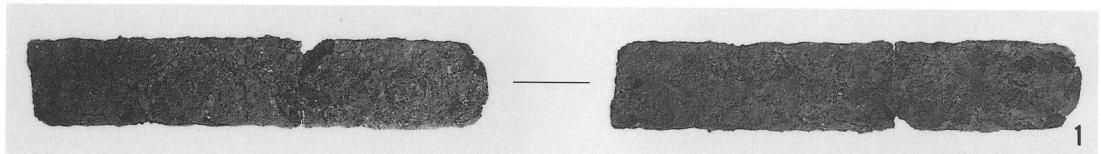
遺構 出土土器



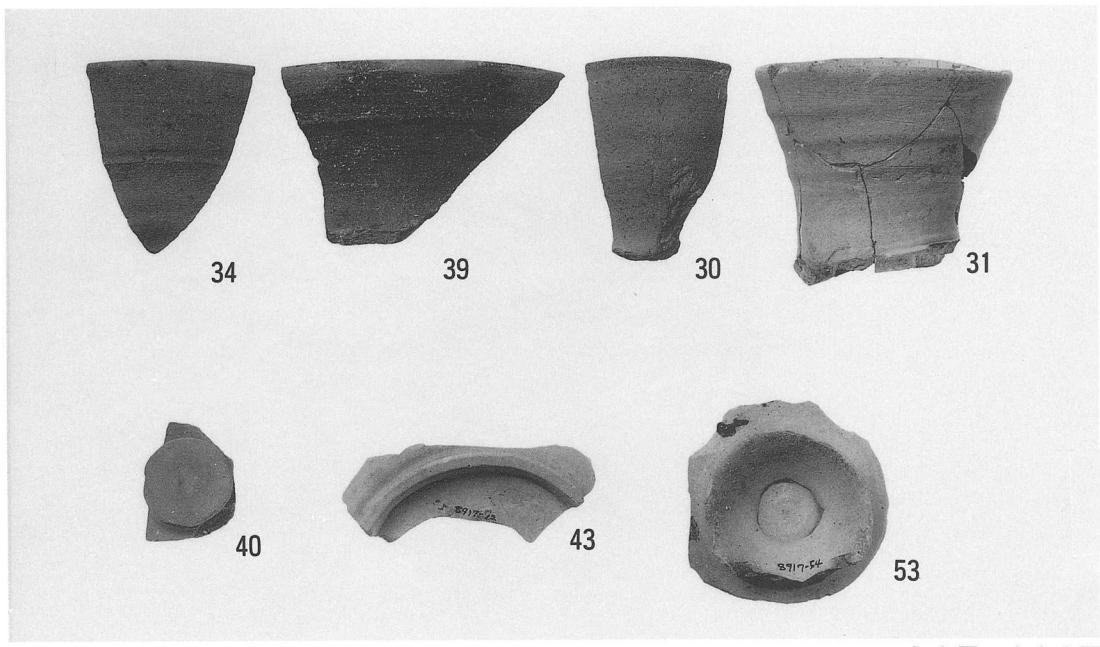
包含層 出土土器



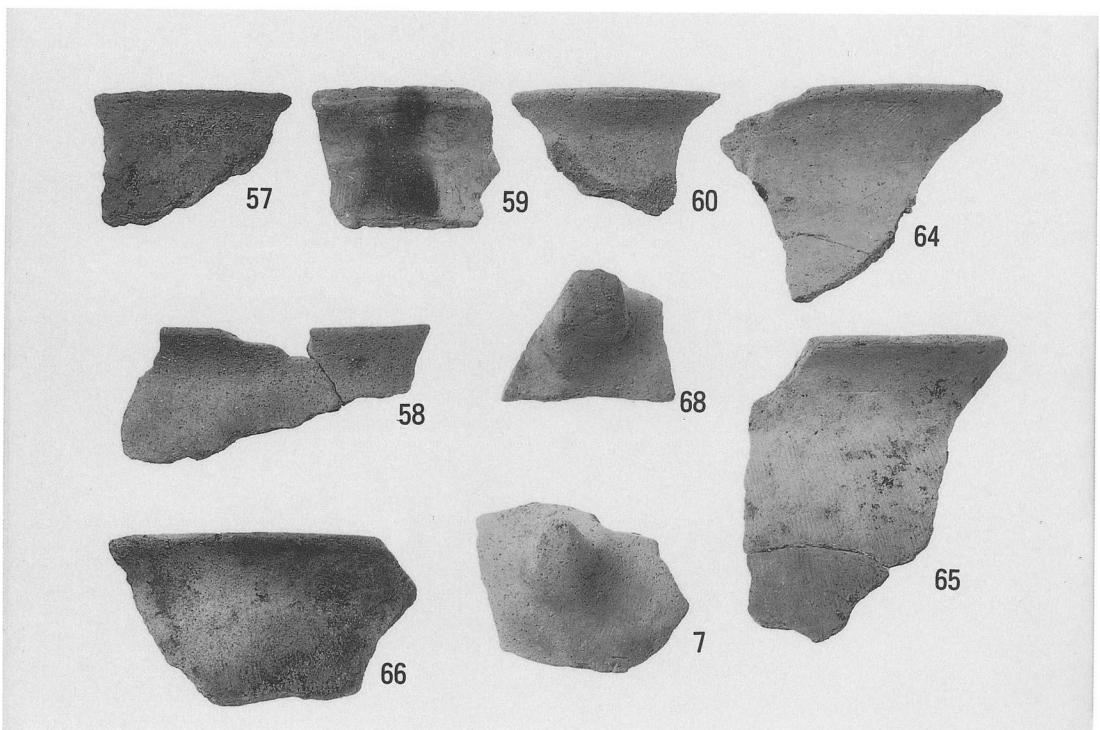
包含層 出土土器



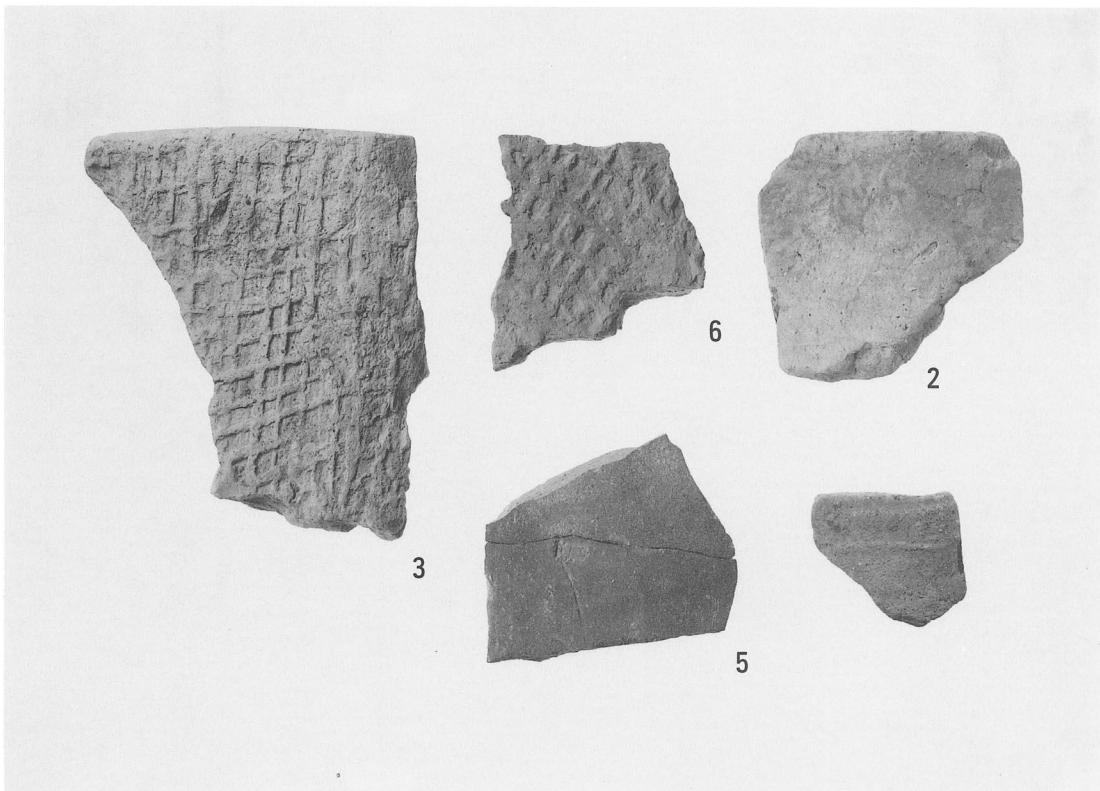
包含層 出土鉄器



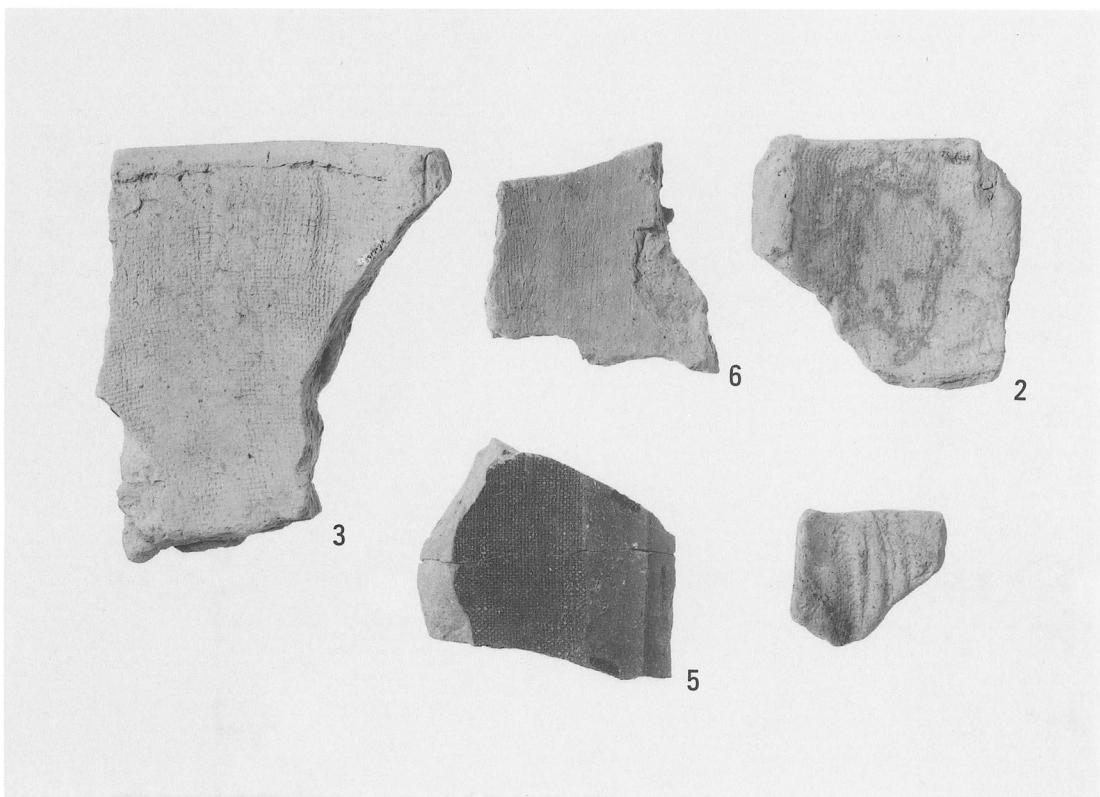
包含層 出土土器



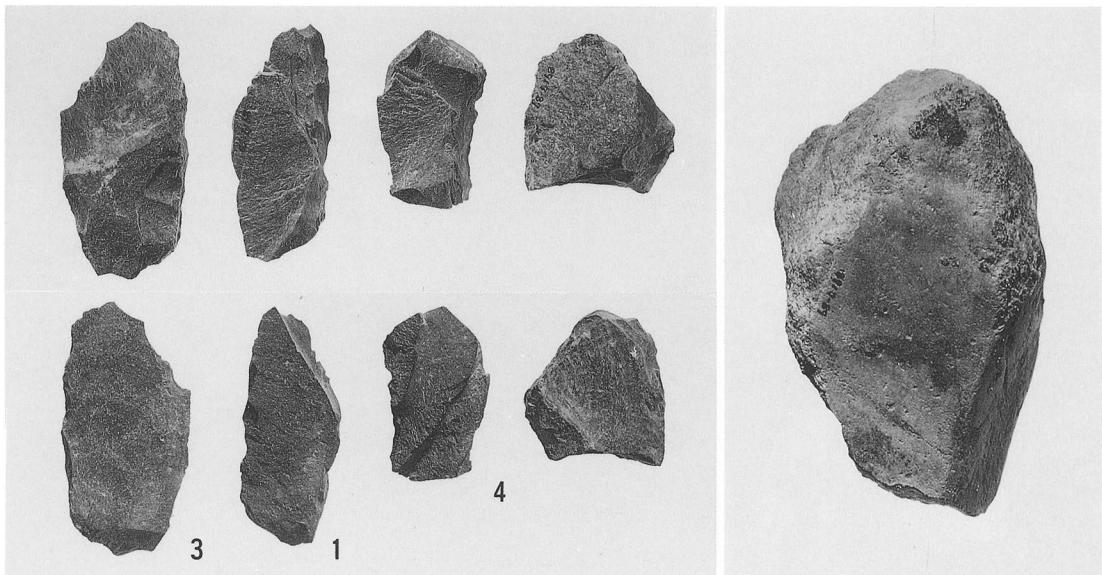
包含層 出土土器



包含層 出土瓦（表）



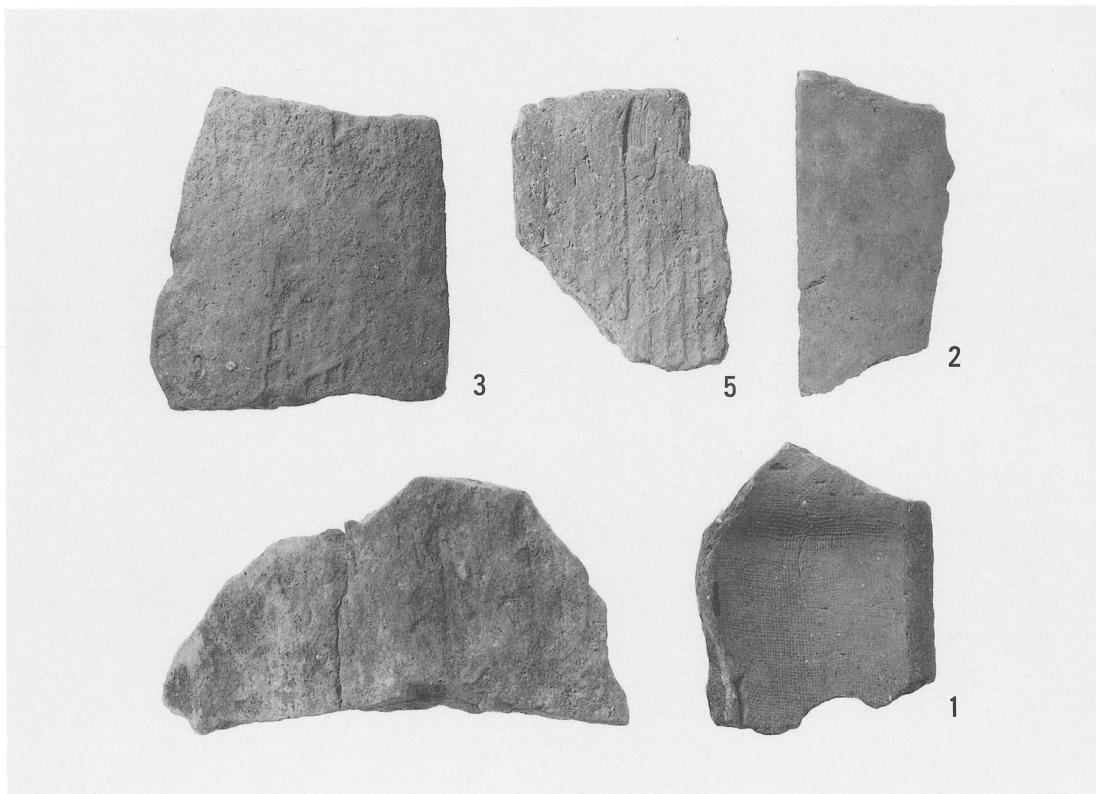
包含層 出土瓦（裏）



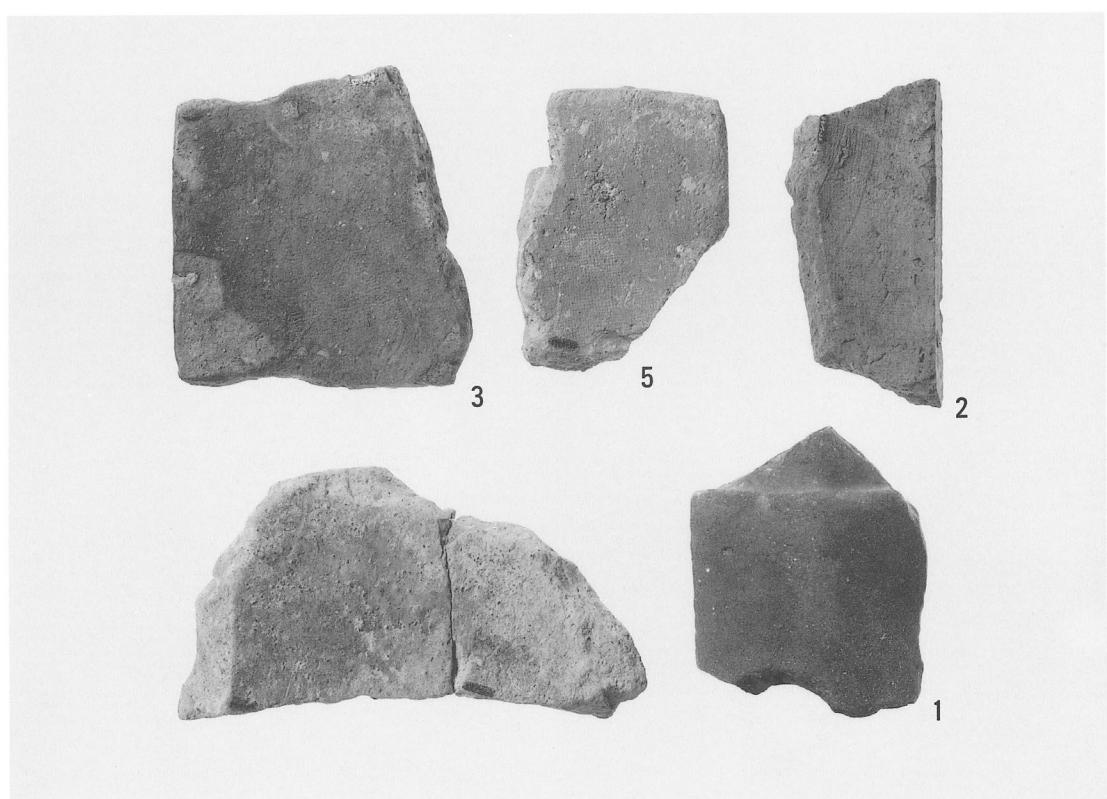
包含層 出土石器・瓦



飯坂調査区 出土土器



飯坂調査区 出土瓦 (表)



飯坂調査区 出土瓦 (裏)

兵庫県文化財調査報告 第90冊

1991年3月30日

890017 落 地 遺 跡

編集 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

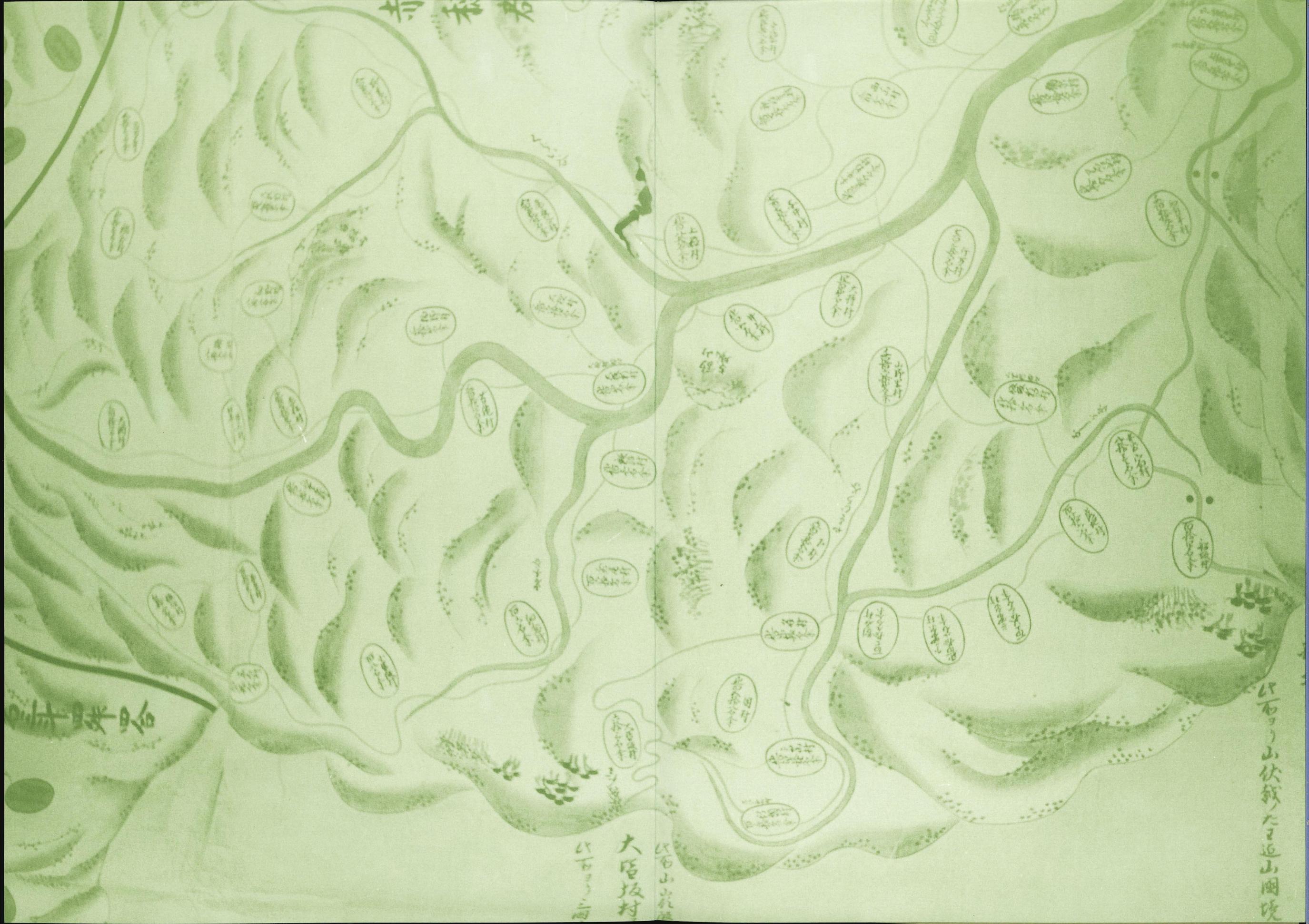
〒652 神戸市兵庫区荒田町2丁目1-5
TEL (078)531-7011

発行 兵 庫 県 教 育 委 員 会

〒650 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号
TEL (078)341-7711

印 刷 光 印 刷 株 式 会 社

〒650 神戸市中央区下山手通2丁目16番12号
TEL (078)321-1551(代)



黒部峡谷山伏鉢たま近山園

大門坂村

八百石上

八百石底

赤木村

十四殊里谷